

# 川柳塔



No. 888

五月号

## 暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお願い申し上げます。

★個人 一口 $\frac{1}{9}$ 頁 二、〇〇〇円

$\frac{1}{6}$ 頁 三、〇〇〇円

★団体 次の四種といたします。  
(氏名・住所・電話番号など掲載)

① $\frac{1}{3}$ 頁 六、〇〇〇円 ③ $\frac{2}{3}$ 頁 一二、〇〇〇円

②半頁 九、〇〇〇円 ④一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 5月23日

〒545-0005 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

TEL 06-6629-6914

川柳塔社

## 大会川柳記念建立句碑乃葭・郎路生麻

除幕式

とき 7月7日(土) 午前10時半から  
ところ 志賀直哉旧居前広場

川柳大会

とき 同日午後1時開会

ところ 尾道市役所公会堂別館

課題と選者(各題2句・投句拝辞)

「踊る」〔事前投句〕堺 市河内 天笑

「晚酌」 大阪市 西出 楓 楽

「似る」 岡山市 木下 草 風

「道」 鳥取市 小林 由多 香

「海」 三原市 八島 白 龍

「情熱」 東広島市 石原 伯 峯

事前投句 6月10日までに葉書に2句

投句先 〒722-8501 尾道市久保1-15-1

尾道市観光文化課宛

○詳細は6月号に発表○

主催 尾道市・川柳塔社

# 路郎句碑

河内 天笑

瀬戸内しまなみ海道が開通して、日本海から太平洋まで総延長約四〇〇キロの、列島横断の街道が出来ました。拠点都市の一つである尾道市に、路郎・葎乃両先生の句碑が建立される経緯については、新年号ですこし触れましたが、いよいよ今年の七月七日(土)に句碑除幕式が行われる運びとなりました。これはひとえに日川協会長仲川たけし氏、尾道市の島本実夫氏、亀田良一市長、そして尾道市産業文化振興部長にこの四月栄進された西岡伸夫氏等の、大いなるご支援の賜と深く感謝の意を表する次第であります。

路郎先生のご息女西村梨里様と名譽主幹そして私の三人が三月十四日、句碑の石選定のため福山市に参りました。東洋石材の応接間で句碑に刻む文字などの打ち合わせを終えたのち、岡山県西大寺近くの工場へ私達の前に現われた石は、高さ一米弱、幅

一・一米ほどで約三〇センチの厚みのあるややさくら色を帯びた石で、「萬成」(まんなり)という名の火成岩だそうです。あたたかみのある表情の石に殆んど即決の形で決まりました。

つづいて三月十九日尾道市役所に名譽主幹と出向き、東広島市の石原伯峯氏、三原市の八島白龍氏、そして竹原市の小島蘭幸氏と尾道市教育次長小田正樹氏を交え、当日の運営の手順、選者と題の決定、そして川柳大会会場の下見等、とんとんと準備が進みました。また、尾道市のご厚意で市役所前の公会堂別館を無料で開放して頂くことも決まり、ただただ感謝感謝の打ち合わせとなり、尾道駅まで送って頂きました。名譽主幹の酸素ボンベを取りに戻る一幕もありましたが、明るいうちに新大阪駅へ帰ることが出来ました。

ここでこれまでに建立された路郎の句碑をご紹介します。第一句碑は木碑で昭和二十五年五月に、大阪市南区饒谷の中島小児科医院の庭に建立されました。

すべりんこ親は涼しいとこで待ち  
第二句碑は奈良県室生村の故上田翠光氏の庭で、昭和二十五年六月に

名も知らぬ山の起伏をうれしがりが建立されました。戦時の昭和十七、八年路郎と葎乃両先生が疎開されていたところだそうです。

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ  
昭和二十五年九月、第三句碑は岡山県弓削町(現在久米南町)、JR津山線弓削駅前建立されています。

第四句碑は同じく岡山県吉永町の不朽洞会員、故大森娯句楽氏宅の前庭に  
古くとも僕には仁義礼智信

が昭和二十六年四月に建立されています。  
第五句碑は平成元年十一月十一日に大阪市の阿部野神社の境内に  
夕桜とんぼがへりがしてみたし

が建立されました。

第六句碑は兵庫県洲本市の洲本勤労センター近くの文学碑の森に建立されています。  
酒とろりとろり大空のころかも  
故大坂形水氏の口ききで、平成三年頃とされています。

そして今回の第七句碑建立が、二十一世紀はじめての七夕の日に決まった次第です。なお、この日が路郎先生のご命日であるのも、意義深いものと思われまます。



座右の句

人恋し人煩わし波の音

私の句

置物になつても父がいる安堵

( 葉 )

大橋 鐘造

# 川柳塔 五月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 路郎句碑……………	河内 天笑……………(1)
泣き羅漢数えて五百一体め……………	仁部 四郎……………(2)
川柳塔(同人吟)……………	河内 天笑選……………(4)
自選集……………	東野 大八……………(58)
川柳の群像 大坂形水……………	板尾 岳人選……………(64)
誹風柳多留二四篇研究 29……………	土橋 螢……………(62)
水煙抄……………	古久保 和子……………(89)
秀句鑑賞 [ 同人吟……………	波多野 五楽庵選……………(90)
水煙抄……………	
愛染帖……………	

## 泣き羅漢数えて

### 五百一体め

仁部 四郎



「温泉や坐りらかむ(羅漢)に寝る羅漢」という句は、川柳塔の仲間にはよく知られている水鶏庵葉先生の句です。

平成五年八月二十一日に、香川県白鳥町に建立された句碑のテレホンカードを持っていく人も多いと思います。「羅漢さん」の見本と言つてよい西尾葉先生のお顔が印象的なカードです。

佐賀と唐津を結ぶJR唐津線に小城(おぎ)という駅があります。そこから西北に三キロぐらい(タクシーで八百円)のところ、祥光山星嚴寺があります。佐賀藩の小城支藩藩主の菩提寺ですが、そこに五百羅漢がありまして。元禄三年にその頃の名石工平川徳兵衛によつて二年がかりで完成されたと伝えられていて、佐賀県内ではかなり有名な史跡の一つです。頭部が欠落しているものもかなりありますが、三百年の風雪に耐えた仏達のたたず

■エッセー 精神安定剤……………	出口セツ子……………	(93)
茴香の花……………	西出楓楽選……………	(94)
「ギャグ」……………	平田実男選……………	(96)
一路集「うかうか」……………	神原 文選……………	(96)
「運 ぶ」……………	相馬一花選……………	(97)
初歩教室「確 か」……………	吐田 公 一……………	(98)
四月本社句会……………	……………	(100)
各地柳壇（佳句地十選／宮本欣史子）……………	……………	(104)
乾隆風さんを悼む！……………	中原 諷 人……………	(120)
柳界展望……………	……………	(121)
五月各地句会案内……………	……………	(122)
■編集後記……………	楓楽・義子……………	(124)

座右の句

恋人の膝は檸檬のまるさかな

（薫 風）

私の句

浴びるほど呑めば亡夫に逢えますか 中井 ア キ



まいは、おのずと入会させざる迫力があります。この仏達を復元するのではなく、平成の献体が地元有志によって推進されています。私は、二月十四日に拝観に行きました。とうとうと言うか、一度はと思っていたことでしたが、やっとうと言うべきことでした。天山（千四十六・二米）の山麓にあるお寺には、雪まじりの強風が吹いて私を励ますかのようであったと言えば、大いに感傷的になります。が、その時の実感でした。

川柳塔社からお話があった、「西尾葉七回忌追悼句会」の選者を引き受けたものの、頂いた題が「羅漢」とあって、私は大いに悩みました。高校で使う国語辞典には、「小乗仏教で、最高の悟りに達した聖者」とありますが、これだけではどうにもイメージがはっきりしません。テレホンカードのことを思い出して取り出してみ、改めて西尾葉先生の句とお顔を見つめました。

それから一週間ほどしてとうとう小城へ行ったのです。在家の凡人でも「羅漢」の域には達することができるのだと聞いたことがあります。その志さえない私が、とにかく拝観してみるべしと決意して、春になるのを待たずに出かけたのでした。そうして得た句が表題の句です。

暖かくなったら、もう一度、すっくりお顔を拝見しようと思っています。



河内天笑選

横浜市 清水潮華

米子市 鷺見正子

ネットから他力を探す生き上手

つまり自分で自分の年と向かい合う

自立心時に孤独にしてしまう

てのひらの重さで選ぶ飯茶碗

春一番洗濯物を二度洗う

死んでから大往生と褒められる

和歌山市 吉村さち子

床上げへ春の音符が弾みだす

自転車で行ける範囲の春の園

万札が左右に春の出費嵩

ときめきを覚え五感はまだ確か

プラス志向今日から光りだす鏡

気力で生きる百八歳の置き土産

キッチンに立って日本を考える

何もかもある東京が住みにくい

熟年離婚 誰も一度は考える

たくさんの涙やさしい人になる

寒い日は一番風呂を譲りあう

愛嬌が足りなくなつたお父ちゃん

鳥取市 倉益一瑤

リハビリの三步こんなに出る涙

姑からのバトンしっかり握り締め

器は小さいそんな自分を知っている

押さないで下さい背伸びしています

波風が怖くてしのび足になる

空缶を蹴るわたくしの影を蹴る

弘前市 高橋 岳水

脇道にそれてから知る裏表

流れ着くものを待つてる終の駅

風光るフレッシユマンの紺スーツ

十指みな自前の夢を持っている

一呼吸おくと己の非に気付く

年巡る度に深まる花の味

東大阪市 谷口 義

わが歳と思えぬ歳を書いている

信念が漲っている屋根瓦

水族館上目づかいの魚たち

年金を戴き札状も書かず

責任の軽い順から昼休み

親不孝だったのにお経上げている

広島市 森田 文

面影に花を眺めて暮れた日々

人生とや手品のように消えた友

どこへでも入って見たい蝸の性

酷いですね豚も羊も何の罪

先生を評価できるか子供たち

ウォーキングのグループに会う暴走車

堺市 村上 玄也

やいやいと言われ誤作動起こす脳

間違いはないが魅力のないお人

輝いた日の影もなし濡れ落ち葉

おとなしくなった助手席眠ってる

義理チョコもついに孫からだけとなり

警官も教師も医者も道はずす

箕面市 岩津 ようじ

破算した町工場にも花吹雪

飼いたい犬が犬より先に死にそう

大島というもらい手のない形見

生き恥をさらす診察泌尿器科

涙と涎いずれが温きものなりや

所帯染みなお美しきあの女

八尾市 畠村 上剛 治

言葉の裏にやさしい嘘が溶けている

同じ夢夫婦で追っている縁

安売りの風邪ぐすりでも効くやろか

断りがうまいな苦勞したらしい

今日と明日つないでくれるコップ酒

どうしても覗いてみたい暗い穴

和歌山市 川上 大輪

人生時計私は丁度お昼過ぎ

隙のある人に配っているティッシュ

ちよつとだけよとお宝を見せてくれ

欠席をすると肩書増えそう

突風が吹く人生の交差点

そんなバカなことがこの世にあるのです

和歌山市 古久保 和子

お下がりのそのお下がりへ次女三女  
先生の携帯も鳴る授業中  
香典袋の買い置きだけは切らせない

落書きといえど領く事もある  
劇薬と書いてこっそり飲んでる

お茶漬を清水焼で食べる幸

青森県 西谷 大吾

出稼ぎが戻るとどける雪だるま  
地吹雪を忘れたように春が来る

山頭火とぶらり旅立つ春の雲  
人情がゆっくりと押す車椅子

プライドを捨ててゆるゆる峠道  
日めくりに追われるように生きている

富山市 舟 渡 杏花

放つておいても枯れない花と思うたに  
人間をまだやめられぬ土下座です

運使い果し流浪の握りめし  
猫もわたしも浮き足の立つはるや春

リハビリの汗子のお荷物になるまいぞ  
自信過剰の靴花道をすっこける

横浜市 菱 田 満 秋

代筆で知る病状がなまなまし  
親にさえ叩かれなくていじめられ

わかちあう痛みは持たぬ見舞客

ひさしぶり晴れると家事が山とある  
中流の衣食を中国産が占め  
文明の尺度はゴミの量がきめ

川崎市 和泉 あかり

家中の窓開けさせて春がくる  
仏壇の灯はいやいやをして消され

電話していると元気がよみがえる  
親離れ子離れ身体軽くなる

洗っても介護の悔いのシミ抜けず  
表情の豊かな雲は足速い

京都府 丹後屋 肇

大河の一滴たらん投票日  
啓蟄を狙い打ちする雪礫

お誘いに化粧の乗りがもどかしい  
一喝でざわめきを断つ初講義

短冊の我が句見返る通り抜け  
ゴーグルとマスクで武装の花粉症

和歌山市 細川 稚代

愛と言う手間ひまかけた母の味  
白菜が味よく漬かりお裾分け

欠点が美点に変る華燭の宴  
御仏飯高々と盛るうれしい日

メリハリのない一日で歯を磨く  
再会を約すコーヒー熱い目に

和歌山市 福本英子

あすなるのままで春待つ甘ったれ

押し入れも心の傷も整理下手

赦そうか蝶に羽化して戻るまで

改札を出れば首輪が待っている

へそくりを狭んだ本が棚に無い

鑑定団に見せたくはない家の軸

海南市 三宅保州

喋ることよりも黙秘の難しさ

一の矢は的を外している策士

檻のありがたみは檻を出てわかる

パソコンもケータイも持ち不眠症

定年という難しいお年頃

新しいうちは雑巾らしくない

唐津市 宗水笑

千年はほんの微睡みカブトガニ

ネクタイを捨てて軍手の爽やかさ

庭の梅ツアー帰りを咲いて待つ

達者かと国賓並みの握手する

酒二合呑めば治まる世の矛盾

借金も程よくあって張りがある

香川県 川崎ひかり

点滴が生きろ生きろと落ちてくる

口八丁だけになったねおばあちゃん

少し呆け少し正気な紙オムツ

なん歳になっても恐い注射針

逝く時はありがとうねと言いたいね

こぼれ種大地のぬくみ信じてる

香川県 池内かおり

院長も困った事に花粉症

ぜんざいの餅をこんがり焼いている

薬局の奥さんも来た診察日

お隣の合鍵たまに持たされる

気を付けて帰れと九十二に言われ

深入りはしない仲間で長つづき

香川県 瀧井勝

定年の夫に買わず花の種類

十指には変りはないが得手不得手

手術台麻酔効いたら運まかせ

楽しくて手間を惜しまぬ菜園地

型崩れしたが元気に生きてます

お世辞だと判っていても弾む独楽

松山市 宮尾みのり

真ん中で自我は上手に消してます

外面の良いレッテルを持ち歩く

一步また一步わたしも暮れかかる

肩書きは無いが在野の知恵袋

きっちりとした人腹もすぐに立て

人間もやがて番号つけられる

竹原市 森井菁居

味の無いメニューに春の味をつけ  
缶詰の桃 缶詰の味がする

腎臓と言われて食べる物が無し  
若き日の素描に軌跡見え隠れ

台頭のヤングに光るものが満つ  
入試済むまでは込んでる資料館

宇部市 平田実男

返したら罪にならないとはおかし  
尻尾踏んでも怒ってくれぬタイガース

気力まで減ってしまったダイエツト  
諺のように回ってくれぬ金

善人の嘘は言わないうちには  
亡父にはまだ追いつけぬ背の広さ

鳥取市 岸本孝子

自己主張すぎて空気が重くなる  
電気ガスよしよしと床につく

税務署が親切すぎてこそばゆい  
老いてなおルールブックのような姑

どの花も自分の分を知って咲き  
友はみな私の短所知っている

鳥取県 新家完司

こころ平らかにんげんに会わない日  
いのちほんわかポケットに銭がある

お日柄もよろしくみんな化けてきた

牛のモツ食べて目玉を光らせる  
憎しみはこころをバクリバクリ食う  
今死ぬと都合の悪いことがある

出雲市 板垣草丘

鶯に田の字の間取り見てももらい  
春を摘む包丁についた春の土

縁談を一冬抱いてなお迷い  
わらび採る前に焼きたい畔がある

松枯れを知るや知らずや山桜  
出欠はその日でないといわらない

出雲市 岸桂子

掌の窪みに春がのっている  
足音の揃わぬままに春になる

カーテンがまだ眠ってる日曜日  
こだわった分だけいつも負けている

外来語溢れて老いの舌もつれ  
失敗もする人だから握手する

出雲市 城多喜

桜もち春が欲しくて買ってくる  
ゆさぶるとことりこりと胸の音

人恋しフーフー熱いレモンティー  
苦手だな肌のそぐわぬ人の傍

切り張りをして辻褃を合わせておく  
わたくしが生まれ変わる種を播く

尼崎市 田 辺 鹿 太

墮落した影がネオンを恋しが  
意地がないから遠吠えをするばかり  
口裏を合わせ煮え湯を飲まされる  
父からの遺伝子だろうどんくさい  
あたたかく見守るだけの恋もある  
病人よりナースの咳が気に掛かる

川西市 西 内 朋 月

春うららひねもす過ごす競馬場  
よめはんが死にましてんと軽く言い  
春一番こころの壁を立ててなおす  
酔い醒めに熱いラーメン食う屋台  
デフレには年金ぐらし悪くない  
冷凍の飯をチンする春の夜

八尾市 宮 崎 シマ子

女の部屋桃一枝のひなまつり  
風邪三日脳みそ三日分錆びる  
やさしいので鬼と結婚してしまふ  
七人の敵よ味方も同じ数  
一病息災 私長生きしすぎてる  
表情を盗まれそれで目をつむる

八尾市 吉 村 一 風

年の順言うて上座へ座らされ  
鮮やかだ心若やく寒ばたん  
春うららおニューのハットとばされる

春の風拳に包み孫誕生

繩のれんこは元気な雑魚の群れ  
ぬくなつたから歩きなはれと追い出され

羽曳野市 徳 山 みつこ

スイトピー マーガレットを盛って春  
リベートはつかみ取りだよ機密だよ  
棒読みのお詫び心に響かない  
三つほど年とりました風邪三日  
老いの坂へかかったらしい膝のスト  
私も心全開 春だもの

藤井寺市 高 田 美代子

春眠へ野暮な目覚まし鳴り続け  
引つ越しの荷物が走る年度末  
オクターブ上げて桜がわつと咲き  
お土産にグイヤをくれた人がいる  
回転寿司を前にキョロキョロしてしまい  
叶姉妹の乳房なにやら嘘つぽい

岸和田市 原 さよ子

働ける幸せがあり日々楽し  
ぶつぶつとぼやきながらも尽くしてる  
子の一言心満ちたり痛んだら  
歯ざわりも香りも嬉し柚子なます  
なにくそと思うが体ついてこそ  
休憩のたびに土産の数が増え

大阪府 八十田 洞 庵

風説んだ男決意の朝を出る  
オンブズマン渦の深さを許せない  
ぬくぬくと暮らし明日を見失う  
自立する女未練を捨ててくる  
チェーンソーに森の住人騒ぎ出す  
思い切り甘えて恋のプロローグ

河内長野市 加 島 由 一

もう少し飲んで断ることに決め  
ご近所じやいい子でしたと言う話  
手袋を春のベンチに置き忘れ  
親戚代表 祝辞のメモを探して  
プロポーズこれは真剣勝負です  
春なかば子に就職の予定なし

松原市 小 池 しげお

クモの巣にクモが居るときいないとき  
きんぴらごぼう辛いところが母の味  
へそくりをびっくり箱に入れておく  
上にぎりふたりで食べるからうまい  
悪人を通したことを恥じてない  
腹の虫おさえて草を引いている

豊中市 安 藤 寿美子

熟年のカップル多い寺の庭  
壁画見にひとり気楽な西の京  
求道者としての画伯の清しい目

春の雪 平山郁夫の本抱いて

夢さめて手酌の酒をそっと干す  
老いひとり寒のもどりに負けはせぬ

堺 市 志 田 千 代

春や春 お年寄でも寝坊する

百万円越えてもタンス預金する

最後の晚餐 炊きたて御飯お味噌汁

恋猫は鈴を失い戻りけり

洗車すると前線が近づいてくる

目を伏せた途端に指名されました

堺 市 桑 原 道 夫

蛇口から水飲む青空を睨み

いつから宙に止まったままの三度笠

日本刀の反り身 色男の反り身

針金がこんがらがって捨ててある

大人みな昼寝しているさびしさよ

硝子戸の曇り 駄菓子屋閉店中

堺 市 宮 本 かりん

曲がりくねって未来へ歩む蕾たち

緊張の扉が涙せき止める

言葉では愛の深さは計れない

娘のきつい言葉じんわり効いてくる

バスツアー二泊三日の友が出来る

スローモーな指よ気が急いでいるのに

砂川市 大橋 政良

弘前市 櫻庭 順風

俸せに神を忘れておりました  
慰めるだけでそこから踏み込まぬ  
才能をひと言 運とかたづけろ

雪受けて津軽もぐらに似る暮し  
達者だね五屯の雪にもぐら耐え  
朝刊が頭上走ると夜が明ける

美辞麗句並べて嘘に縛られる

この辺で幕にしまししょう馬鹿ばやし

二階から気を取り直し出入りする  
手も足も凍てつかないと飛ばぬ風

弘前市 高瀬 霜石

弘前市 福士 慕情

飴玉とジョークはいつもポケットに  
古狸たちから古い話聞く

悲しみを幾度も乗り越えた車輪  
介護保険勉強せずに暮らしたい

ライバルもこっそり薬飲んでる

マネキンが試着どうぞと呼び止める

弘前市 宮崎 ヒサ子

アンケート粗品進呈記入する  
はずれてもショックは受けぬ宝くじ  
津軽三味 津軽で聞いて酔っている  
家事万端 妻の動きにそつがない  
そわそわと探し求めた化粧室

雪に飽いたか春の噂が戸を叩く  
桜咲く話だけでも気が弾む

顔に合う春のフレーム探します

字余りの一字に今日が暮れかかる

春一番きびしい冬をノックする

弘前市 今 愁女

花鉄私情がからむバラの刺  
古里の訛りで帰る無人駅  
輪を抜けてひとりで歩く蟹の泡  
哀愁の演歌に酒が溶けすぎる  
満天の星と数えてみる出会い

ながい冬明るくなってクロッカス  
つぶやくよな埴輪の目あり春の宵

せせらぎが春の音符になった朝

春彼岸お墓に残る雪の山

弘前市 小寺 花峯

弘前市 須郷井蛙

国会は悪事の追及ばかりする  
美術館無理につれられ団体旗  
何故かしら鯨の肉を売っている  
残りものいっぱいあるが買ってくる  
酒飲める体に戻り皆安堵

弘前市 一戸ツネ

古い因果知って無口な具になる  
ひとことの重みに泣いて旅に出る  
表札に黒い轍の跡がある  
今更に過去の絆に詫びを言う  
因と果の隙間をくぐる私小説

黒石市 千葉風樹

轢死者がこんなに綺麗こぼれ萩  
弟の焼けた匂いと風の音  
まだ箸を持ってぬこの子が拾う骨  
ずかずかと土足でやって来る朝日  
夢裏返る逆縁の白い骨

黒石市 相馬一花

この歳になれば夫の禿も好き  
酒焼けをゲートボールのせいにする  
夫とはラブシーンのない大女優  
依存症恐れて妻はお酌せぬ  
無砂糖のコーヒーを飲む瘦せ我慢

十和田市 阿部進

見逃すな子供の出したSOS  
不倫でも愛はやっぱり愛である  
年のせいばかりではない物忘れ  
人生の節目節目に母が居る  
お金とは汗水流し作るもの

富山市 酒井輝

母に出す便り訛りを文字にする  
嘘吐きを赦しはしない埴輪の眼  
万札が紙屑になる怖い夢  
膝おさえヨイショで立てば今日になる  
お互いに馬鹿な夫婦で無事に老い

富山市 島ひかる

三月九日大雪となる誕生日  
わたしの名 恋人岬から聴こえ  
まだ蝶になれぬ泳ぎのバタフライ  
助手席を降りて不安な一人旅  
好き好きと言って言われて共白髪

大宮市 八田敏

同期会 老人会と間違われ  
車椅子からの指図で今日も暮れ  
本物が飼えぬ住まいでアイボ飼  
語り部に大正生れも加えられ  
引越して三年がらくた溜りだす

静岡県 園田 猿 杵

三月にまだ着ぶくれて春遠し  
年金をねだりに合格言いに来る  
手抜きした料理腰痛秘めている  
寒風に別れを計るタイミング  
着ぶくれの一枚父の遺しもの

東京都 後藤 早 智

梅の香につられ天神景気づき(湯島天満宮)  
ラン展が春の序曲を轟かせ(東京ドーム)  
春謳歌ずいぶん食べた桜餅  
小さ目のひな買い足して祝う宵  
春の陽に暗い話は押しやられ

東京都 播本 充子

心して発言しよう水ぬるむ  
豆御飯 二男坊に嫁がくる  
限定に並ぶ貴方も食いしんぼ  
ライバルはパフォーマンスに長けている  
強さの秘密かヨガ式呼吸法

横浜市 菊地 政 勝

ひと時を無口にさせる絵画展  
リユーマチの脚が告げてる雨予報  
忠告を素直に聞けぬ歳となり  
怒涛見るおんなも何故か腕を組み  
かしわ手の参拝 寺と知らされる

横浜市 小野 句多留

潮騒を遠く聞いてる倦怠期  
大買ってから急かされる万歩計  
携帯を忘れ彼女と今日会えず  
火の元が気になり出して引き返し  
声の人会って崩れた白昼夢

愛知県 早川 盛 夫

きっぱりと酒は断る免許証  
名店の味を盗みに通う客  
カニを食う後ろ姿の隙だらけ  
刑務所のめしだが食べたことが無い  
まっ赤つか英訳するとレッドツッド

可見市 板山 まみ子

手離せぬわけではないがまだ一人  
三十を過ぎた仲良し皆一人  
夕方のタイムサーピス最真にし  
話さずに一日過ぎることがあり  
頑丈が自慢の体あてにされ

京都市 小西 未佐子

良縁に恵まれ古き雛送り  
お茶券に釣られ梅見の天神さん  
洒落わかる医者で今度は続きそう  
占いに頼れる人は素直だな  
籠松明遙かかなたの外野席

京都市 高島啓子

孫が来て風呂場はパツと夏の浜

亀岡市 井上森生

一日に三分だけは神になる

お題目近頃少し節を付け

何故花がかくも祟るか花粉症

新世紀の春はここから二月堂

京都市 山海友照 奈良市 米田恭昌

奈良町を歩けば昔そこかしこ

看板が嫁いで店がたたまれる

パトロンが支えてくれた小さい店

探し物ばかりしている仮住い

トイレから子鴨眺めて春を待つ

京都市 都倉求芽 奈良県 渡辺富子

お色気が春風に乗る技芸天

しなやかに揺れて君待つ花の首

ほんのりと温い輪できるお人柄

カルチャーのちらしへ妻は向き直る

文明にこんなにあつた負の遺産

京都市 稲葉冬葉 檀原市 居谷真理子

午後三時ぐれてやろうかブランデー

恋人は不眠私はよく眠る

うすあげとなつば夫婦で老いていく

花の名も知らず力んでいる肩だ

時々泣いて体を軽くする

オリオン座しばらくテレビ休ませる

行く末は思わずご飯食べて寝る

屋根だけはお伽の国のクレムリン

胸はつて鳩が見おろす本願寺

蜘蛛の糸浅き縁の人ばかり

京都市 山海友照

目に青葉泣いてはならぬ訳があり

朝までに済ませよう心のせんだく

悩みごと聞いて下さい高瀬川

鴨川の流れが愚知を聞いてくれ

鳥籠に播り餌たっぷり呼んでみる

京都市 都倉求芽

ペーパーテストだけで日本が牛耳られ

転がってからは頑固を捨てた石

美しい夢にも未練なしシャボン玉

約束のたびに遅しくなる小指

会社ではロボットの縫いぐるみ着てやろか

京都市 稲葉冬葉

寒中托鉢 思わず最敬礼

六根清浄 高野山頂遠かりき

愚痴捨てに行く環状線が混んでいる

お手前もよろしいようで白い足袋

学歴を問わず仲間にしてくれる

大和郡山市 坊 農 柳 弘

初孫の命名親父の筆躍る

ふる里の母の香りの新茶来る

通り抜け浪速の春のページェント

浪速五輪 試行錯誤のPR

菜種梅雨アバンチュールな赤い傘

大和高田市 岸 本 豊平次

海老てんの衣の技が誉められる

カタカナの料理におふくろの味を恋い

包み紙指に柔らか蓬餅

山茶花が散り敷く庭に日脚のび

大根は花が咲いたら捨てられる

香芝市 大 内 朝 子

アングルをかえて喜劇にした悲劇

クツシヨンの役 母さんのいい笑顔

愚かとも馬鹿とも思いつつ固執

色即是空 食欲だけはもーりもり

人生の午後をゆたかなるふたり

和歌山市 青 枝 鉄 治

アンカーに渡されほっとする襷

マンガから得た博学を鼻にかけ

北斎に逢いたく渋の湯を訪ね

初雪が汚職の家も白くする

欲のない男に魔法かからない

和歌山市 木 本 朱 夏

焼け跡に春がちいさく背伸びする

はなびらは白くかじかみお水取り

ちよっと押しメロン機の嫌聞いてみる

ケータイに右往左往の父である

しょうが湯の情けに冬を越せそうだ

和歌山市 田 中 み ね

男前に惹かれて通う整骨院

自己主張いと鮮やかに五色豆

蔵元へ嫁いでからの左利き

食欲が物言う妻の食べっ振り

親切の押し売りだけはせぬように

和歌山市 玉 置 当 代

花よりも団子 昆布茶のお持て成し

春一番 私の憂さも吹き飛ばせ

ITで伴侶を探す新世代

老舗の灯消えると街も錆びてゆく

行間の伏せ字に本音秘めてある

和歌山市 西 山 幸

おしくらまんじゅう私一人が押し出され

あやふやな台詞を喋る九官鳥

酔うている演技で春をやりすごす

ときどきは旗も振りたくい願示欲

助手席の指図がすこし高慢だ

和歌山市 桜井千秀

躓けば非難 善ければ当たり前

ぼかばか陽気部屋の汚れがよく目立つ

好き嫌いあってこの句の上手下手

アンケートペンに任せた無責任

テクニク人真似だけは避けておく

和歌山市 楠見章子

春うらら催眠術にすぐかかる

ホールより熱い駅前ミュージシャン

スギ ヒノキよりもIＴアレルギー

定年の夫は借りてきた猫に

怒ってる証こめかみ動いてる

和歌山市 榎原公子

ハートのエースを誰にあげよう春おぼろ

一つ去り一つ燻る春嵐

だんだんと母似悩むのはやめる

やんごとない話は棚に積んでおく

浴びるほど飲んで流せるものでなし

和歌山市 松原寿子

疵ついた翼まだまだ炎えている

カクテルが流れを変えてからの酔い

矢印の先から迫ってくる荒野

両腕という受け皿に甘えよう

胸のうち覗かれまいと朱線引く

和歌山市 福井桂香

果物屋 八百屋も四季が巡らない

弓張りの月におとこは憧れる

欠点を晒し兎は楽になり

妥協した足でグズグズ従いてくる

梯子しようメロンパン いちこパン

和歌山市 山根めぐみ

白菜に抱かれて満ちる唐辛子

木の葉髪かくすつもりのマチコ巻き

着ぶくれのどこかで電話鳴っている

荒れ球に君の健康不足知る

目つぶしを食らってかゆい花粉症

和歌山県 中後清史

ワインドローを覗く女に歳はない

欲一つ捨てて小さな旅に出る

冷戦が尾を曳いている朝の靴

法人に特殊を載せた不信感

癒着する構図が殻を厚くする

唐津市 山門幸夫

花の咲く大根一本残しけり

進学期爺は補正の子算組み

ひよっとして恋しているよお婆ちゃん

受験の日母かつ弁当をつくってる

間に合わずまだ温かった老友の手よ

唐津市 久保正剣

胃袋と口は達者で医者通い  
煩惱が弥陀の誘いに領かず

チョコレートなどはなかったキャディーの目

いちやもんが付いて史実が曲げられる

人生のスタートゼッケン足の裏

唐津市 仁部四郎

退職をしてもあだ名で呼んでくれ

順番で大臣になりすぐ墜ちる

前歴は消えず背骨に溶け込んだ

どの肩を持つか憲法よく読んで

憲法を変えて勲章穫るつもり

唐津市 樋口輝夫

望まれて入った会社倒産し

政治家を褒めるニュースに出会いたい

喫わぬのに隣に煙たい奴が居る

そう言えば「あなた」と呼ばれたことが無い

ゴミ袋名前大書の律義者

唐津市 山口高明

巡拝の帰り購う高野楨

教会のチャペル仏滅気にしない

泥んこになって体験田植の子

カルチャーの画伯はヌード描きたがり

人間の尊厳啜う地のマグマ

唐津市 市丸晴翠

朝の床健康チェックゴーサイン

信号待ち背筋を伸ばせ受験生

平凡な一日 白い日記閉じ

救われた命 献血車に並ぶ

自己主張詰めて分厚い肩パッド

熊本市 永田俊子

ファミコンは知らぬが耳は立てている

ロボットが内緒話をする不況

自己満足真冬の女のノースリーブ

少女が覗く鏡の奥にある未来

嫌な話強く振り切る傘雫

熊本県 岩切康子

誰となく発信したい嬉しい日

腰掛けて何もしないと眠くなる

遠慮ない批評にぎよつと身が縮む

幻の椿ハガキに写生して

よい返事はかりするから忙しい

熊本県 高野宵草

ランドセル道なき道を行きたがり

さよならのあとの言葉が長電話

炊きたてのごはんの湯気に貧乏れ

夢枕父にうれしく叱られる

みな食べていいかと若さうらやまし

北九州市 梅田宣司

税務署に勝気な妻を差し向ける  
借景にあちらを向いた山がある  
飲まずして酔う達人の隠し芸  
父と酌む学び残りのないように  
汗くさい匂い忘れた万歩計

高知県 赤川菊野

キサラギの寒風ついて計の知らせ  
いやなものばかり見えて目を閉じる  
地球儀を回せば心旅の空

豪雪の怖さは知らぬ土佐育ち  
肉じゃがの向こうに亡母の顔がある

高知県 小澤幸泉

父いまだ孤独になれず子に甘え  
娘が家出妻が別居で新世紀

哀しみを置き忘れてる老いの酒  
ジュウジュウと焼肉やいて涙ぐむ

高知県 北川竹萌

戻るかも知らぬ娘を待ちつつけ

同人会別れて二日目の喪服  
言いたそう少し遠慮の笑顔かも

百合の芽の出る頃気付き鉢移す  
欲捨てる少し小銭が溜りだす  
迷惑をかけぬ一途のわが命

香川県 清川玲子

こんびらの歌舞伎の誘い春便り  
同郷の宴はうどんで締めくくる  
医のモラル乱れて命軽視され  
価値観の違う二人の肩の凝り  
農に一途な父に誇れる力こぶ

香川県 成重放任

五十路過ぎあの柳腰どこいった  
嘴の青さが消えて一人立ち  
工事終えや々と静けさ取りもどし  
国会の質問金で買う日本  
久し振り青天井に背伸びする

松山市 丹下美津子

春ですね梅満開へ誘われる  
目白ウグイス会いに来ました梅林へ  
早婚で姉妹ですかと間違われ  
旗いろを見ながら酒の席を変え  
無視されていいですこれで腹決まる

愛媛県 中居善信

ぼんやりと僕の居場所が見えてきた  
秋刀魚焼きながら生き方思ってる  
棘のある言葉は無視をしています  
七回忌父は成仏しただろう  
手を取って駆け落ちすれば楽だろう

美祿市 安平次 弘道

失恋に泣くのは男かも知れぬ  
未練などないがブランコ揺れ止まず

夢だけはいつも持つてる空財布  
禁猟区に遺言状が落ちていた

二の足を踏むから舟に乗り遅れ

岡山県 小林 妻子

桃もさくらも一度に咲いて里の春

腕自慢 匠の技に歳がない

停年もりストラもなし僕の職

後編は女ばかりの中にいる

思い違い手でも洗ってみることにだ

岡山県 矢内 寿恵子

縁とや契り通した夫婦花

何時果てる命がピタミン カルシウム

シナリオを変えてみようか古希の坂

栄進の辞令と訪うた父の墓

十七歳 凶器が光る白い闇

岡山県 山本 玉恵

ワntenポずれても通じ合う二人

ITに程遠く居るくらし向き

世渡りの嘘も時効になった老い

小走りの下駄が運んだ佳いはなし

腹すえて返事をせねば捨てられる

岡山県 大石 あすなろ

お隣が揉める全身耳になる  
新しい風に話題をさらわれる

帰化をした横文字ならば分るかも  
見ぬふりをしても火の粉は飛んで来る

青春を探す四月の風の中

岡山県 福原 悦子

昨日の悔い胸におさめて朝の靴

この切符一枚にある物語

方針は少し違うが嫁と和す

苦しかった記憶 明日の杖にする

鍋焦げる匂いで気付く長電話

岡山県 富坂 志重

老いの坂のぼりて視野がうすくなり

奥の手をてんでに持って平和です

少子化へすまぬと思ひ生きている

親負かす筋の通った子の主張

賢者愚者みんな同んなじ土になる

岡山市 井上 柳五郎

啓蟄の虫驚かす春の雪

空家の庭早咲き桜凍え咲き

なだめ役叱る役いて輪を保ち

朝の酒二人一本旅の膳

すこし照れシルバースhirt浅く掛け

岡山市 川端柳子

ジャンケンのパーに包まれ恙なし

山峡に咲いて誰にも会えぬ花

胸の内 鬼と仏がする戦

ささやかな夢と上手におつきあい

話したくなるまで待とう草芽吹く

倉敷市 小野克枝

許されて許して囲む丸い膳

核心に触れると風はまわれ右

大学へ行くから車買えと言う

愛情の綱引き 続々いい親子

細くとも切れぬ絆を締め直す

倉敷市 井上富子

美しい星とデュエットして眠る

坪庭を花一杯にしてくらす

うつむいた花は悩みを抱えている

ポケットで多情な鈴が鳴っている

虎の子をポンとはたいて衣替え

竹原市 小島蘭幸

不器用な父 不器用な僕がいる

Uターンする娘に拍手してしまふ

散歩から帰ると犬も水を飲む

酒も煙草も女も父を越えられず

おふくろと父の墓前にいてぬくし

竹原市 三宅不朽

新世紀やっぱり茶しか飲めぬ父

枯れたいように枯れ立ち枯れの尊厳死

落日の炎となりし金魚鉢

内股で歩き男を掌に乗せる

春うらら目玉商品買う日なり

竹原市 時広一路

プランター一つ一つに小さい春

早足で元氣いい日の腹時計

お互いにもう血圧は上げまいよ

卵酒お前が好きだから頼む

箒目に自己満足の朝がある

竹原市 古谷節夫

政治家の辞書に民の字消えている

無党派よスクラム組もう新世紀

申告書真面目に書いて税取られ

空き店舗目立ち高齢進む町

先輩をライバルと決め湧くフアイト

竹原市 岩本笑子

動くものあり春はすぐそこに

三月の雪人間をあわてさせ

信じるものあり蓄ほころびぬ

中腹で考え込んでいる地蔵

掛け声かけて山を登っているんです

広島県 藤 解 静 風

人材を不況の風が遊ばせる

置いてけぼりにされているのは知っている

帰るところあつて旅する渡り鳥

初恋を思い出させる袖子におう

切り札を出した時から負けている

出雲市 園 山 多賀子

忘却に笑い袋を脹らます

春の雨虚し味読の本がある

藁一本摺むチャンスに未だ惑う

春浅し積木崩しの刑に逢う

つつましい伴せ希う花すみれ

出雲市 坂 垣 夢 醉

小石投げ相手の波紋じつと見る

靴の蟻お前もバスに乗る気かえ

行かれぬと電話でボンと振り切られ

焼肉とキムチでソウル初夜を終え

点滴が梅粥もらい涙ぐむ

出雲市 小 玉 満 江

転んでもただでは起きぬおばあちゃん

お葬式 花輪の名前吟味する

私を楽しくさせた古日記

日曜日のお孫の孫と庭掃除

窓側へ大切な人座らせる

出雲市 竹 治 ちかし

フアイティングポーズを取ったまま消える

泣き顔も笑った顔も王子様

妻の居ぬ部屋が無口になつていく

春光に思わず弾む予定表

新世紀電波に溺れそうになる

出雲市 佐 藤 治 代

嘘一つついて女の奇麗ごと

悲しみが消えるとこまで駆け抜ける

年金のことばそぼそとそぼそと

わたくしにエールを送るのも私

留守番の夫に妻の遠歩き

出雲市 富 田 蘭 水

荒れ狂う海にも私の詩がある

二人して飲む美味しい酒わけがある

じつくりと心の地図をのぼして

びつしりとつまった行事に感謝する

日々話す人形 私を若くする

出雲市 小 白 金 房 子

彼岸桜咲いてあの子の忌が巡る

くされ縁五十五年の根をおろす

薬いらす日毎感謝の数珠をくる

ログハウス木の香いっぱい娘の新居

仲間割れ繕う針が見当らぬ

出雲市 吉岡 きみえ

もつれ糸といて春には編み上げる

Aさんと噂のたねに春の午後

恋猫のミーちゃん寒さなんのその

昨日よりまたまた伸びた芽の生氣

花かごを背負いにぎやか島なまり

出雲市 久谷 まこと

生かされている有難さすぐ忘れ

短い日長い日もある老い二人

自分史の抜けた部分に見る本音

サイコロに振り分けられている運命

仏像に睨まれている不信心

島根県 堀江 正朗

白い杖握りしめても闇は闇

和の中で卒寿を生かす耳頼る

達磨よりまだ失明していても

健康に挑む廊下の一万歩

盲人も今を宝にして動く

島根県 堀江 芳子

未完成だから歩ける夫婦箸

親離れせぬ子のように戦盲よ

つい昨日そんな気のする夫といる

ひと言を飲んで返しておく笑顔

ごめんなさい素直に言えて嬉しいな

島根県 伊藤 寿美

ミモザ咲く街ロザンナに似たガイド(ローマにて 3句)

タクシーガイド ローマの休日突っ走る

ローマまで花粉症が従いてきた

順風へ味方が投げってきた小石

糟糠の妻がマグマを抱いている

島根県 森 茂美

袴足がちよっぴり匂う春の妻

庭の雪片付けて飲むお茶の味

ピーポーが忙しく走る犬吠える

印象のうすれぬうちに書いておく

素人が舵を握れば怪我をする

島根県 榑原 秀子

春一番知らずに暮れた閉籠り

啓蟄ときく日も舞っている小雪

御都合でこの頃年のせいにする

黄砂降る私の町も黄砂降る

友だちにしてねといたたくぬいぐるみ

松江市 佐野木 みえ

旅カバン春が来たので落着かず

童心に戻りうさぎと戯れる

焼芋がふっくら出来てお茶にする

五十肩 雪の降る日は人恋し

夕映えの中へ沈んで朱を流す(柳友死す)

松江市 銭山昌枝

鳥取市 岩原喬水

居て欲しい客に羊羹厚く切る  
励ますのも羽目を外すのも仲間  
堂々と13号着る皮下脂肪

プライドと見栄が財布に無理させる  
三度目の浮気自信もついて来た  
外人の方が日本語上手です

言い遣す言葉ノートに書き溜める  
面倒も見たが生き甲斐くれた孫

高官よバレる賄賂は受取るな  
満点の嫁がそろそろ馬脚出す

鳥取市 夏目健一

鳥取市 武田帆雀

きっかけが欲しくてお世辞言ってみる  
裏山に吠えて符を受けとめる

勝ち馬に乗ると弱者が邪魔になる  
先制パンチ伊達に生やした髭じやない  
酒少し回ると小気味好い意見

定年は終着駅で始発駅

大人しく見せてチクリと刺す女

飼い犬が野犬の道を志望する  
情熱がひらひらと舞い鳥となる

花の土よく売れ出した春が来た

鳥取市 田賀八千代

鳥取市 近藤佳子

七変化今日ほどの面付けようか  
露の臺動くと春の風になる

火鉢囲み餅焼いた友皆とおく  
人嫌い逢う予定なしでも化粧  
老いました地図帳買って旅のまね

大臣になるといじめの的になる  
少しずつ影薄くして去る準備

バスポートいいえ日本もよく知らぬ  
店じまい八割引きをまだ選って

春風に油断し罪をまた一つ

満開の桜にいのち磨かれる  
四捨五入されてわたしの席がない

鳥取市 西村黙光

鳥取市 福田登美

喜寿祝い息子等温泉プレゼント  
子供等の熱き想いにハート燃ゆ

居酒屋で男は雲の上に乗る  
思慮深い女の言葉に騙される

旅の宿天女と盃を酌み交わす  
死線越えた喜寿の重みに身構える

生も死も弥陀に委ねて灸据えた

お彼岸に小さい安堵見せに行く

鳥取市 植田 一 京

ドギマギと回転ドアのタイミング  
はやいリズムで春が過ぎ花が散る

何はさて桜満開見のがせぬ  
情報に予想空想までついて

ふる里に鉄腕アトムのおもちや箱

鳥取市 岸 本 宏 章

求人の子ラシ学歴問うてない

白髪抜く無駄な抵抗だと思ふ

孫とする指切り嫁ににらまれる

税務署でお礼言われたことがない

パソコンが病み付きとなるおじいさん

鳥取市 美 田 旋 風

首に吊るニトロで世話に生きる友

アルバムに二度と見られぬ旅の顔

愛煙家狭い世界をそつと吸う

保険証元はとつくに取っている

どちらかが一歩下がれば波立たぬ

鳥取市 山 本 益 子

人生の耳学問は終らない

立春をスタート台に飛び立つぞ

切磋琢磨の爆笑句会実り見る

裏金の動くうわさはきな臭い

芽吹く春ふるさと想う猫柳

鳥取市 上 田 宣 子

手軽さを言うわたしはお茶漬派  
紙コップみたいに使ひ悪かった

いち抜けた言つてもみたい傘の下  
ワイパーの視野しか君を掴めない

いつかくるその日のためのパラシニエート

鳥取市 春 木 圭 一 郎

ふる里に今も元気な母がいる

三人を育てた母の戦後史だ

母からの包み感動詰めてある

寡婦という母に涙の日もあつた

いつまでも母よ元気でいておくれ

鳥取市 徳 田 ひろこ

まだ穴を出ない熊にも陽がのぼる

わたくしを消したくなくて粉碎機

涼やかな声で押し売り退治する

美談だけ通る耳栓つけておく

毒舌を浄めてくれる歯みがき粉

鳥取市 杉 本 孝 男

標的にされたも知らず酔いしれる

エンストをしたか父ちゃん起きて来ぬ

スピードを落して余生かみしめる

聞く耳を持たねばきつと裁かれる

生ごみを戻して畑へ恩返し

鳥取県 乾 喜与志

夫婦げんか忘れて五十五年経ち

八度目の巳年へ春が遅刻中

春よ来い議員選挙よ早く来い

何やかや蠢く政治不信なり

まっ白に咲きほこってる花の群れ

鳥取県 黒田 くに子

うるわしい乳房だそつとさわりたい

ポンコツの膝折りたみ出来ません

ふる里の便り聞きたい祭笛

叱られて豆腐の味も苦かった

これからも幸せ芝居つづけよう

鳥取県 津村 八重子

朝夕を温い家族の和に浸る

むらさきの袱紗もはずむいい日和

また来年 生かしてほしい鶴を折る

ほかほかの肉まんじゅうで童心に

五月晴れ曾孫日毎によく肥る

鳥取県 西川 和子

カニの身をほぐして添える介護食

善を積むつもりが思い押し付ける

歳月や義姉と笑えるようになり

真っ白になって挨拶とちり出し

畏まったら言いたい事が出て来ない

鳥取県 羽津川 公乃

問答無用お寺の値上げ逆らえぬ

ここだけの話ここから走りだす

自己紹介短所も混ぜて輪にとける

都合に依り歳は据え置く誕生日

一番風呂のメリットは無し老い二人

鳥取県 上田 俊路

ぬくぬくと育ち成人式の乱

携帯で呼びかけてくる雪おんな

身を粉にしても防げぬ不況風

しなやかな笑みでこぶしを開かせる

プラトニッククラブにしびれたまま老いる

鳥取県 さえき やえ

もどり雪生きる明日の譜をくれる

追いこそうなど思わずについていく

ケイタイ パソコン持たぬが生きていけそうだ

本音ぶつけて電話やさしく切れていく

野の花は野に咲かせよと仏さま

鳥取県 橋本 多哥由

隙間から洩れる話に耳たてる

生命を宿す地球は病んでいる

不器用な男仕事を褒められる

七癖があつて人間らしくなる

月冴えてしんしん夜に地酒飲む

鳥取県 近藤 春恵

ロボットに出番奪われ職がない  
冷凍魚出番来たかと目をさます

精一杯舞って主役の座を下りる

錦着ても心錦と限らない

恐いもの知らずで駄馬が突つ走る

鳥取県 西原 艶子

白梅のほころぶ庭で姑送る

簡素化に遠く華やぐお巾い

二卵性双生児かも夫と姑

生きるとは死ぬとは姑に教えられ

私の強い嫁も萎れた姑の愛

鳥取県 吉田 孔美子

来客に三匹三様の態度

寝転びも出来ぬ左右と前に猫

三匹の猫を確認施錠する

動かない返事もしない病んでいる

注射とくすり日当が飛んじやったなあ

鳥取県 奥谷 彩子

明るくて少し抜けてる母が好き

火吹竹亡母への想い詰めて吹き

いやですね夫より強くなつて古希

妻の愚痴ぎゅうぎゅう詰め紙袋

傷つかぬ席の正論なら吐ける

鳥取県 谷口 次男

梅干で右脳左脳を刺激させ

人間に立腹したか海が荒れ

焼き鳥にされた雀の恨み節

来世は親を選んで生まれよう

ふるさとの山が笑つたホツとする

鳥取県 土橋 はるお

質草にされた指輪をはめている

機密費で買った馬なら嘶かぬ

何であらうと余つたら僕にくれ

急がねば丸い話に間に合わぬ

政治家がつぎつぎボロを出しなはる

鳥取県 山本 正光

寒けから逃げられそうで飲んで寝る

渡りどり鳴き声のこし北帰行

美しい人みて喚く脹ら脛

さくら咲く妻はこの世に居ない春

魚市場蟹が念仏唱えてる

鳥取県 石谷 美恵子

絵手紙の蟹に誘われ腰あげる

趣味多彩妻のパワーに負けている

如月は嫌い二十九日生れ

あれこれの噂に負けず逢うスリル

私にもツキが回ってくる予感

倉吉市 野口節子

ふるさとに他人の顔で迎えられ  
春霞脳の洗濯でもしたい  
一瞬のポーズ捕えたカメラアイ  
嫁がせて他人行儀な風に乗る  
招かれて予想通りの粗茶が出る

倉吉市 松本よしえ

蜂の巣をつつく時にも兄が先  
家業継ぐ兄に頭が上がらない  
大鯛の膳に米寿が畏まる  
お洒落して雀が春の街に出る  
三兄弟どの子も婿に狙われる

倉吉市 山本玲子

冬籠り紫式部読み返す  
早春賦わが家の庭に福寿草  
まわり道して帰りたい春うらら  
ひっそりと深山に咲いて散る桜  
ありがとう日陰のすみれ一つ咲く

倉吉市 最上和枝

大皿に平凡と言う幸を盛る  
平服と言うお誘いに一張羅  
右隣売りに出てます眠い町  
姉妹旅のち漂白して帰る  
この顔でよかったたと生きられる

倉吉市 猪川由美子

気を抜くとしつべ返しが待っている  
心身症の地球が自転止めそうだ  
脳ドックオツムの程度知られちゃう  
風邪引いて恋よりアンカ胸に抱き  
女偏の字あれこれあるはセクハラだ

倉吉市 山中康子

ふるさとに米寿の姉が居る誇り  
見過ごして長所ひとつを褒めてやる  
つぼみでも油断は出来ぬ春風  
老春の詩にかけたい恋ごころ  
いきいきとピンクはなさぬ同い歳

倉吉市 米田幸子

酒たばこ二十七歳で味覚え  
念仏の合間に母は舟を漕ぐ  
これからは息子も孫もあてにせぬ  
自分史のこれから筆がはかどらぬ  
雑魚どもが互角に権利主張する

倉吉市 淡路ゆり子

目が覚めて今朝の命に感謝する  
だんだんと薬の量も減って来た  
失敗を一度赦した子の甘え  
夕食にわたし一人が飲む梅酒  
目が合って隣の猫に威嚇され

米子市 澤田千春

脳の錆とらねば動きにぶくなる

つまずいた石をエイッと蹴つとばす

ぐじゃぐじゃの生命線をじつと見る

お隣の門が開いて晴れやかだ

孫達のリズムに今日も乗ってみる

米子市 木村 富美子

思い出を繰ればあの日の声がする

突然にあなたの居ない耳になる

おしみなく次の世代を担う子に

孫の丈誇らしくあり怖くあり

豊かすぎ大切なもの見失う

米子市 中村 金祥

核の傘さした地球がやけどする

アリバイはしっかり残す地球です

薬飲むリスクを負って薬飲む

森総理シンキロウだったかも知れぬ

原潜の右手悪魔のキズがある

米子市 木村 春枝

実る秋思い描いてする剪定

裏通り幼い昔語り出す

さようなら見慣れた街に家が消え

食卓にせめてサラダの華やかに

雪ずりにすわ地震かと身構える (三月九日大雪)

米子市 田中 亜弥

正月をこせただけでもありがたい

命ひとつがウロウロしてた時もある

絶食の四十日はつらいもの

首すじに生きた証の針の痕

落着きをとりもどしたよお茶をのむ

米子市 白根 ふみ

菜の花を握った指に紋白ちよう

春一番 派手な帽子に手を添える

大吉は誤作動だった春の宵

チャンネルをまわすとやはり食べている

むずかしい顔して地区の役きまる

米子市 林 瑞枝

モナリザの微笑ハガキの文字に浮く

岩に散る飛沫は憂さを捨てるとこ

今が青春 脳若返らせている出逢い

泡吹いてうろろう蟹の赤い爪

お喋り雀 今日も謎かけごっこかも

米子市 青戸 田鶴

今年こそ薄墨桜見に行こう

賑やかな隣に少し妬いている

日々空地ふえる地震の後遺症

友達を誘い甘酒のんでいる

たくさんの心もらった今日の宴

米子市 中井ゆき

阿と言えば咄と答える人が居す

菜園の菜の花そえてひな祭り

眉かいて口紅引いてシャンとする

横道にそれて綺麗な花に会う

ものあふれ身辺整理はかどらぬ

米子市 光井玲子

孫合格思わず神に手を合わす

雑兵の背中いたわる縄のれん

魚釣りの話に夢中父の背

母の笛ひとりよがりになってきた

長い道縦糸少し弛みだす

米子市 本吉宗光

支持率がゼロになるまで自公保か

ほほえんで借金王と言う財務

傘寿まで二年余りの飯を食べ

半世紀前には俺も青春の唄

独居十年ひとの顔見にお買物

米子市 門脇晶子

空地から遠い記憶がよみがえる

阿弥陀仏おがんで心透きとおる

千羽鶴祈りをこめてとんで行け

山笑い人が笑って春が来る

渡り鳥国境のない地図をもつ

米子市 野坂なみ

崩れだすケルンへ僕も石一つ

峠ひとつ越えると違うものが見え

年毎に心の月が丸くなる

ケセラセラ手相なんかは気にしない

つきるまで一人笛吹き踊りたい

米子市 政岡日枝子

無意識のルールで挨拶を交す

鉛筆が先を走りがっている

深入りをする景色がよく見える

火種ある処を煽るおもしろさ

男になるために一つは勝っておく

尼崎市 春城 武庫坊

政情不信 空き缶高く蹴り上げる

政治家よナルシズムはすぐ棄てろ

ど忘れが続き笑いが止まらない

ユーモアが通じぬ人と居て疲れ

漫画見る政治の裏がよく読める

尼崎市 春城 年代

車中の化粧 今どきの女の子

婿殿をかわゆく思う歳月よ

余生なりひよいと手抜きをしてみよう

おもちゃのようなミシンに向う試し縫い

見晴らしのよい墓地ですと押し売りに

尼崎市 長 浜 澄 子

オイだけで愛を感じたのは昔  
私から抜け出したくて寄る画廊  
言葉など要らぬ信頼しています  
試されているな矛先躲される  
眼鏡拭く勝つても仕方ない相手

尼崎市 奥 山 美智子

栄転を送る始発の花吹雪  
足取りが弾んできます花の下  
惚れ惚れと初孫を抱くあたたかさ  
引き揚げることになったよえひめ丸  
春のプランへ株価なかなか上がらない

尼崎市 的 場 十四郎

線引きのたびに弱者は泣かされる  
言い負けて妻の素顔が蛇に見える  
そっくりと言われうれしい宮参り  
それなりのシナリオつくる朝の茶柱  
ハードルを越えると男乾杯する

尼崎市 松 下 比ろ志

元禄創業おでん屋の大根  
歳月はやがて夢幻の色になる  
良く笑う男はどうもにくめない  
抱き心地良かった愛はシャボン玉  
等身大の力守ればノープロブレム

尼崎市 内 田 美也子

初孫の入園式に春はじけ  
囁りに心の扉開け放す  
住めば都 義理人情が深くなる  
一合の米研ぎながら今日の策  
大地からやさしさ貰う春野道

西宮市 奥 田 みつ子

主なき更地に六とせ桜咲く  
昨日きよう明日 平穏な日を取り戻す  
あれもこれも時の流れよ春が逝く  
白牡丹 白い命の炎えること  
山はむらさき遠い一人が胸に住む

西宮市 西 口 いわゑ

天女でも下りて来そうな青い月  
義理チョコのままでは惜しいひとだけど  
コーヒー館にひとときノラになりにゆく  
花の芽を見つけうきうき夫呼ぶ  
酒とろり生きる味方をしてくれる

西宮市 山 本 義 子

あまりにもまっ正面にいた刺客  
棘々のばらがやっぱりばらししい  
ITに疎いとばかり言うけれど  
町内会で演じていますお人好し  
金いらぬ健康法などないですよ

西宮市 門谷 たず子

ネパールは何処 孫登頂の山はどこ

終章の道凹凸をどう避ける

それ以上を望めば風も荒れてくる

離陸着陸のち一つを拾った気(九州への旅)

洗濯板身の内の鬼洗いたや

西宮市 牧 淵 富喜子

ハイハイと答えてしまふ電子音

髪かわく間のシャンソンと指の櫛

天気図の曲線 春を遠ざける

月もまた寒の戻りに冴え渡る

消沈の長期療養型日本

西宮市 秋 元 てる

よく遊びよく食べる母子孝行

未だまだともう年うまく使い分け

さんざんに迷った揚句靴は黒

里の川汚くなって街の中

あやめ咲きと書き出し愚痴は止めにする

神戸市 山口 美穂

鏡の前で笑顔つくっておはようさん

余生にもまだ吹く追い風向い風

おやすみを犬は尻尾で返事して

一言嫌味耳に残して電話切れ

控え目に春を告げてる枇杷の花

神戸市 池田 善守

お互いのミスを口には出さぬ日々

同じこと私と言えば怒る妻

一匹の雌も知らずに終る雄

カタログとテレビで旅の主人公

みられてる視線が支えダイエツト

川西市 松本 ただし

お水取り済んで肌着を軽くする

昨日とは変らぬページ今朝も繰り

故郷出てお国訛りの大阪弁

ミサイルも原潜もない大八州

押し花がセピア色した古日記

川西市 米原 雪子

新会員耳に優しい京なまり

酔う程にお国なまりが顔を出す

方言で法事の膳が盛り上がり

歩く会米寿の人の気を貰う

ほめられてノリすぎたかなこの疲れ

宝塚市 嵯峨根 保子

雨天決行ゴザのいらぬ梅の花

梅さくら待らすとこが天下人

紅ひいて顔に締りをつけている

大寺へ瓦を寄進して帰る

本読んで待ってくれてる好きな人

伊丹市 山崎 君子

ほほ紅のいろも変えよう春の顔  
絵にしたいほほ笑み花とたわむれる  
競走馬しっぽにリボンおまじない  
苺狩り小さな虫もつれてくる  
転ぶなよ一歩一歩に母の声

伊丹市 樫谷 郁子

ハードルを蹴とばす気力貯めている  
雛飾る部屋をとられた孫の家  
優しさを京人形に賭けてみる  
人肌の温もり恋し内裏雛  
野仏に花を供えて父待つ子

三田市 北野 哲男

知らん間に総理の辞める日が決り  
能書きが多すぎるから信じない  
見上げるとどうもこのビル揺れている  
駅弁は窓から買ったハネムーン  
網棚に持って帰れぬ週刊誌

三田市 久保田 千代

真実が酒からぼろり漏れてくる  
ゴミの山文化国家が気にかかる  
少額でごめんなさいと被災地へ  
煮え切らぬ男に愛想尽きた過去  
地図を追い夢ふくらませ旅を待つ

姫路市 古川 奮水

お松明回廊走り春動く  
花曇り欠伸が続く昼下がり  
這っていた孫感動の第一歩  
羊羹の老舗素通りしたくない  
旅行社のピラから桜咲いてくる

相生市 中塚 礎石

過密都市薄い空気へ口を開け  
耳打ちへ一瞬ゆれたイヤリング  
開き直ってゆっくり鬼と杯交わす  
土壇場でどんでん返しする他人  
三世代壁で仕切った屋根の下

兵庫県 大谷 幸次郎

慶甲の見栄が年金脅かす  
税金の戻る話に北叟笑む  
春の陽と明るい空を待ち侘びる  
雪解けの土から春が動きだす  
わだかまり溶けて心に春霞

箕面市 出口 セツ子

生きてゆく嘘しなやかに四月馬鹿  
生きるための尻尾点検修理中  
子育てをインファノイドでやり直す  
着メロが競争しあう電車中  
淋しさに家中電気つけ回る

箕面市 椎江清芳

空港へ歴史を変える人が降り

船着けばそこから消費税の街

ロボットの頭脳に欲しい血の温み

祇園の灯守る老妓の舞扇

新築の柱ローンの匂いする

高槻市 傍島克治

世話するからと子に買わされた犬の世話

可愛い子に旅をさせればそれつきり

こっそりと聞いた話をこっそりと

猫の恋終り静かな夜戻る

風邪の神私ばかり鼻真にし

高槻市 井上照子

百八歳 意志の強さよありがとう

老い写す鏡も笑顔好きという

妥協する友に感謝の酒を注ぐ

プレゼント手造りですと吾を売る

母法要十三年の流れ星

池田市 岡本吉太郎

金は無くストレス逆手に長生きす

誘惑を避けた人生物足りぬ

ハプニング起きてもチャンスに変える人

徹夜して納期間に合い一丁上がり

ひいふうみい数え唄うたつてもり上がり

池田市 栗田久子

だれかれに話しかけたい晴れた朝

陽光は五月のためにあるらしい

いっどこで見ても夕日のノスタルジア

救世主それが見えない枷となる

気付いてもだまされた顔してる母

豊中市 井上直次

サクラサク コーヒーで乾杯母と娘で

マネキンは寒いだろうに初夏の服

物忘れひどいが三食忘れない

家計簿にご都合をきく旅支度

孫くれたガムを無理してしゃぶってる

豊中市 吉田あずき

不況風 福の神にも辛い年

引き算にすっかり冷えた預金帳

ビル街の不況をよそに香る梅

輪の外で舌を出してる仕掛人

不発弾 芯にしたまま老いてゆく

豊中市 松岡久留美

あの人と未来約した京の寺

ゆつくりとその日を思う仕舞風呂

長いものに巻かれて暮る新世紀

美しいカーブを描く雪の山

ポイントをつかんで話す苦勞人

粉雪舞う白川郷のにごり酒(飛騨路 能登路 5句) 豊中市 田中正坊

五箇山の岩瀬家で飲む菓草茶  
飛越峽合掌ライン気温二度  
朝市に並ぶ輪島のお母さん  
能登巖門 日本海は荒れ模様

豊中市 湯浅馬洗

疑いも媚も知らない子の笑顔  
花だよりちらほら咲きに気もそぞろ  
生き残り声を掛け合い通り抜け  
修二会終り政局の春未だ来ない  
機密費のペールに隠れ甘い汁

吹田市 穴吹尚士

タクシーが欠伸している北新地  
あれこれと里が揃えた初節句  
まばらでも負けてくれない理髪店  
ばれたならあっさり詫げる面の皮  
社長かて油売りたい昼下がりに

吹田市 石原靖巳

無策とも見える男に隙がない  
もつれると飛び出してくる国訛り  
下心たかがワインに見抜かれる  
物好きのお陰で越えた古希の坂  
名曲が流れて野暮が切り出せぬ

吹田市 瀬戸まさよ

ハイテクのミスはやっぱり人のミス  
大病の余徳ゆっくり生きるコツ  
地場産を買います主婦の心意気  
一食はパンか麺です米離れ  
食べ物と行く先だけを書く日記

吹田市 山本希久子

母の道だけはきれいに掃いておく  
雲悠々しばし現実忘れよう  
罪いくつも積んで春の荷重くなる  
楽書きを消しながらゆく我が余生  
こだわりひとつ捨てる紙ヒコキを飛ばす

吹田市 大谷篤子

紅茶飲み心の鬼を落着かせ  
重いこと軽々言つてのける医者  
切なくも軽い握手を交わすだけ  
勘違いしてたと云えばすむことを  
ありがとうすなおに言えぬ腹の虫

茨木市 藤井正雄

急転直下どうやら裏で積んだ金  
リフォームで老人向きになった風呂  
重役の椅子は派閥に操られ  
ローン返済最終回だ乾杯だ  
懐に狙い定めた誘いよう

茨木市 堀 良江

まつすぐに来た道なれば悔いはなし

三々九度何もおぼえていないけど

セツトしてすつきり老母また出かけ

さよならは港の風の中がよい

これくらいかまわないでしょ小さな嘘

茨木市 島 元 ふみ

街も店も若者色に溢れてる

濡れ羽色死語に茶髪が市民権

風邪知らず さざえさん見てよく笑う

まだ背に少年覗く古希若し

三十五キロの私素通りして訃報

枚方市 宮 川 珠 笑

仲間かも知れぬ微笑み返す人

復讐を模索しおうている夫婦

相性の凶を知らずに添いとげる

バスツアー目立ちたがり屋が盛り上げる

カラオケの字幕はすでに終ってる

枚方市 森 本 節 子

鶯の声も聞こえて朝の土堤

日は昇る日輪と言うにふさわしく

老犬の涸れた顔つき褒めている

お祝を持って行くにも吉日えらぶ

熱のこる目で旅行社のチラシ読む

枚方市 寺 川 弘 一

啓蟄の顔して出社月曜日

人生行路カーナビ欲しい時がある

嬉しい予感思わず合掌してしまふ

コンビニは頑固に入ったことがない

光り過ぎイミテーションのように見え

枚方市 安 達 忠 央

まつすぐに北山杉のいさぎよさ

まつすぐでときに放埒我が暮らし

まつすぐで一途なときもありました

まつすぐに歩ける靴をさがしてる

まつすぐに右肩上がりなつかしい

枚方市 海老池 洋

杉花粉マスクの欲しい仁王様

モデルチェンジするかに妻の衣替え

子も家も防風林に囲まれる

真っ直ぐの道に横風向かい風

置き手紙めいた日記を書きたい日

守口市 結 城 君 子

啓蟄のゴトリ音する台所

はるばるとわたくしの目に黄砂とは

老醜を納得させる春鏡

音消して斑雪観る寒さかな

夕闇のさくらの下は通らない

守口市 井上桂作

お互いにどわすれ怒るすべもなし  
船長が舵取り下手な日本丸

お遊びの巻き添えくつたえひめ丸  
ごゆるりとワープロいつも右手だけ  
過ぎし世は戦争ばかりのこの世紀

寝屋川市 岸野 あやめ

お返事を下さいと書くペンが冷え  
料亭で国の大事が謀られた

こぼれ種根付いて強し金魚草  
困ったねその先言うた方の負け  
子が迫る答あたふたしてる父母

寝屋川市 江口 度

春一番蛙の眠り浅くなる

花だより足踏みしたり走ったり  
父さんの土産河童はカルキ抜き  
口笛を吹くと夜道が広くなる  
用心深く春を迎える猫やなぎ

寝屋川市 富山 ルイ子

どう生きて来たかしっかり振りかえる  
強情で梃子でも動かないわたし

役に立つこともあるらし古希すぎて  
紅うすくつけて老後を翔ぶゆとり  
ドンと体当りしてとるアポイント

寝屋川市 堀江光子

まだ赤の似合う嬉しき更衣  
イエスマンその日次第の軽い風

鬼太鼓撥に鬼神が乗り移り  
軽く言うその忠告が胸に沁む  
合掌のとどのつまりは己が事

寝屋川市 北岡 波留吉

多過ぎて返事に悩む恋の文

こんな俺狙った妻の目は高い  
大物に煮え湯飲ましたのは女  
正直を雪の白さになぞらえる  
五臓六腑小躍りさせた祝い酒

寝屋川市 平松 かすみ

身長はとくに孫に負けている

勲章は他人が選んでくれるもの  
コットンコットン水車に根気教えられ  
山の辺の私だけの靴の音  
繕うた野良着もあるわ歴史館

寝屋川市 太田 とし子

居てくれるだけの嫁女に気を遣い

こんなことになるとは知らぬ年賀状  
国会は進化論より結果論  
年金暮し賄賂も逮捕も遠いこと  
かくれんぼ探して回る嫌なひと

寢屋川市 高田博泉

水温む心もゆるむ京の宵

春風におしゃれもしたい未だ五十路

初孫を抱いて自分の歳数え

立話腰の痛さも忘れてる

贅沢をしたい時には胃が悲鳴

寢屋川市 籠島恵子

本当の事を言つては寒くなる

支えてる方も腰痛もつてゐる

家族おもしろい手の平虹が立っている

ポストまで五分に住んで足りてゐる

青い実をまだ付けてゐるわたしの木

八尾市 井尻民

草のかんざしつけて遊んだ里遠く

角のない男少うしもの足りず

ウインドーシヨップもう早ばやと春の彩

今チャンスなのに黙つてすれ違ふ

座布団を出されて本音切り出せず

八尾市 神原まさと

年金の危機は我が家の致命傷

予定欄通院だけのカレンダー

幸運な雪は椿の花にのり

駅までがだんだん遠くなる足よ

ペラペラとサンマの舌が稼いでる

八尾市 宮西弥生

人間をつづける限りの深い傷

三月にどっぷり浪費やってくる

シクラメン最後の朱は誰と会う

みぞおちをしくしくさせるひとが住む

ガラス玉使い分けして少女の恋

八尾市 長谷川春蘭

落味噌の小皿の中にある故郷

啓蟄の動くものあり庭の隅

新しい夢が芽を吹くランドセル

ともかくも受験が済んで笑顔出る

春光や再会約す発車ベル

八尾市 生嶋ますみ

気休めに嫁にも聞いて服選ぶ

主夫五年酒の匂いのする料理

サラ金より高い利息で妻に借り

半月板くふくふ笑う上り坂

立ち話好き世渡りの必需品

八尾市 内海幸生

新世紀変つたことなく株下がる

新しい生命を瘦せた住所録に

栗忌にスニーカーで行く気ギックリ腰

亡き妻にお茶を供えて三日目のカレー

裸木の樹水に耐えてきた満開

春風は政界避けて吹いている

八尾市 村上ミツ子

教えることばかり習ってきた教師

自閉の娘 宇宙人なのかも知れぬ

ひと悶着ありそう先に寝ておこう

一つときめた合図の咳が二つでる

八尾市 高杉千歩

鬼さんのことばかりして百ヶ日

微笑んだ顔に馴らされ百ヶ日

電話が嬉しくて明るい声になる

もういいですかと自治会の役がくる

ゴミの日に追われ軍手が離せない

八尾市 高橋夕花

石やきいも後悔よりも満足感

それなりに自信持つてる落ち椿

友だちと笑い転げた菜畑だ

本心はやっぱり書けぬ日記帳

嫁ふたり良い子好い子と言ひ聞かす

東大阪市 安永春

逆襲の寒波に風邪が治らない

春うらら旅のプランを二つ三つ

行儀よう仕込まれはった舞妓さん

気のりせぬ時は気ままにテレビ見る

古墳とや何が出るやら見ものなり

ミュンヘンは三月二日銀世界

賑かな青空市でりんご買い

お洒落して三月三日オペラ座へ

生で飲むウイーンの水はおいしくて

洋食に慣れた九日 旅終わり

東大阪市 北村賢子

車内メイク シヤネルの鞆なげいてる

時を経た笑顔が並ぶ同期会

トップの笛吹いた日もある青テント

庭もない家だが春はやって来た

顔なじみの猫に手をふる春うらら

大東市 児玉蛙

切り替えた頭を小言通り抜け

想い出を飾る茶の間が語り出し

倒れても水仙 朝日受けて立つ

美人湯がきいてきたかと顔たたき

立ち話 時効の話舞い上がり

四条畷市 吉岡修

入社式 変だ茶髪が見当らぬ

壊れても壊れてもこの夢一途

ワイドショー オクターブ 高すぎる

こんなのにあの一票を入れた悔い

緑の日やはり緑のありがたさ

交野市 森 本 弘 風

葬式で会ってあの人老けはった  
妻を呼ぶいろいろあるが「おい」がよい  
還歴で未だ垂れ下がらない乳房  
ばあちゃんと呼んで貰いにいそいそと  
ひな祭り女三代揃い踏み

羽曳野市 西 村 りつえ

五月人形にメール打ちたい雛人形

大阪でお待ちしますUSJ

酔客にどっと疲れた花吹雪

花散って青葉の精をあびにゆき

蛍より甘い水知る金バッジ

羽曳野市 吉 川 寿 美

鳩を出し損なつた父の古帽子

風化せぬよう語りつく愚の戦記

自画像へ丁寧を書く笑い皺

埋み火で低温火傷くり返す

定退の余白でほうじ茶が旨い

羽曳野市 川 口 信 子

燃えるものまだまだ秘めて握るペン

寂しさを一枚はがし終えて春

涙などお酒に混ぜて飲んでおく

いくつもの嘘をころがす喉仏

ひとりずつ呼ばれ向こうへ行つたきり

羽曳野市 酒 井 一 壺

ノッポビル災害知らぬ絵ガラス

板前の中に女性が一人居る

窓越しに回覧板を渡してる

銅板のひさし酸性雨にやられ

仕事より休みの方がくたびれる

羽曳野市 安 芸 田 泰 子

難聴のふりで即答避けて置く

ひらめいた一句が消えた長電話

木の芽和え亡夫に一献差し上げる

神様にプレッシャーかける絵馬の数

善人を演じ続けた肩の凝り

羽曳野市 三 好 専 平

仏壇にお尻を向けて本を読み

盗ってきた梅を青磁の壺に活け

意地を張る人には体を躲しとく

出る杭は打たれ打たれて強くなり

バラ色の干潟が赤い海苔を生み

藤井寺市 太 田 扶 美 代

痩せられぬ妻が料理に凝り出した

老い二人笛吹ケトルが鳴っている

三つほど年を隠してある鏡

本心を確かめにきたもどり寒

ずば抜けた人もいなくて仲間達

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

ひとりずつ語り部となる花の下  
この世ですライトアップの桜見る  
思案したらしい切手の貼り具合  
行きずりの恋ともなれば他愛なし  
頃はよし花冷えの手を取り合おう

藤井寺市 中島 志洋

鯉のぼり若葉の風に励まされ  
自画像をこの人誰と孫が聞く  
爽やかな五月晴れにも似たお方  
平凡な男取り柄は元氣だけ  
金と暇ある内義理を果しとこ

藤井寺市 楠 昭子

念押せばのらりくらりと逃げられる  
りハビリだ釘掛けなど手伝わぬ  
大声で叫ぶと軽くなる氣持  
もう一人のわたしが何時もあかたれ  
いざという時も化粧をする女

富田林市 中崎 深雪

荒れた子も今日は良い顔卒業式  
壇上のがが子まぶしき卒業式  
つやつやの緑生まれる雨上がり  
お百度踏む母の祈りは切なくて  
なんまいだ老母の朝が始まれり

富田林市 大橋 鐘造

花散ってやつと気楽になる桜  
盃に面影浮かし独り酒  
後戻り出来ぬ階段駆け上がる  
山招く海が招くと何時も留守  
幸せはとなりで寝息たてる妻

富田林市 中井 アキ

紅少し足して涙を振り払う  
売り言葉今日は買わないことにする  
介護の掌仏と鬼のせめぎ合い  
補聴器を外して噂やり過ぐす  
ひと駅を夜霧のブルースと歩く

富田林市 片岡 智恵子

親と子の期待ゆっくりずれてくる  
快復の兆しへ梅の香が匂う  
もの言いがついて逃した勝名乗り  
五欲みな捨てて跨いだ水たまり  
引き返す勇気を風に試される

富田林市 藤田 泰子

霧晴れて新たな道が見えてくる  
重たいと思うとだんだん重くなる  
スパルタ式あれは虐待だったのか  
陽溜りで私の冬を解いている  
持ち腐れということもあり残さない

河内長野市 井上喜醉  
春一番 黄砂一緒に連れて来る

たこ焼きが好きな浪速の酔っぱらい  
念入りの持てなし何かある予感  
おだやかな波でしこりを残さない  
食われても豚は子孫を産み続け

岸和田市 岩佐ダン吉

出直そう素顔のままやってみる  
限界に挑む大きくなれそうだ  
首ひとつ代えて終わりにするらしい  
歩いたらいつかでつかい道になる  
逃げ道を探す小さくなる私

岸和田市 宮野みつ江

ブティックの跡に百均ショップ建つ  
包装紙にもあったそごうの歴史  
セーフティガードのはずが足枷に  
またひとつ今日スパーの灯が消える  
子育てに正論なんてものはない

岸和田市 藪野けい子

バレンタインケーキを配るおばあちゃん  
忙しいが眠気に負けた午後三時  
ワイン買い焼肉たのし辛をかむ  
忍びよる老化じわじわドライアイ  
梅林のくねった枝が目を奪う

警官も小春日選び取締まる  
童謡が止まない灯油販売車  
雑草と格闘始まる季節来る  
名将の真価問われる三年目  
大リーグサムライの意気見せてやれ

岸和田市 高須賀金太

肝腫瘍ですとドクターこともなげ  
肝腫瘍如きに俺は負けへんぞ  
梅の花咲いて入院ケセラセラ  
経験のある妻が居て落ちつける  
動脈に快感カテーテル走る

和泉市 岡井やすお

鯉のぼり日の丸もない広い空  
コンパコンパ親離れた遊学子  
あちこちで携帯が鳴るハイキング  
葵まつり緑に染まる京の街  
こんなには薬飲めぬが断れず

泉佐野市 山本蛙城

株もない貯金もないが生きている  
年金を待つてる幸にある茶漬  
国会のテレビ見るたび民の鬱  
後継ぎのないサル山に湧く腐臭  
空論が渦巻き沈む日本丸

高石市 浅野房子

父母がいて幸せだった遠い日  
燃えるだけでもやして今は遠い人

紅絹裏の喪服が今もある箆笥

ブルーマウンテン冷めないうちに書く返事

冷蔵庫賞味期限に明け暮れる

大阪府 榎山隆盛

たらの芽の存在 春をアッピール

代役のチャンスに風のホームラン

ハイエナがネクタイつけて天下り

好きだから禁句封印しています

読破する点字を追えば光りだす

大阪府 澤田和重

母叱る介護悲しくなってくる

スタートの小鍋に戻る老い二人

気配りの嘘 お見舞いに置いてくる

二人だけの世界にひたる観覧車

疑った八卦当ってのめり込む

堺市 柿花紀美女

古里のホーム知らない人ばかり

千切れ雲忘れた過去をふと思ひ

宝くじ横目で買った事がない

とりあえず寝る事にする寒の月

平凡な今日一日が夕暮れる

堺市 近藤豊子

舞台のようプラットホームへ花ふぶき

おおさかのオリンピックへ咲くさくら

夜ざくらのねむりたりない幾夜かな

桜前線 化粧半ばの日本地図

記念写真さくらもほくもうれしそつ

堺市 山本半銭

天神の絵馬泣き笑い春が逝く

絵手紙に春の名残りの緋毛氈

花地藏 喉飴ひとつ献じましよう

草餅の香りの中に母がいる

駆け足の季節に合わず花衣

堺市 神原文

深水のおんなに女ごころ攫われる

卒業はバスポートさあ羽ばたこう

不法駐車みんなするからやるといふ

ITへ女男のけじめなし

パートが不振と聞いてから行かぬ

堺市 矢倉五月

不機嫌は飲んだ薬の副作用

あなどった風邪にわが年念押され

カーナビのけいこ知ってる道を入れ

ロッキングチェアで見てるちひろの絵

何も彼もプラス志向で出た疲れ

堺市 和田 つづや

大阪市 杉澤 汀

ネクタイと時計はずせば寛げる

世渡りの嘘が上手になりました

出来あいの菜っ葉を持って風邪見舞

唐辛子みたいな存在感が好き

女房に負けない先に呆けてやる

大阪市 寺井東雲

機密費はわが家にもあるだまつとこ

水門の開くの待ってる海苔あさり

排気ガス花粉を暴れさすらしい

雛人形早くしまえと娘言う

事故多発 日本丸は恐ろしい

大阪市 川原章久

やっとかめ積る話を姉妹

耐え忍ぶ冬の樹の声虎落笛

先生もこっそり覗く虎の巻

戻り寒くしゃみ三度の仁王像

残り火を労り包む夫婦愛

大阪市 辻川慶子

地下鉄の出口ひとつでよその街

温かい手紙を書かす春の雲

何事もこだわりもたぬ歳になり

再会のタイムスリップ声弾む

風上に立つと用心深くなる

税務署へ愛犬ついてくるといふ

狸犬のように白バイ躍りでる

スパイのスパイそのまたスパイ要るこの世

もう同じテーブルでない新社長

気がかりをひとつ残して去る机

大阪市 神夏磯典子

喧騒をよそに自然は美しい

幸せは叱ってくれる友が居り

ご近所の噂電話にのつてくる

本心を晒してまたも火傷する

それぞれの生き方淡紅濃い紅

大阪市 鈴木トヨ子

喜寿の春しみじみ胸に父母の恩

全力で余生の趣味にこつている

ひらひらの花ミニスカートに目が刺さる

明日嫁ぐ孫の寝顔をしみじみと

夫婦茶碗絵柄に迷う旅みやげ

大阪市 町田達子

バス待ち私ひとり風の駅

孤独な影と遅れたバスがやってくる

神秘な笑みたたえた仏像に見入る

庭園に都塵を払う昼下がり

はっきりと何か言いたげ昼の月

大阪市 小糸昭子

曲線の眉愛らしく姫だるま  
抱き合えば胸のしこりが溶けてゆく  
SOS見逃し迷路にはまりこむ  
なれた道なのにうっかりけつまずく  
衿の中 秘密の話縫いこんだ

大阪市 安達はじめ

肩肘を張った暮しに疲れ果て  
やりくりの上手な妻の綱渡り  
栄転の内示伝える弾む声  
連休の雨で家計簿うるおった  
胴上げの中で舞台がもう回る

大阪市 井上白峰

本心がジョークの影に見え隠れ  
子の意見理解はするが気にいらず  
食卓へ美食に優る愛を盛る  
一日の疲れを癒す妻の酌  
老いてなおライバルが居て惚けられず

大阪市 本間満津子

うぐいす笛吹いても梅は開かない  
口紅が濃いよと皺に咎められ  
兎に角並びこの列何の列ですか  
やっぱりここに有った四回目に見つけ  
財布開けない日は多いけど足りている

大阪市 板東倫子

破産国 平均寿命は世界一  
紙きれになるやも知れぬ株を抱く  
啓蟄と聞けば蠢く旅心  
持って死ぬわけでもないがしみつたれ  
インフレが去ればデフレが脅かす

大阪市 小林周信

特売の酒は我が家の常備薬  
うつらうつら床屋の椅子は春うらら  
頼まれて言うた批評で角が立ち  
仕来りが廃れ古里遠くなる  
頼まれた絵馬は合格知らぬまま

大阪市 古今堂蕉子

言いすぎを謝まろうかな忘れよか  
孫二歳いやダメきらいから覚え  
DNA一言多い孫育ち  
監督の椅子それなりのでかい顔  
花屋さんおしゃれに椅子のアクセント

大阪市 津守柳伸

メカ音痴助けてくれる友あまた  
浴室で不安がよぎる豪華船  
投網打ち見せて四万十川下り  
想い出がそっくり残る桂浜  
夜桜の場所取りに行く新社員

大阪市 津村 志華子

先走る言葉にいつも悔いている  
幸せもいっしょに煮込む苺ジャム  
逢う度に老母は小さくなっている  
蝶蝶が遊んでくれた請求書  
バーゲンにすぐ乗りたがる春の風

大阪市 渡部 さと美

口コミの味につられてカニ食べに  
嫌煙権言えず廊下に逃げてでる  
公園のカラオケ踊りだす人も  
パパもママもちゃんといたずら叱らない  
たまに来る孫には忘れられている

大阪市 川久保 睦子

アングルを変えて見直す星の位置  
春あらし過ぎて夜空に昂見え  
夏空の星の一つが縁結び  
お七夜にそろそろ撫でる小さな姉  
千手観音 愛の鞭持つ手も一つ

大阪市 奥村 五月

ならされて寄り道できぬ伝書鳩  
この台詞言えば二人が終りそう  
いつか来る惚けと戦う趣味を持つ  
酒断ちに心が揺れる日暮れ時  
職探し妻は黙って靴磨く

大阪市 西出 楓楽

発展の北京いずこも工事中（北京の旅）  
長城をいつか月から見てやろう  
京劇のセリフわからずとも楽し  
中国の商魂にしてやられたり  
自分への土産溥傑の軸を買う

大阪市 玉置 英子

朝別府 夜は草津の入浴剤  
羨ましモディリアーニの長い首  
立雛を旧の三月三日まで  
安らげる家庭ではない午前様  
この浜へ戻っておいで孵化の亀

大阪市 川端 一步

ランドセルみんな天使の瞳して  
老兵が歯の一本に弱音吐き  
腹芸を出来ぬ親父の血を受ける  
饒舌を君は黙って聞いてくれ  
黙々とご不浄掃除する背中

大阪市 前 たもつ

花粉情報出されよけいに花粉症  
目立たない椅子で力を溜めている  
父に似てきた弟と吞んでいる  
思い出のデパート消えるわが郷里  
菜園に葱を残して引越し車

弘前市 蒔苗果林

窓叩く春風に気を勇み立て

雪消えて鏡見たがる頬と顎

花の命はぐくむ奮うらうらら

他人に真似て花芽と葉芽を分け隔て

弘前市 相馬銀波

有権者 義務も権利も意識して

年毎に指折る願いだけがふえ

意見開陳 話まとまるまで粘る

空腹を知らず飼ひ猫する昼寝

横浜市 山下省子

いい人を嫌って母に訝られ

接着剤つきたい妻の口達者

望むから真実告げて疎まれる

唾棄したい自分がなおもいとおしい

富士宮市 渥美弧秀

詩と楽に生甲斐つなく傘寿すぎ

孫の弾くヴァイオリンの音に耳澄ます

チャランポランの素振りも見せる大物か

肩書をさらりと脱いだ蜜柑風呂

静岡市 安本晃授

少年のジョークが薫る木の芽和え

昭和史を斜めに読ます裏表紙

秒針の早さに知性狂いだす

消し壺にいつか炎の吹く火種

奈良市 天正千梢

なき母の小言とも聞く小糠雨

散り終えて浄土となりし並木道

新世紀等身大の夢を抱き

徒に口をはさんで恥をかき

滋賀県 中宗明

拍子木の火の用心も寒々とお水取り春本番を告げる坊

水温むせせらぎ聴ける旅の宿

金蔓の親を嘆かすフリーター

目算が外れて財布軽くなる

あっさりとは詫げれば溝も浅くなる

美しく枯れる事のみ思う日々

子に頼る夢は誤算と諦める

ポケットで耐える小石も老いてくる

もめそうな時は心に停止線

手術せぬ医者に出会えた今の幸

春風に庭の花木も競い咲く

和歌山市 山口三千子

馴れました我が家のシェフは五ツ星

人間に欲を授けた神無慈悲

メダカさえ救えぬヒトの傲慢さ

法よりも義理が生きてる路地が好き

唐津市 井上勝視

唐津市 井上勝視

唐津市 井上勝視

唐津市 山門タミ

一呼吸置いて訓すも母の知恵  
浮雲は友また一人乗せて逝き

寒暖の道草しつづつ春がくる

売込みの断り楽なインターホン

香川県 神保坊太郎

いばら道刈らねば明日が見えて来ぬ

前世紀の絞りきれない灰汁が出る

桜咲けば父母おなじ日の忌が巡る

大見得を切つておのれに縛られる

岡山県 荻野 鮫虎狼

石仏と一杯呑むが花便り

本心が喉から覗くほど喋り

線香を継ぎ足し在家の経続く

味噌汁の家風へパンの嫁が来る

出雲市 石倉 芙佐子

どないしよう逃げの一手を打つておく

鉄砲水 私の胸に容赦ない

おおむらさきに私脱皮をしそこねる

時として炎に変わる名残り雪

出雲市 青山 久子

緑内障 心のひとみ冴えてくる

呆け気味の姉がわたしの皺笑う

命日は花もだんごもてんこ盛り  
春帽子 雲の誘いにのつてみる

出雲市 岡 あきら

澄んだ目を集め飛ばした竹トンボ  
露ほどの申告額と機密費と

ウグイスが来て諍いも立ち消える  
倒れても指図忘れぬから安堵

老け込んだ小指同士で泣き笑う

松江市 安食 友子

撓やかな柳を雪が試してる

蜜カラを見せ付けているリーゼント

根無し草 三拝してる朝ぼらけ

淡雪も命もみんな手を漏れて

松江市 川本 畔

千羽鶴 灯の絶えるまで折り続け

涙つば今日も溢れて止まらない

母無言やよいの風に旅立ちぬ

鳥取市 前田 一枝

われなべに合わせるフタが見つからぬ

悪い事聞かぬ振りする耳もある

居眠りも上手にこなし世を渡る

くされ縁捨てよと思つた日もあつた

鳥取市 富山 檳榔樹

春告げて露玉を抱く座禅草

ゆつたりと老いるとしよう黄泉までは

大胆な嘘を見抜いて貝となる  
つぎつぎとボロが噴き出す永田町

倉吉市 牧野芳光

子の足の裏も私によく似てる  
砂粒のひとつひとつにある故郷  
きつと来る語尾がだんだん低くなる

発狂も脱皮もやめて青い風

鳥取県 権代康女

風見鶏 女心を持てあます

言いわけはしないつもり腹くくる  
耳もとの内証話がこぼれ落ち  
色彩の豊かな料理盛って出す

鳥取県 国森武子

義兄弟みんな酒好きたのもしい  
兄弟も三代たてばいろいろに  
老いて知るうまいお茶出すむつかしさ  
下手で良い納得のゆく句を作る

鳥取県 太田幸枝

ふりがなの名札をつけた痴呆症  
嫌なことはつきり言つて無二の友  
どん底も今は笑いの種となる

春風が明るい話つれて来る

鳥取県 田村きみ子

露草も抱き合つて咲く大自然  
春の兆しに花もわたしも急かされる  
歩道橋歩くチャルメラ聞きながら  
飾らないことばで母を慰める

鳥取県 土橋睦子

力まずに歩こう先が見えている  
座の空気読んで珈琲持つて出る  
水のない川 冷淡になってゆく  
慌てるな まだまだ前が混んでいる

東北は雪東京よりは識らず古い  
浮草も季節に小さい花が咲く  
絵本買うパズルの賞の図書券で  
日々凋む気力体力記憶力

鳥取県 林露杖

啓蟄に我も草引く虫となる  
どんな彩になるか素焼きの壺がある  
取り敢えず明日のために寝ておこう  
親二人看取り人間らしくなる

鳥取県 岩崎みさ江

嫁して来て二人三脚五十年  
返信の余白に一句春を添え  
海鳴りに馴れて一晚追加する  
盃を受けると名前思い出す

鳥取県 石尾かつ乃

婆ちゃん役で余生つぶしてなるものか  
疑念なく千人針の女学生(母校記念誌執筆 3句)  
すぐそこにずっと昔の青春が来た  
湧いて来る思い出柢目あふれ出す

鳥取県 垆寛子

鳥取県 原 みさを

後悔の酒こめかみを打ちつづけ  
日本の暗い所をかじる音

村長が替り大味な風になる

括られる票読みという見えぬ紐

米子市 神庭 詩郎

よその子に注意し親に怒られた  
訓練のようにには行かぬ事故現場

栄光の過去は語らぬホームレス

生産地見れば野菜も多国籍

米子市 永井 三津子

夫からのバトンようやく子に渡せ  
夫恋しせて人形ペアで買う

歳かしらあまい言葉の裏を読む

遠回り優しい風に逢いたくて

芦屋市 黒田 能子

飲むほどに淋しい人がはしゃいでる  
何となくうまが合ってる初対面

真つすぐに生きたつもり丸い背な

車椅子 春の散歩を待っている

伊丹市 小熊 江美

古里の老母は達者か祈るのみ  
長生きを望みぽっくり死も望み

百円シヨップ結構役に立っている

糖尿病そんなとこだけ親に似る

西宮市 刈田 泰司

盃のピッチで愚痴がこぼれ出す  
万歩計つけあしたからあしたから

鬼の首取った話が長くなる

大股で歩く男だ背に自信

西宮市 菊池 トミエ

雑草の新芽に力貰う春  
卒業日涙をためて笑っている

骨粗鬆 贅は望まぬさんま焼く

人形も古くなったら供養され

西宮市 緒方 美津子

酒好きは日帰りコース気がのらぬ  
まっすぐに帰ってきたわ風邪らしい

新聞と相性のよき便座かな

佐助の一輪 部屋を清めおり

西宮市 井上 松煙

庭の花ポーと眺めて春うらら  
さくら草話しかけたら早く咲き

若者が優先席で昼寝する

会長に座って欲しい人は逃げ

池田市 藤井 計光

虹つかむ佐々木の素手にある誇り  
ばあちゃんの怒声一瞬虚をつかれ

ちやめつ気に客を見送るベティーちゃん

惜別のエールメッツで羽ばたくか

金魚鉢まっすぐ泳ぎたい金魚

上向いて歩こうまっ青な空だ

正直な人で手の鳴る方へ行く

ぬるま湯の中で糸口ほぐれ出す

吹田市 古川 喜美子

迷惑な叩かれている布団です

知らぬ間に夫唱婦随が消えている

マスクでは隠しおおせぬ美人かな

ペーターペン判りかねてる猫の顔

豊中市 岸田 知香子

実益と趣味重なってボケられず

大川のアクアライナー春陽受け

着た切りの雀流行 無頓着

人助け後のピールのさわやかさ

高槻市 江原 秀夫

ゴール前気力が僕を抜いてゆく

人の世の軋みうつろな金の音

枯れた愛ほのかに染める湯のけむり

缶ビール三本開けて句は出来ず

枚方市 鈴木 政子

ご加護より火の粉にウールコート逃げ(お水取り)

四橋が小豆島を過疎化にする

顔パスを自慢にしてた戦中派

玄奘の苦行の地 破壊するタリバン

リストラにあわず定年指をおる

二十一世紀きわめてみたい趣味がある

梅林の夫婦迎える紀州旅

店長の息子が帰る午前様

枚方市 二宮 山久

君知るや冷蔵庫にあるキャビア

気をつけている階段は転ばない

少しだけ悪者ぶって大人びる

苛立ってくるのが佗しすきっ腹

寝屋川市 森 茜

ワンランク下げると道が広くなる

ライバルがいるから続く趣味の道

生きがいは念仏三昧遠慮せず

同窓会憧れの君 孫五人

寝屋川市 酒井 勇太郎

よたよたの冬蚊一匹叩かれぬ

無人売り人を信じる竹の筒

三寒に耐えて梅林匂い立つ

踏まれても麦の命は天を指す

寝屋川市 坂上 高栄

狩野派のパワー感じる二条城

宇宙から粗大ミールを海の中

寺めぐり足は十年若くなり

だだこねる低音古い洗濯機

交野市 山川 日出子

大阪市 鶴田遠野

大阪市 田中節子

出掛けるぞ化粧の妻に声三度  
商談の前にダメ虎扱き下ろし

タイミング外した愛はほろ苦し  
恋風で命の泉湧いてきた

夫婦して秘密つくったバレンタイン  
待つ女いつもバッグに文庫本

消えた絆穴埋めしたい愛ひとつ  
桜吹雪ドミノ倒しのよう

マネキンも薄着になつて客招く  
弁当も土産も付いて指定席

満足を腕一ぱいに孫を抱く  
月参り今日も凡夫の道歩む

上品な笑顔だったなあ鬼遊さん  
地下鉄もバスも無料のお年寄り

世捨人明日はどの地の底を這う  
一番どり母は良妻賢母型

大阪市 松尾柳右子

河内長野市 植村喜代

不動産なくて兄妹げんか無し  
薫風に誘われ街中を歩く

朝が来てとうとう寝ずに塵を出す  
行かなくても春はぼかぼかやって来る

魚好き猫に負けない食べっぷり  
居眠りは猫が一番上手です

元気でいたらいつかは羽根も伸ばせます  
坂下りてついでついでのお買物

大阪市 清水絹子

岸和田市 原苑子

屋根つづきのよしみでたがい助け合い  
雨三日春の財布もひと休み

妻が留守つけもの茶漬うまかった  
あれも食べこれも栄養肥る腹

ご機嫌の妻へ熱燭もう一本  
医療高すつかり老後狂わされ

春くれば春が好きだと場当りに  
老人になつて老人眼中に

立春の声に咲き出す寒桜  
曲線の空中ショーを口が追う

重い腰宇宙へ行けば浮くかしら  
日めくりのスピード日増しに速くなる

淀屋橋で街路樹かわる御堂筋  
立春を待ちかねたよう猫の恋

狭いうえ垣根までする自己主張  
またひとつ歳をとつてる診察券

岸和田市 木村正剛

大阪府 米澤 俣子

食いだめのかわりを頼む冷蔵庫

見舞われる身より見舞う身ありがたく

きれいごとやうて狡い手考える

リベンジ秘めておだやかさ演じ切る

# 水煙抄

(つづき)

高知県 百田 幸

新婚のうちは返事に艶がある

おなじこと考えてたと負け惜しみ

遠くから眺める花も美しい

唐津市 坂本 兵八郎

喉元が過ぎて女難の相になる

若い頃のガードレールは低かった

人に先ずそつとすすめる蝮酒

唐津市 岩崎 實

後ろから背筋伸ばせと叩く妻

子や孫に何はともあれ人の道

まだ半分済まぬわが家に住んでいる

## 第16回 国民文化祭・ぐんま2001

— 見つめようひとの心もの心毛の心毛の国ぐんま —

応募受付期間 4月1日(日)～6月30日(土)

応募・選者(各題2句・未発表作品に限る)

事前投句 「書く」

「雷」 小松原 爽介選

「牛」 田中 寿々夢選

「風」 成田 孤舟選

小・中学生の部 「書く」 江畑哲夫選・

「雷」河内天笑選・「牛」撫尾清明選

当日投句 「門」

「威張る」 福岡 竜雄選

「野菜」 松岡 葉路選

第二次選者

仲川たけし 吉岡龍城

磯野いさむ 齋藤大雄

応募料

1000円(小・中・高校生は無料)

応募方法

所定の応募用紙を使用のこと

応募先

〒2192 多野郡吉井町大字吉井371 国民文化祭吉井町実行委員会事務局

賞(予定)

文部科学大臣奨励賞・国民文化祭実行委員会会長賞・群馬県知事賞・他

入選発表大会

11月11日(日)10時30分～15時30分 吉井町体育館(027-387-3553)

問い合わせ及び募集要項請求先 〓 応募先

主催者 文化庁・群馬県・群馬県教育委員会・(社)全日本川柳協会・他

# 自選集

橘高薫風

天と地を君と往く大観覧車  
握手して生き延びる血を貰いけり  
心臓の手術魂抜かれるな(長男)  
ヒトゲノム金の盲者に酒の猛者  
生真面目な戒名貰うて君逝くか(嗚呼 高杉鬼遊)

板尾岳人

薔薇匂う五月だ菜忌だ(菜忌 5句)  
菜の花や人間とやを教われり  
菜の花や燦爛として菜忌や  
五月晴れ師の旅立ちて七回忌  
此岸から彼岸へサクラ便りする

八木千代

ははの忌に馳せくる限りある身内  
芽吹くこと許されはせぬ墓の草  
お揃いで春菜の膳を召し上げられ  
供養とや浄土さながら春の宴  
法要のあとの位牌が眠そうな

阿萬萬的

お爺ちゃんに似合うとくれたベレー帽  
付け焼刃ばれそう話題かえました  
口だけ達者だけと少々疲れ気味  
年寄りをおいてけぼりにIT化  
検査入院ここが一つの句読点

榎本吐来

空しさを逃がれる散歩堂に入る  
喜味こいし夢路いとしに和む夜  
公園で群れる幼児に春が来た  
遊ばれているのは犬か老骨か  
初孫を産院に訪う古稀夫婦

田口虹汀

本堂も庫裡も桜に抱かれて  
背を擦する枝垂お城の美姫に似て  
春宵一刻大の字の味若い味  
銀飯を闇と呼んでた頃の味  
いい生活してておあしが無いと言ひ

堀端三男

裏方に回り見事なアドバイス  
カタカナ語氾濫 辞書は手放せぬ  
分けますかバックですかと聞く床屋  
欠点をさらけ出したら認められ  
ローマの休日何回見ても新鮮だ

西村早苗

満開に不揃いあしたも花の首  
黄砂とか霞む天地も老眼も  
慌て癖わかつています疲れます  
ぶーんと香る女の構図浮き上がる  
立ちんぼで呑む三合では酔わぬ

藤井明朗

桜並木で逢えばそのまま帰されず  
風押すようにふたりをみどりへ誘う  
壮快にみどりの風がこだまする  
予算前倒し景気上昇へ急  
政界に火花無党派の争奪戦

舟木与根一

国民も三猿主義に飽きてくる  
暦とは別に啓蟄雪催い  
日本は風下 黄砂気味悪し  
退院の妻待ち侘びる北帰行  
田んぼにはもう戻れない使いみち

河井庸佑

主役立て脇の渋さにある余韻  
樹齡千年貫禄見せて天をつく  
突き放す友情真意汲めぬまま  
春夏秋冬理由はどうあれ酌み交す  
思い付き安易に動き火傷する

石川侃流洞

プラス指向きっちり結ぶ靴の紐  
酒呑みの知恵名案の棒しぼり  
秀才に勝ったは酒の量ばかり  
辞世の句詠むのは百を過ぎてから  
正夢の予感蛇口の水の音

竹内紫鏑

冶金科を卒え 陶冶まで道遠し  
溶接で湾に浮かべた滑走路(メガフロート開発)  
見に行ったロボット機嫌わるいとか  
ご不快と書き頻尿は覚えあり  
あの人が休めば澄んだ協和音

恒松町紅

あべこべの夫婦でうまくいっている  
流れには乗れない人の不倖せ  
いい話聞かせてくれた青信号  
出発へ涙が先に出てしまい  
初雛のような曾孫のいい寝顔

月原 宵明

自分史は当用日記の博文館  
吹雪く日は電話もかけずかけて来ず  
水平線冬の孤独を抱いている  
降る雪を眺め一本追加する  
生きてゆく春に卒寿の丸い背な

土橋 螢

一日のけじめをつける夕御飯  
つぎつぎと女を変えているらしい  
裏山の杉の花粉が飛んでいる  
働いて女の道を踏み外す  
車座になってこの世の花を見る

野田 素身郎

近頃はあの人夢にさえ出ない  
養生訓守ってやつと古希迎え  
身障四級何をするのももどかしい  
有り難や年金暮らしも十五年  
健康器具いろいろ揃え病んでいる

遠山 可住

バーゲンという戦場があり女  
ビール券行ったり来たり小さい義理  
年金へもつたいなくも湯があふれ  
ドクターも例外でなし風邪もらう  
B 29 って鉛筆の芯ですか

斉藤 荔

一面花東哀愁の海になる  
草笛が好きでたまらぬ父の椅子  
露の臺忘れ上手にしてくれる  
みどり子の拳の中にある梅花  
万歩計にいのちのうたを刻ませる

波多野 五楽庵

北帰行おぼろおぼろと幻か  
黒髪の先まで袖の香にひたり  
躁の日も鬱の日もあるにぎりめし  
人情にふれると熱くなる泪  
桑の実の鼓動をつめた母の遺書

越智 一水

雪の宿雪の明りで目がさめる  
静けさの中に聞えるメッセージ  
ウインドを妻とのぞくも春の宵  
スキップの孫にしたがう春の歌  
たいくつをしない夫婦で仲がよい

玉置 重人

黙ってる鬼が一番恐ろしい  
ワープロの便りに匂う軽い義理  
ツケの利く店がミナミにある自慢  
他人は他人私は私ベアルック  
どう視野を変えても反対したい核

藤村 女

真つ白に干して晴れ晴れ心足る  
見送った涙に空が青すぎる  
シンデレラ夢見て踊るトーシューズ  
花道に恥じぬ努力積んでいる  
夢担ぎながら迎える九十歳

両川 洋々

恋ぐらいどうぞ春風背なを押す  
天国への道だ亡母さん迷うなよ  
満月と無念の水子しゃべりだす  
玉手箱ぎっしり義理の字が詰まる  
また一羽平和のハトが死にそうだ

宮口 笛生

有難い偶数月だ年金だ  
大正の生れ年長組になり  
偶然の一致は神のみちびきか  
お水取りすむまで奈良に春は来ん  
桜前線押して来ている花だより

芳地 狸村

通勤に車くるまの朝の街(ミラノ 5句)  
落書きがやたら目につくストリート  
ルネサンス風を生かしているお城  
ゴシックのドウオモが誇る建築美  
目を見るガラスドームのアーケード

木村 あきら

湯の里に水鶏庵は活き続け(白鳥温泉茶臼碑)  
瀬戸の浜一望にする句碑の里(白鳥中央公園薫風碑)  
靴紐を結び直して卒寿まで(八十六翁)  
花道を下りると仮面ずれてくる  
明日散る花懸命に媚を売る

工藤 吟笑

手さぐりで白寿への道まっしぐら(九十一翁)  
ネジ巻くに巻き代のない九十坂  
老翁はもう鳴きもせず飛びもせず  
バアちゃんは庵を残して何処へゆく  
晴れた日は一日がかり寺詣り

川島 颯云児

清澄の空気六時の万歩計  
白羽の矢いつも私的になる  
追い風がほしくて今日も回り道  
カルチャーで頭の捻子を締め直す  
凡人を自負して敵をつくらない

小西 雄々

両腕の鬼眠らせてスリル追う  
糞虫の風まかせにもある予定  
冬の出口を開けば誘う花の園  
ライバルに負けずに踊る魔女の笛  
仏も鬼も肩の凝ることないだろう

野村太茂津

万葉の雨に濡れてる旅熊野  
思い出をポツリと旅の出会いなど  
縁起担いで亡父の形身で旅に出る  
孝行な倅娘に噎せてくる  
首二つ深夜の露天風呂に浮く

小林由多香

余震まだ続き微熱下がらない  
暇と金あればの旅を組んでみる  
予定外だった出費に喪が二つ  
点滴が命をつなく時きざむ  
固まる地ならしつかりと雨よ降れ

黒川紫香

枝垂桜に首突き込んで孫笑う  
仁王様も笑ろてるようだ桜満開  
少しだけ入れた銀行名が変わり  
小さい町なのにベタバタ選挙ピラ  
どこにでも居そうな顔の僕が居る

八十田洞庵

長生きをせねばバイブル読み終えぬ  
渦潮に育つ尾鰭の男ぶり  
待ちぼうけ自嘲の背を笑われる  
キュラソーを飲んで昔の恋思う  
満開の花に葎酒もあるお寺

西田柳宏子

定退の隠居どころかなお忙し  
世話好きでおつちよこちよいで締らない  
邪魔になるのがいの一歩にかけつける  
心から尽してくれる老妻がいる  
理想のご夫婦ですなと他人様

河内天笑

皿まわしみたいない日々が続くなり  
よく笑う輪に集まってくる雀  
実をつける花風が好き虫が好き  
わたくしの欲骨壺に入るまで  
一線を画し我流を標榜す

京都塔の会 第48回吟行  
神泉苑句会

日 5月29日(火)

年間予定表とは変更しています

集 合 11時30分  
地下鉄東西線「二条城前」改札前

行 先 史跡「神泉苑」  
句会場及び昼食 神泉苑内「平八」  
TEL075-841-0811

題 「天」「…ざかり」  
「一同」「当日雑感」

会 費 4000円(当日)  
申 込 5月25日締切 都倉求芽まで

交通 ◎阪急「烏丸」から地下鉄「四条」  
国際会館行乗車「烏丸御池」で  
東西線二条行に乗替「二条城前」  
下車(約6分)

◎京阪「三条」から地下鉄二条行  
乗車「二条城前」下車(約6分)

〒600-8428 京都市下京区諏訪町通り  
松原下ル弁財天町328 都倉 求芽  
TEL075-351-4109

## 大坂形水

東野大八

大阪市の谷町というのは、東区から南区にかけて天満橋南詰めを基点に一丁目から九丁目までの約三キロにわたる南北の町名である。

一丁目から六丁目までは、概ね既製服商が軒を接していて、戦後、道路の拡張によって様相が変わったが、既製服メーカーとして一流の商社が多かった。船場・島の内から坂を登らねば到達できない難所が谷町だった。

谷町は丁稚車にきつい坂 形水

と形水さんも川柳の初手にこう詠んでいるが、谷町の電車道は、まるで将棋盤か碁盤のような敷石の悪路で、丁稚奉公がさかんだった昭和初めの頃は、谷町といえは悪路の見本で、形水さんならずとも丁稚諸公はみんなへ

きえきして「また谷町か」と洗面を作ったものだ。

形水さんの句は、そのニガイ体験が生活的に息づいているような名句であった。この人の唯一の川柳句集『谷町』は、いわばその悪路の象徴だったわけだ。この人にとっても谷町は、生涯の悪路だったようだ。

「形水さんと私の出会いは、はっきりした記憶もないが、少なくとも私が医者になつてから、即ち小児科の主治医として、患家の形水さんのお子さんたちの世話をするようになつてからだから、かれこれ五十年の歲月が流れている。私が日本橋の松坂クラブで、路郎先生の講座に入門したのが昭和14年であるか

ら、形水さんは路郎門下としてはかなり先輩であり、『川柳雑誌』でも先輩として投句を続けられていた。(中略)

当時、形水さんは、正一という雅号であつたようであるが、いつ頃からか形水に変わった。「おふくろの背を流している時にふいとこの雅号になった。行水が縁です」という話を、雅号ぶつちやげばなし」に書いてござつた。小児科の主治医を通して、この人のお子さんと接し、お子さんの親としての形水、父親としての形水、夫としての形水。形水さんの人間像を比較的的確に捕らえ得る立場に私が居たことはたしかだ。

さてその形水さんだが、この人はかたくななまでに謙虚で控え目である。その反面、強固な意志とあたたかな抱擁力、格調高い愛情の持ち主であることを、私一人でなく、形水さんを知るすべての人が抱く同じ思いである。特に私が畏敬する面は、鋭い批判力を磨きすませて、常に頭の隅に備えていることである。それがまた、その点を誰からも愛され、信頼されているのであるから実に尊い。

(昭和53年5月・川柳塔主幹・中島生々庵)

この変わった、大きな角型の布張句集は新宮豊三氏の装丁・題字によっているが、あとにも先にも大坂形水句集はこの『谷町』一冊きりである点がニクイ。

「形水さんは、川柳は藤村亜鈍よりも先輩で、樋口の店に文学青年がいると聞かされたのは、私達の結婚後でした。彼はその頃から川柳をされていた無口で温厚な青年で、人の信用も厚いお方でした。

戦後、樋口亀商店（藤村の姉の店）を買い取り、今の株式会社オーエスケイを成功させた。私達五人別家ただ一人の成功者です。（中略）形水さんと藤村は、藤村の姉の夫である樋口亀商店で藤村は経理、形水さんは一番番頭でした。

藤村が学生時代下宿していた家が、奥さんの祖母にあたる方で、家族としてのおつきあひもあり、藤村の両親と姉であるこりよんさんの仲人で結婚されました。ですから私とは義兄妹、樋口が本家で三人は別家という間柄でそれぞれ結婚して家を持たせていただいた仲です。

その頃の船場のしきたりで、盆と暮れには

五人揃って本家にご挨拶に上りました。帰りには、こりよんさんから女性へのボーナスとして暮れには正月の着物、夏はうす物を頂戴して帰ったものです。それも戦前のお話で、戦中にはみなちりぢりになり、無事に残されたのは形水さんと私達だけでした。それから今日までお互いが老年になりました。（中略）亡き路郎先生、中島生々庵先生の句碑が淡路島に建立されたのも、形水さんの出身地であることから、並々ならぬ尽力をされたと聞いております。『川柳塔』発刊以来、こころよく表紙への広告を続けて下さいました。（川柳塔平成十三年一月号・藤村メ女悼文）

「故形水氏と亡父亜鈍とは昭和6年頃から友人で、私は39年に氏の経営する紳士服の会社に入れて貰った。爾來36年間、公私ともにご指導を頂いてきました。

入社後三年ほどしてから、仕事を終えた後から毎月句会を催すことになり、清水白柳・伊藤入仙・川村好郎・宮西弥生の諸氏を指導者として迎え、昭和60年まで続く。（中略）

今では数えるほどしかない路郎門下生のひとりで、会社を創業する時、路郎師から贈られた足踏みをするなを座右の銘としてきたのが形水さんでした。

形水氏の傍らに居て、川柳人や業界人の接し方を見てきたが、いつも自然でつくろうところが無い。どんな事件に遭遇してもきわめて平静であった。社員にはよく分相応にと戒められる一方、一流になれプロ意識を持って促していた。振り返れば氏を軸に、さまざまな人との出会いがあり、有形無形の影響を受けてきた。数少ない人生の師の一人として氏から受けた恩恵は図り知れないものがある。（川柳塔 月号・藤村亜成悼文）

平成12年12月11日、老衰で歿、九十三歳、興雲院形水日正居士。

谷町は丁稚車にきつい坂 形水  
ルンペンの服からヒント得たモード ♪  
船場からまた名門が一つ消え ♪  
堂々と表門からきた詐欺師 ♪  
よくも用あるもの老妻動きづめ ♪  
商人の胸に勲章似合わない ♪  
口ポットが人使う時がきつと来る ♪

▼次号は「佐藤 正敏」

# 誹風柳多留二四篇研究 29

伊吹和男・大野秀二  
小栗清吾・粕谷長生  
橋本秀信・山田昭夫

清 博美・佐藤 要人

226 それいわぬ事が抱てうだあらだら

伊吹 女客が若夫婦の赤子を抱いて長話、暫くすると膝がなま温かい、氣付いた時には既に遅く小便をされたという次第。

しうならばしうといやれとふいて居ル

校19

大野 賛抱いているのは遊女とも考えられる。  
橋本 あまり景を限定する要なし。乳児を他人が抱いていて小便をされただけではないと思つ。  
清・佐藤 賛。

227 あまい酢でくわれぬやつハはつ鯉

伊吹 「甘い酢」には、味醂または砂糖を混

ぜた酢という意と、いい加減な考えや態度という意がある。

初鯉の刺身は辛子味噌で食うのが相場であるし、高価な物であるから、いい加減な気持では食うことが出来ない。よつて、初鯉は甘い酢でく食われない。

あまい酢でくふハおふくるばかり也

拾七

清・佐藤 賛。

228 吉田小僧が命日にむすこ行き

伊吹 「吉田小僧」は、謡曲「隅田川」などの吉田少将惟房の一子、梅若丸。隅田川のほとりて天延二年三月十五日十二歳で死んだとされる。

その梅若忌にかこつけて、吉原へ行くドラ息子。  
あはれさ八塚になつても度々売られ 莖二 16

清・佐藤 賛。

229 まだいきが有とたいこハつきまとい

伊吹 「まだ息が有る」とは、瀕死の重病・重傷人などに対して、まだ一縷の望みがある場合に使われる語。

親父から勘当されるのが秒読みになつたようなドラ息子に対し、まだ金蔓としてなんとか利用に耐えられると踏んで、付きまとう太鼓持。

おぢよりまつ見限るハたいこ也 二四 25

清・佐藤 賛。

230 吉原で初めて一チのふりてなり

大野 振手は、よく客を振る遊女。俳諧・崑山集「ふり手をやむざとかかるな雪女」浄瑠璃・双生隅田川「野上の宿で全盛の太夫、海道一のふりて」(『日本国語大辞典』)  
吉原遊廓始まって以来、最大の客を振る遊女、それは仙台侯伊達綱宗を振つた三浦屋高尾である。金ではなびかぬ江戸の張りをモツ

トトとする吉原遊女の高尾を絶賛する意味が含まれている。

吉原でふられた人の名の高さ 一七一

ふつて〜 ふりぬいたハ高尾なり

天公松?

散る紅葉世界にばつと名が高尾 八六三

清・佐藤 賛。

231 首二ツうけ取って生酔ハたち

大野 酒に酔ってぐでんぐになつてゐる者を介抱するのは難しい。生酔を連れて行くこうとして、二人で両脇から支えて立ち上がる様子が、つまり生酔が二人の首に手を回して立ち上がるのを、首二つを受け取って立ち上がるように見えるという句。

下戸の首二ツかゝえて世話になり 一五〇

生酔を巻付て来る下戸の首 二九二

清・佐藤 賛。

232 油壺ぐれんねた刃をあわせてる

大野 油壺は、油、とくに髪油を入れておく壺。寝刃を合わすは、刀剣の刃を研ぐ。刀剣の刃を鋭くする。また転じて、ひそかに悪事

をたくらむ。内密に事を企てる。本句の引用あり。(以上「日国」)

『新編川柳大辞典』には本句の注に、油壺に炎の移ろうとするさま、とあるが、礎稿は子供の頭を剃るために、剃刀を研いでいる句と解した。「紅蓮」は紅蓮地獄から寒けがするような鋭い剃刀を意味する。油壺や剃刀などは整髪の道具。

しんかんと寝刃を合す枕がや 一〇一四

寝刃を合すそのそばにすうやすや 一七四〇

小栗 よくわからぬ句、日本古典文学大系『川柳狂歌集』では、「紅蓮の炎を擬人化して、延びつ縮みつ、まさに油壺に火がうつろうとする、状態をよんだ句」と註がある。何が面白いかわからぬが(紅蓮だの寝刃だの大仰な言葉を使っただけのことか)、自説もないので、杉本説をいただいでおく。

橋本 同右。「紅蓮」は普通「猛火の炎のとえ」(「広辞苑」)として使われることが多いと思う。『江戸語の辞典』にも「寝刃を合はす」の解として「ひそかに事をたくらむ」として、右の擬人化の説をとっているが、説明不足でわからない。

いずれにしても、子供の髪剃りではないと思うが、不詳。

伊吹 油壺が女性を象徴するものとするとお妾あたりのよからぬ企み。また、『雑俳語辞典』寝刃を合||男根勃起の比喩、とすると、破礼句とするのは珍説?

清 諸説いづれも納得出来ず不明。

佐藤 小栗説、つまり杉本説でよいのではないが、表現の面白さだけの句。

233 中めきの中にこま下駄ころんでる

大野 中抜は中抜草履の略称。中抜草履というのは、藁の芯で作った草履で、緒藁に白紙を巻き、吉原通いの者や有徳の町人が履いたものである。(『川柳大辞典』)

駒下駄は台も藪も一本の木でくり抜いて作った下駄。素人はあまり履かず、おもに芸者、遊女などが用いたのである。(同)

茶屋などの玄関先の中抜草履とそれらの中に踊子の駒下駄が乱雑に脱いである景を詠んだ句。玄関先の履物から留守居役の遊興であろう。また、踊子はよく転ぶので、その駒下駄も転んでいると表現した。

駒下駄を野暮な草履の中へめき 傍二二〇

駒下駄で出るとそのでこぼこぶ也 三三三六

清・佐藤 賛。

# 秀句鑑賞

同人吟 土橋 螢

—4月号から

山川草木みなみどり。待春の心もさらりとみどり色。

免許更新三年日記八十五

林 露 杖

漢字十一字で川柳になる。まだまだ百歳まで十五年。免許証も三年日記も長寿の秘訣でしょうか。

お赤飯食べず嫌いが一人居る

石 尾 かつ乃

おめでたいときに赤飯をつくったりもらったりしていただくのに、食わず嫌いの男がいる。みんなが食べるので嫌いなのか、おかしい。舐め合った傷がだんだん深くなる

川 上 大 輪

仲よしだったご夫婦、いままも眼の前を過ぎる。富湖さんのご冥福をお祈りします。

大声で笑うと元氣出るそう

徳 山 みつこ

小さい声で笑つても目立たない。笑うなら大きな声で笑うがよい。誰に遠慮がいるもんか。とても元氣になる。

氣がかりを背負って今日を歩き出す

川 本 畔

マイナス点を繰越すと氣になるのなら、何もかも忘れて、朝起きる。煩惱だから欲が湧いて、氣になることもうまれてくる。

人は自然に順応し、大自然の恵みを食べ、

四季を謳歌する。しかも日本語の五七五で触れあい、人生の美しさを追求する。十人十

色の個性が川柳で競い合う。その善し悪しはさておいて、私の好きな句を秀句として列挙してみることにした。一度読みの好感度で、○印をつけた句である。

わが夢の銀河に続き果てもなし

奥 田 みつ子

夢の向うで光るのは幻か、星か。その星のひとつひとつがやがて銀河に連なって果てしなく続く。そして現実の正夢になるといい人に囲まれ春になっていく

高 田 美代子

春を感じて春を愛する善男善女ばかり、その中に自分も加わってゆく。動物も植物も、春を待ちつづけてきたもんだ。

春風が寂一点を抱きにくる

松 原 寿 子

動中静の侘び寂をなまめかしい春風が抱きにくる。紅い毛氈の上で春のお茶席にどうぞ

という風景が浮かんできます。

酔うたまま暫くいたいふたりなら

増 田 紗 弓

月に酔い、花に酔い、酔った真似をして、肩を抱かれ、暫くそっとしておいて。

待ちぼうけやつと氣付いた四月馬鹿

安 達 はじめ

カタカナでエープリルフル、待ちぼうけさせられて氣がついた春のいたずら。

よく笑いよく泣き嘘もうまくなり

三 宅 不 朽

人生は喜怒哀楽の繰返し、時には嘘も混ぜ合わせて旅をする。嘘かまことか区別できない嘘をつけるようになる。

真心を壊さぬようにそつと受け

野 口 節 子

絶対に嘘偽りは申しませんと言わなくても真心は通じます。誠心誠意最善を尽くすことが真心なら壊したら大変です。

春を待つ心はすてにみどり色

片 岡 智 恵 子

診断書 僕を軟禁するつもり

海老池 洋

生きている証に健康診断をして、体力を知る診断書もあれば事故等の示談に添付する診断書もある。軟禁されて健康生活ならば結構なこと。

桜咲く頃やさしくなった娘が帰る

小島 蘭 幸

卒業・入学・就職の三月・四月、女らしくやさしくなった娘が帰ってくる。その時には父であり母である実感がわいてくる。

歎異抄ひらくころが乾いたら

西出 楓 楽

浄土真宗の祖、親鸞聖人の滅後聖人の口伝真信に背く異議を歎き、唯円房が行者の不審を除くため著した歎異抄。悪人正機が有名である。私もひらいてみよう。

美しく老いたし広く窓開ける

最上 和 枝

美しく老いることは難しいかも知れないが、せめて窓いっぱい開けて深呼吸してみよう。

煩惱を洗って爪をといでいる

山海 友 照

欲張りが顔を洗って食べる爪をといでいる。私もそうである。

長風呂を誰もどきまにきてくれぬ

政岡 日枝子

幸福を誰も干渉しない。特に母さんの長風呂はいつものことだから。長風呂は美容にはよろしいが、脳や血圧にはよろしくないとか。大きな声で泣いているから大丈夫

三宅 保 州

インフルエンザが大流行、私の孫も39度の熱で保育園を休んだ。大きな声で泣くのは、まだ元気な証拠、感情動物だから泣くがよい。相談を口実にして違いに行く

小玉 満 江

大好きなひとに逢いたいときには「ちょっと相談したいことがあります」というテクニク、あまり再々は使えない。よく言えば香車のような人でした

小林 妻 子

真つすぐ前に進んで一歩も後退しない香車、それは妻子さん、あなたのことですね。

敬老という字に甘えてはならぬ

津村 八重子

日本全国高齢化、平均寿命は八十歳とか。長寿は喜ばしいこと、居てもらいたい人、どうでもよい人、居てもらいたくない人の三種類あるとか。いつまでも居てほしい八重子さん。

十二時に時計が合つて腹が立ち

小池 しげお

十二時に時計が合つのはあたりまえである。あたりまえのことが川柳に詠める先輩に腹が立つほどである。とても滑稽な川柳です。この枷をはずせば狂うかも知れぬ

吉田 あずき

こと枷とは、妻・母・女でしようか。年輪のついた枷をはいている女性、それがとてもよく似合うようになっていく。その枷をはずせば狂うかも知れぬという心象句。

息子から労られたりせぬように

新家 完 司

ハツとさせられた一句。私にも同居の息子（46歳）夫婦に孫（12歳と4歳）がいる。時々、慰労してもらいます。

憂快な男に隙が多すぎる

長浜 澄 子

男らしさとは信頼感というけれど、男は豪快に見えるときと甘えん坊になるときがある。隙を見せているのも男性美かも知れません。

体温が伝わるように話しかけ

菌田 狛 杏

人間も哺乳類動物、肌の体温を上げ下げして身を守る。和を保つために触れ合うこともある。人間関係は微妙な所から交歓される。

# 水煙抄

## 板尾 岳人 選

横浜市 鈴江 純子

息合わせ渦乗り越えた夫婦舟  
決断の早さを罨が待ち受ける  
涙目に弱くつついっい許して  
味噌汁と漬物教え嫁がせる  
歯をみがくまだ見ぬ今日に会うために

東京都 清原 悦子

苦労した日々の日めくり忘れてる  
正論に控え目少し混ぜておく  
ロボットにやきもちまでは通じない  
平凡な日々にもあつた途中下車  
負け方も私流の武器をもつ

秋田県 湊 修水

挨拶は降ることばかり雪を掻く  
これ以上何を耐えよと休耕田  
生き抜いた畔の深さがもの申す  
方言で喋ると空気あつたかい  
鍋囲む春の話題も煮えてくる

岐阜市 平野 あずま

豆を撒く袴凛々しく茶髪の子  
こっそりと春を覗きに露の臺  
風花の淡い想いを掌に受ける  
インク壺満たして余生のペンを研ぐ  
繩のれんくぐれば父のユートピア

和泉市 小坂 凡英

老いること知らぬ元氣な自尊心  
盛り上り後で臍嘔む語り草  
泣きどころ一つ握られ意のままに  
困りやせぬ意地で胸張る妻の留守  
会員を制限しだした老人会

吹田市 木村 無禄

亡き母の嫌味なつかし手向け花  
新しき出会いへ今朝の深呼吸  
病院に病人何と多きこと  
機密費があればと思う進学期  
子雀が去って一茶になり損ね

尼崎市 軸丸勝巳

河内長野市 水谷正子

日本の裏と表を分ける雪

日本海折る気になる陽の沈み

ほおかぶり取れば朝市みな美人

能登金剛ゼロの焦点読み直す

政治家を褒める一句がまだ出来ぬ

大阪市 熊代菜月

無人駅トンボ二匹もおでむかえ

程々の欲がささえる明日がある

開けしめを忘れた心きしみ出す

結果聞く胸が太鼓を打っている

退社ベルそこから母の顔になり

吹田市 須磨活恵

希望の灯 命の奥の奥で燃ゆ

曼珠沙華火の海越えて逢いにゆく

わたくしの名前に足りぬ柔かさ

きつと来る明日のために米を研ぐ

仕舞風呂 命ゆつたり抱きしめる

河内長野市 大西文次

頼まれた方もおんなじ金詰り

夫さえ呆れる妻のフラダンス

関空で気付くハワイの忘れ物

割勘の言い出し兵衛に煽られる

開いた口塞がらなくて困ってる

旅に出て一歩どころか七回忌

金持ちも平等一ツ年を取り

真剣に暗算してる回り寿司

いい事がありそう予感 春一番

アルバムは亡くした帽子着て笑い

羽曳野市 山本たけし

職探す汗を知らずに継ぐ暖簾

ハードルを高くし怪我をした迂闊

千年の節目跨いで生きている

アクセルをいくら踏んでも老いの足

ストレスをゆつくり溶かす縄のれん

京都市 山本 磔

折紙のようなことばで包まれる

負け上手になつております昨日今日

羞恥心 人間以外みな裸

カルシウムばかりが目立つて来たようだ

人の世の砂漠に水を下さいな

高槻市 左右田 泰 雄

匂の味かみしめている春野菜

清らかな雪の涙か軒つらら

プランコをゆすれば春が動きだす

気の早いうわさがひとり歩きする

ひよっとしたらひよっとするかもふきのとう

伊丹市 延寿庵 野 靄

オーム貝太古の歴史秘めて生き  
素直になろう真つ直ぐに切手貼る  
散る夢をいつも見ている花名刺  
真ん中へ座つて鬼が叱られる  
うぬばれた顔へピエロが紅を引き

大阪市 伴 洋子

捨て切れぬ未練に泣いた赤い花  
振り切つて女ひとりの帰り道  
小気味よいジョークほのほのする空気  
だしぬけの告白明日は雨だろう  
嘘くらべ涙に勝る嘘はない

武蔵野市 亀 井 円 女

人ごとと素知らん顔が出来たなら  
大声で笑える人は善人だ  
誰よりも許してくれる夫が居る  
年寄につらい横文字かしら文字  
ハンگریーにとことん泣いた戦前派

横浜市 田 中 笑 子

来る春を待つかのような福は内  
ちびちびがぐいぐいになる旨い酒  
淑やかな御辞儀に惚れて妻にする  
お喋りが佳境に入る鍋の歌  
何着よう脱いだり着たり初デート

横浜市 山 本 為佐子

夢を盛る器がちよつと小さ過ぎ  
世の中が変わるボケてはいられない  
棒読みを聞かされてはいる無表情  
片づけるふりして探しものをする  
検査値が箸もグラスも取り上げる

横浜市 近 藤 道 子

ゆつくりと歩いて春を探す靴  
花曇り日本の明日気にかかる  
昨日から書き続けてる長手紙  
再会の約束桜咲く時に  
未完の絵増やして冬の幕閉じる

横浜市 荒 井 広 和

身の丈を忘れ妄想追い掛ける  
朝礼で形状記憶する社訓  
保護色で塗る少子化の婊論  
六法の隙間で浮遊する悪意  
屈折の心を映す万華鏡

横浜市 巖 田 かず枝

ウエディングドレスに期限付いている  
友からのくぎ煮が届き春を知る  
球根によく言い聞かせ春を待つ  
断りが下手で善い人だと言われ  
ピンはけの振りで争う事を避け

横浜市 保田絹子

思ひ出を逃避の場所にしないね  
借りものの言葉に出会い眼を伏せる

待つことも能力のうちかも知れぬ

お話を横取りされて座が白け

白酒に美声が戻る雛の宵

横浜市 川島良子

美人かと男はすぐに聞きたがる

天国も満開ですか桜咲く

さあ声を出そうよ春を歌おうよ

好きだから好きと言えないこともある

正直な人です顔に書いてある

横浜市 芦田鈴美

気にしてるから悪口も言ってる

ひな飾り終り三十路が騒がしい

記名した投書に少し見栄を入れ

大勢としても心が淋しがり

遊んではおれぬぞ妻のゴルフ熱

神戸市 両川無限

気を抜くとルーズな風が忍び寄る

母さんの出番 喜劇のままがいい

淑女ではないが誉めたい妻がいる

ハイポーズ不協和音は聞こえない

気の迷い知ってかの揺れている

田辺市 大峠可動

偏頭痛ここにも生の労働歌

大脳に嫌気を溜めて落ちてこぼれ

運命に刺されて昏れて火の海へ

群れにいて闇に住みつく四面楚歌

はは在る日おもかげにして寒牡丹

和歌山市 松尾和香

咲く花も散る花もあり港町

体重計針の動きを睨みつけ

極楽のつもりが針の山に着く

花束を抱いて言葉が出てこない

新世紀まだ輝いている私

和歌山市 上地登美代

新しいことが好きだと言う野望

このところ右脳左脳がさびれがち

数字には弱い知恵のあるカラス

着飾れば意外私もまだ女

溜め息を吐けば灯が滲みだす

岡山市 藤原ただし

夢一つ下さい私は枯れすすき

森の樹の匂いも好きで父も好き

錆ついた釘が一番効いている

父の樹にいらぬ小枝が一つある

一つだけ動かぬ石が胸にある

岡山県 国米 大きくゑ

少年少女夢を与えていた漫画

人間の森で蓼食う虫と住み

点滴の痛み命の鼓動きく

働哭の銜を抱いてくれた森

割箸が森のみどりをおびやかす

綾部市 藤田 芳郎

神様をこちら向かせる最初のゲ

這ってでも進めと父の獣道

九分九厘あと一厘を言い訳に

じっくりと聞き相討ちにしてくれる

瓜二つ言うて本気で怒られる

鳥取県 鳥羽 直市

吹き溜まりあるから明日も生きられる

低金利預金太らず眠ってる

みそ汁の向こうに亡母が座ってる

口下手をにっこり顔でカバーする

ふたりしておとなの余白埋めてゆく

鳥取県 西垣 美知子

里帰りあけると母がこぼれ出る

迷わない明るい朝に深呼吸吸

食べ残しかあさん食べてよく太る

片方の耳が妥協を許さない

敏伸びて美人になれた風呂上がり

鳥取県 岡村 孝明

溜まり水替えて人事が活気づき

大騒ぎしても盥の中の波

懸案が解けて心は爽やかだ

我が家にも気立て優しい嫁がいる

一杯のコーヒー恋の芽を育て

鳥取県 鳥羽 玲子

沈まない程度にやっと泳いでる

けんかした後はすっきり茜色

近所の灯消えて眠りをせかさされる

自分史に秘密の話抜いておく

ムード音楽眠れぬ夜の子守唄

鳥取県 山岡 久枝

冬抜けて明るい話題きこえだす

まだまだと頑張る足に灸をすえ

連休は気楽畑の風に逢う

前列の席に座って肩がこり

いつまでも座ってほしい父の席

鳥取県 澤 裕子

スランプも抜けた五月の風に乗る

筆を持つ右手に度胸試される

生ぬるいルール私を駄目にする

あれこれと母は捨て身で子を守る

情報に一喜一憂する株価

鳥取市 録 沢 風 花

宿命で荷物そっくり背負わされ  
杖になり時に柱となる余生  
寺まいり氷雨にこころ濡れながら  
平凡に生きると決めたはずなのに  
変化球女もときに投げてみる

鳥取市 山 宮 愛 恵

大根がうまいと母の文がくる  
夢のなか母を背負うたまま目覚め  
ふる里で心の掃除して戻る  
とろとろと炊いた大根母になる  
世界地図広げてひとり南下する

米子市 猪 森 スミエ

じつと待つ明るい橋が架かるまで  
明るい種早く芽を出せ永田町  
夜桜の雰囲気にもう酔っている  
あれこれと夢追いすぎた千鳥足  
宇宙まできつと飛ぶ夢金魚鉢

鳥根県 武 島 ちよえ

無器用で掴み損ねた青い鳥  
電柱の陰から春が呼んでいる  
春の風心の棘を抜いてくれ  
寄り道をして来た人に味がある  
深刻になるなど他人は軽く言う

鳥根県 菅 田 かつ子

マネキンが衣更えして気どつてる  
明日また描き足す色は鮮やかに  
うるさいがやっぱり側に居てほしい  
趣味の会 オレンジ色で出かけよう  
このままに歩けばきつと辿り着く

松江市 津 川 紫 晃

あちこちに鉛筆置いて春を待つ  
かたつむりいつかは届く夢運ぶ  
春の風胸の風船ふくらます  
春の風私の部屋をノックする  
音律を調整しあう夫婦道

出雲市 伊 藤 玲 子

山茶花が椿を恋うてはらはらと  
しばらくは春に恋する花になる  
あの日から白紙になったダイアリー  
雲海にストレス吐いて軽くなる  
くたびれた靴が子供とよく遊ぶ

今治市 塩 路 よしみ

散る花のいのちを惜しむ春嵐  
深追いはよそう火の粉が降りかかる  
意に染まぬ風にも溶けて人許す  
凜とした心を持ってと梅が咲く  
ふる里の風が素顔になれと言う

今治市 渡邊 伊津志

具体的なことに抽象的な愛

気の緩みから噴き出した肩の波

太陽が作ってくれる陰日向

足裏に踊る言葉を溜めている

溜めているから鳩尾が痛み出し

今治市 中村 好恵

しなやかな生き方学ぶコラム欄

ありがたいの言葉になごむ小商い

焼け石に水で保険の満期くる

亡き父の思い出遠い寒の月

野の花の温もりが好き辻地蔵

松山市 高橋 宏臣

気が付けば靡いた衆の中に居り

旗色が悪そうだからそつと立ち

苔むした歳月包みこむ頑固

生きてきたルールを苔に問い直す

パッサリと切ったコラムで朝を出す

香川県 原 賢

平凡と知った目線に幸がある

妥協などしない男にある孤独

過去たまたみ男の明日へ夢を追う

生きていて良かった今日も温い風

終章へふとひたむきになる合掌

高知県 近森 功

首に鈴付けて夫を放し飼ひ

等身大鏡が僕に背を伸ばせ

爺ちゃんも一枚脱皮して五月

ヒョットコとおカメが暮す五十年

幸せはハンドル握り医者通ひ

高知県 桑名 孝雄

ほど程の夢を掘らせている甲羅

まだタオル投げてはくれぬリング上

巳年でも蝮は仲間から外す

介護保険しくみは介護されてから

離婚劇 補欠がないのでやめる

高知県 小川 てるみ

母がまだ真ん中にいる三世代

手の内を明かしてからの孤独感

ふる里の春の小川が涸れている

不器用に生きて小銭が貯まらない

人並と言う中流に流される

北九州市 岡田 幸生

耳よりな話を持って来た詐欺師

初耳のふりで聞いているある打算

ライバルのキーボトルと会う飲み屋

イニシャルを刻む指輪に縛られる

母さんにまたも頭痛のなるハガキ

大阪市 榎 本 日 出

ふらふらと出かけて見たい春捜し  
衣食住あつてわが家にバラサイト  
定年もポーナスも無いおんな道  
優しさに心開いた頑固者

大阪市 榎 本 舞 夢

美しく生まれたばかり誤解され  
あわててもどうにもならぬ正座する  
恋をしていい顔のまま逝きました  
リハビリが実りようやく笑顔出る

大阪市 大 川 道 子

怖いもの何もないと言う強味  
政治家を思えば可愛い君の嘘  
定年でゴミ出し風呂炊き父の役  
責任感茶髪が変わる子が生れ

大阪市 中 村 叡 子

母の忌に母の年齢越す姉妹  
桃菜種母の忌やさし雛の月  
落椿今年はたんと咲きました  
雪国は辛いつらいと雪誇る

大阪市 中 村 忠 敬

木洩れ日を浴びて糞虫揺れている  
熱き酒するめ炙つて欲もなし  
この国は自然を愛でつつ破壊する  
県警が県警本部捜索す

東大阪市 今 岡 貞 人

前向きに生きて暮らしの汗を拭く  
陰陽の程良い位置で身をゆだね  
有為転変どうあろうとも福寿草  
佳き時代春の小川とともに消え

東大阪市 笠 井 欣 子

検診日叩けば埃出る体  
日々多忙 趣味の時間は別口座  
脱皮した蛇も入れます黄の財布  
機密費がお役に立つて喜ばれ

東大阪市 田 中 美 弥 子

紅い糸もつれて解いてまたもつれ  
良心を信じて待っている愚か  
雲低く睡眠薬が足りませぬ  
何もかも許してこころ軽くなる

吹田市 太 田 昭

しつけ糸抜いて縫い目の母に会う  
酔うほどに真の自分が会いに来る  
淀駅で赤鉛筆が降りて行く  
水鉄砲撃たれた父が死んでやり

吹田市 木 下 敏 子

明るさを願い派手目の服を買う  
十指みな動く倅せ気がつかず  
風邪引いて嫁のお粥の味を知る  
にぎりめし春の踵を弾ませる

吹田市 二宮 栄子

みそ汁をねだる仏と朝の膳

独り居の我がまま朝日見て起きる

伸びすぎる枝へ思案の鉢入れ

目で習い舌でおぼえた義母の味

吹田市 早川 棲世

子の機嫌うかがい家業継ぐ話

七回忌後妻が何もかも仕切る

地下鉄で化粧し決意まだつかず

雨 余寒 孤憤 未摘花を繰る

高槻市 生田 義一

幾年も仲むつまじく夫婦坂

大根の味に故里母偲ぶ

人生に待ったが欲しい喜寿の坂

すぐばれる小さな嘘で茶をにごす

枚方市 二宮 紫鳳

ジョギングの足どり軽き春うらら

嫁がせた娘をしのぶひな飾り

待ちました孫の話題の仲間入り

パソコンにできない筆の息づかい

豊中市 みき わきみ

じいちゃんが往ったはここだ孫の地図

この不況 運鈍根もネタが切れ

庶民すら公私の別があるものを

照る日曇る日また同業が廃業す

堺市 大橋 錦

衣装には負けてはならぬ合唱団

朝冷えて昼は冷房ほしくなる

白髪のショートカットが似合う母(九十一歳)

孫と風呂しゃべり続けている私

堺市 梶本 哲平

自分史の苦渋の日々の遅い筆

人生は人に仕えぬものと知り

騙されたことは幾百騙せない

自分史は未完世に出ぬ未定稿

堺市 斎藤 さくら

口紅をピンクに変えて春迎え

ストレスを娘の酌で救われる

下心あるのか話旨過ぎる

幸せのレール敷きたい親心

八尾市 田中 トシエ

女には男のロマン計りかね

コンバクトわたしの表紙整える

綿雲をフトンに入れて寝てみたい

激安のチラシ重なる連休日

八尾市 山本 宏至

白地図に二人で描く愛の道

理屈ではやりこめられぬ妻の耳

いい汗をかいて今夜もうまい酒

定年の足がやっぱり駅に向く

柏原市 永浜 加津子

指切りの少年の眼にうそは無い  
お水取り終れば春が押し寄せる  
雪の降る別れはこころ凍てついて  
葬列に雪はしんしん兄は逝き

河内長野市 木太久 正一

蛍雪の夜学三年宝の日  
庭の梅突然目白群れており  
美容院明るい顔の妻戻り  
二食よりほんとに旨い晩ご飯

羽曳野市 森田 四三郎

一杯のコーヒで癒す旅帰り  
プライドも捨てて紳士の二度の職  
追い越しも違反にならぬ社の人事  
終着駅そろり近づく八十路坂

富田林市 山原 昭水

鉛筆を削れない子が持つナイフ  
秀吉も呑んだ伏見の酒を呑む  
枝豆とビール至福の中にいる  
金剛山親子の絆深くする

和泉市 横山 捷也

危険とは分つて虎穴を覗き見る  
解説は要らぬ九回ツアーアウト  
重すぎた大志を書いた日記帳  
横文字のカルテ覗かぬ事にする

岸和田市 不破 仁 緑

物忘れしても晩酌忘れない  
くしゃみして桜の蕾まだ固し  
巢立つ孫柱の傷はそのままだ  
来年も逢おうと梅の花を摘む

泉佐野市 稲葉 洋

錯覚の混じったチョコのほろ苦さ  
機密費にされず戻った還付金  
外壕を埋めたところで和議となり  
不慮なんて言うな緊急浮上の悲

泉佐野市 備後 三代子

朝鏡いつの間にやら古希も過ぎ  
姑のこと真似て柀挿してみる  
消しゴムで消せない話 雪の夜  
春を待つ色鉛筆もスタンバイ

大阪府 野田 栄呼

鬼になり仏にもなる子育ては  
日記帳喜怒哀楽がつまってる  
遠い日の記憶の扉日記開け  
ゆつたりと座り心地のよい家族

神戸市 木村 忠義

距離置いて物を眺める方がよい  
ハウスもの過保護のように育てられ  
心からわき出た笑みの美しさ  
ありがとう言ってくださるうちが花

神戸市 山口 光久

活力は赤ちやうちんが保証する

幸せが笊から漏れぬ工夫する

目出度い日それでも化粧しない母

お酌なら美人にかぎる春の宵

尼崎市 河津 正治

筋だけは通した意地が凶と出る

石狩鍋味噌の香りに鮭が酔い

母の背の丸みに愚痴を抑え込み

赤だしの香りは朝のハーモニ

尼崎市 森 安夢之助

筋道を通すと弱い父である

左遷地の旨い地酒に惚れました

ロボットに温い言葉をかけてやる

タイミングのずれた笑いで笑わせる

姫路市 北条 てる代

善人の顔であざやか芥子の花

またひとつ罪を重ねて陽が落ちる

糸屑でつないだ程の夫婦仲

ほめ上手乗せられ一生舞いつづけ

兵庫県 山本 泰子

芽の出ない子の尻たたく親のエゴ

残照はたのしい夢だけ盛っておく

結果論さわいでみても仕方ない

勝ち負けにこだわるつもりないけれど

和歌山市 今 一步

寒暖に一喜一憂衣更え

桜だより暗い世情に灯をともし

今日を生きる朝の化粧に念を入れ

綻びの心つくろう本を読み

和歌山市 武本 碧

踊る笛踊らぬ笛の自己主張

足し算も引き算もなし夫婦坂

草の根を分けても居ない王子様

案ずれど棚から落ちた良い知らせ

和歌山市 吉田 比佐子

泣く子より静かな方が気に掛かる

鍋焦がしもう捨てようか磨こうか

パッチワーク端切れ選んで夢をみる

譲られた席に素直にありがとう

海南市 堂上 泰子

ニューモード ストレス飛ばす早春譜

還暦の記念 紅白梅を植え

般若にも菩薩にもなるまだ女

負けん気が老いに活力湧かせくる

和歌山県 中村 君枝

舵取りの上手い女房で気が抜けぬ

一張羅やせても男身を飾る

聞き役の夫も言い分あるだろう

失敗も無傷で終る転びかた

和歌山県 森 下 順 子

仏壇の夫へたいやき買ひ足して  
ほどほどに暮らせる今の満足度  
腰も背も曲がりたがっているようだ  
出不精なだけで一度のまとめ買ひ

和歌山県 杉 山 精 子

春一番黄砂にいらぬバスポート  
生き延びる残り時間を確かめる  
指先までのち吹き込む夢二の絵  
ティーカップ買つて優雅な午後になる

奈良市 乾 春 雄

舞い戻る予感に母はじつと待つ  
病んでなお女は髪を梳いている  
切り札にだんまりと言う武器を持つ  
フルムーン財布の口がゆるむ旅

生駒市 飛 永 ふりこ

お水取春の足音聞こえます  
こげているピラフ値引をして欲しい  
ジーパンの穴から見える弾む夢  
トンネルを抜けると生駒山がある

奈良県 古手川 光

はるばると黄砂が春を告げにくる  
東京にあるのに遠い永田町  
白鳥と共に走って職を終え  
南朝の哀しいドラマ見た桜

奈良県 江 波 正 純

ふきのとう絵手紙に乗り春はこぶ  
みんなには黙ってそつと旅に出る  
旅先のドジな話もおみやげに  
去るものは追わない主義で金はない

京都市 勝 山 美 千 代

ランドセル親の夢まで詰め込んで  
ほろ苦さ春の味覚に命延び  
部屋一杯花の香りが誘い込む  
蹠いた昨日の自分振り返る

京都府 前 上 英 一

千羽鶴翔び立つ窓は開けてある  
風五月歩くりズムも余生の譜  
肉筆の手紙に飢えているポスト  
先見えぬ世相に眼鏡拭くばかり

札幌市 三 浦 強 一

妻という黒子がはくを踊らせる  
ふる里で又三郎の風に会う  
天の声地の声聞いて育つ稲  
駆け抜けた二十世紀の誤字脱字

富山市 沢 江 和 代

聞き上手な猫と一緒に午後のお茶  
しあわせを掴んだ予感梅香る  
青い空まだ見たいからボケられぬ  
仏様たまに葡萄酒飲みましょか

富山市 松見たえ

愛までは進めなかつた恋の風

ポケットの隙間で覗く意地つ張り

手の平で掴みそこねた冬いちご

積年のしこりの紐を解す旅

新潟県 高野不二

ぜいたくな話産地を選ぶ米

記事だけで腹の立つ記事泣ける記事

年齢を聞いて我が身にくらべてる

葉貰うだけの半日まだ元氣

日上市 加藤権悟

雑草のバイタリティーを見習おう

忘れたいことを覚えている妻だ

もう一度老眼鏡にもつルーペ

田の神とむかし話をする田螺

静岡市 中西雅

石庭の石の位置にもある掟

膝痛と長年世話になってます

甘言に乗った馬鹿です私です

家事あれこれ私の手から逃げてゆく

東京都 井上つよし

最後まで意地を支えた土踏まず

下車駅を違えて趣味で暮す羽目

ドカ雪に負けず少女はミニをはき

花が咲く自慢話に牡丹雪

藤沢市 妹尾安子

知らぬ間に特技になったもらい泣き

里帰り土産のように孫を出す

見晴らしを誉めて急坂伏せておく

先ず逃げてそつと見なおす黒い紐

町田市 土田今日子

口も手も達者で夢もグローバル

エンゼルもサタンも内に飼い馴らす

蔷薇色の人生に見る泣き笑い

薄味の料理に老いを閉じ込める

横浜市 秋元和可

会う度に必ず一つ褒め言葉

終章も北風吹けば受けて立つ

菜園の出来褒められておすそわけ

絵手紙のモデルつとめるへばきゆうり

横浜市 生坂サト子

セラピーに凝り気晴らしはこれと決め

年金の話になると偏頭痛

夕飼時温かニユース花を添え

節約をミール宇宙で強いられる

横浜市 北沢街湖

喧騒を忘れて浸る花吹雪

肝心の所で入るコマージュシャル

気の合った友と本音を酌み交わす

国訛九官鳥は見逃さず

横浜市 金森徳三

新世紀などと気張らず適当に  
無洗米明治笑つて目をつぶり  
啓蟄やかかげの家族達者かな  
二歩進み一歩退がらず立ち止まる

横浜市 平達也

呑み込んだ不満ふくらむ腹の虫  
大自然誰も勝てないその撰理  
泣かせたい笑わせたいとする芝居  
ささやかな贅沢名画飾る部屋

横浜市 布山嘉信

ジューと音たて熱い陽の沈む海  
ライバルに勝たしたくない力水  
四季の花猫の額に競わせる  
七百兆国の借金ケセラセラ

横浜市 山梨雅子

ひとり住み古いバイクが置いてある  
単身の赴任で電気釜持たせ  
公立に決め懐が楽になる  
帰りに車窓の桜花開き

横浜市 吉田裕峰

予想しただけの馬券が大当り  
即答をためらう電話壁に耳  
中吊りの広告だけで読んだ振り  
予想した唇寒い評論家

鳥取市 岡田信恵

ファッションが追い風にのり春をよぶ  
首筋の老化隠せず見抜かれる  
遣伝子が良いのか白寿むかえたよ  
背のびせず流れるままに暮そうか

鳥取市 近藤秋星

雪ダルマお前は春が嫌なんだ  
たこ焼きがよく売れている花の下  
世の中は男 女の物語  
凜として生きていきたい新世紀

鳥取市 田村邦昭

強引な主張を通す裏ばなし  
縛られたルールに生きる行儀よさ  
日記帳酔いの忘れを待ちつつげ  
噂話火のない場所で燃え続け

鳥取市 永原昌鼓

迂闊にも出した右手が悔いている  
大吉へ賭けて薄氷踏んでみる  
うっかりと乗った小舟は泥だった  
糞虫は風の機嫌が気にかかり

鳥取市 福永ひかり

目のかすみまだまだだが揺らぎだす  
熱をみるおでこにおでこくつつけて  
死んだ人は居ないと聞いた不眠症  
我慢にも限度だ今日は受けて立つ

鳥取市 福島 庸二

澄んだ空明るい月が笑つてる  
うわさだとしつかり耳をそば立てる

母さんの存在を知る台所

ITのお陰か脳も目を覚ます

倉吉市 木下 智子

夢枕恩師の太い声がする

おしゃべりな雀が話倍にする

平成の雀の宿が探せない

ふるさとに米寿が二人留守まもる

倉吉市 西脇 日出子

古里に帰るつもりが墓地を買う

努力した子の神頼みおかげさま

人間をものさし計る悪い癖

見過したチャンス悔いても戻らない

倉吉市 牧田 みち子

お日柄は福寿暦が決めてくれ

吐く息の白さで今朝の温度知る

忘却の彼方に一つ小引出し

残り火に炭をたしつつ日を暮らす

米子市 足立 由美子

盆栽の桜も咲く日待っている

南無阿弥陀仏唱え仏に逢っている

お手本の通りに阿から書いてみる

一枚ずつ冬をはがして春の野へ

鳥取県 西沖 彰雄

どん底の暮し浮上の楽しみが  
心では泣いて笑いで友見舞う

帳尻が合わぬ借方増える老い

催促は無いが親切返さねば

鳥取県 蔵本 悦子

荒れる世を柔軟剤につけてやる

四十肩一人前の女です

しつかりと右手の愚痴を聞いてやる

浮気者少し焦げめを付けました

鳥取県 竹森 富久江

親ばなれ下手な果実の肺呼吸

花を愛で母にゆとりの刻があり

機嫌いい花芽と遊ぶ風になり

潤滑油たつぷり溜めた温い家

鳥取県 下田 茂登子

裏声も時どき出している仏

脳天にときどき空気入れ替える

空っ風吹かせてみても独り者

甲斐性はないのに上をみて歩く

松江市 小川 注湖

凍る道妻の注意を聞いて出る

気ままにも迷惑掛けぬ掟あり

窓開けて新世紀風呼んでみる

しじみ汁やはり宍道湖自慢する

松江市 松浦 登志子

居眠りをついしてしまふ母の横  
路の憂苦さを抱いて春を待つ  
太陽のニオイ独占ババのシャツ  
へそのゴマ大海知らずひなたぼこ

松江市 福岡 芳枝

自分にも耐えて笑って農の嫁  
父の忌に父の身ぶりを皆で真似  
体調を崩さぬように口つむぐ  
顔の皺一つ一つに物語

松江市 山根 邦代

嬉しさを隠しきれずに電話する  
新世紀三寒四温気にかかる  
時々田舎のパワー受けに行く  
腰曲げたつもりはないが影法師

出雲市 川島 和歌子

老いの松貫禄見せて吠えている  
一日を追われて暮れる仕舞風呂  
お似合いとおだてに乗って買った服  
ぬくもりを屋台の椅子に貰う夜

安来市 原 煩惱児

精いっぱい喝采贈る遅い春  
広い海空も安心など出来ぬ  
ルネッサンスから今に伝わる免罪符  
いいことがあって蕎麦打つ父達者

島根県 多々納 テル子

人生の起承転結濁すまい  
枯草の下から春が鼓動する  
老いに鞭ラストステージ演じてる  
ガラス拭く一枚ごとに春を入れ

島根県 毛利 幸

風邪などに負けてはおれぬと叱咤する  
もう少し見たい夢でもすぐ忘れ  
みかん箱机代りの過去がある  
そろそろと走る列車の風物詩

島根県 持田 多輝子

雑草の強さが欲しい肝移植  
歳月は時々ドラマ塗り替える  
温もりの心伝える手話の指  
化粧などいらぬ素顔の健康美

倉敷市 撰 喜子

女から母にもどって朝厨  
ストレスをためて楽しい役をする  
ママの口開くと小言あふれだす  
口あけて待つ子いるから元気です

倉敷市 家守 政子

少々のことで動かぬ喜寿の尻  
頑固さを捨てて気楽な外野席  
連休を田が呼び戻す過疎の村  
こだわりを捨てて一世の前屈み

海無言霧笛が耳を離れない

弟の色で無念の霧が湧く

弟よ瀬戸大橋が見えるじやろ

あまりにも五月の海は蒼すぎる

竹原市 正畑半覚

広島県 福島万年

ものつくり大学がまず金つくり

道楽が未だ私になり切れぬ

反対党肚の底から吠えてみよ

魚下げて禁酒破れる友が来る

宇部市 高山清子

ガン黒が素顔になつて恋をする

天下り凶太く生きる渡り鳥

才女にも奥に秘めてる嫉妬心

行間の謎ときははずむ恋の春

愛媛県 黒田茂代

春爛漫多情多恨を許されよ

思案橋渡れなかつた悔いがある

溜め息の数だけ心重くなる

首振ってみても面影振り切れぬ

愛媛県 花岡順子

ウグイスの悲鳴弥生の雪の中

人間にだつてあるだろ狂い咲き

春そこに脳細胞が目覚めだす

冒険をしようもうすぐ春だから

誰彼の容赦はいらぬ自由席

行きずりの人に押されて情貰う

花びらに嘘かまことか触れてみる

真ん中にでんと居すわる女王蜂

愛媛県 宮本末子

愛媛県 山之内 八重美

少年の描く未来にないいじめ

旗色の良い方につく風来坊

耳よりな話ストレス癒えてくる

袖の下 昔も今も変わらない

愛媛県 安野 案山子

一浪を優しく撫でる初夏の風

老妻の牽制球に釣り出され

白鷺の足を濡らして水温む

黒雲を払って覗く朧月

南国市 小原圭二

特売のリングはるかな旅の果て

皿鉢盛る水羊羹は春の色

詰め将棋覗きこまれるラッシュユドキ

縄のれんちよいと覗いた爪楊枝

今治市 野村 清美

雨ごとに春の足音近くなる

新聞の記事にコーヒー冷めてくる

ローンとは言わず勝気が見栄を張る

親心鬼と仏に使い分け

青森県 福士トキ

冬の駅立ち食いそばに吸い込まれ  
カレンダーもう走つてます雛の月  
老眼鏡にルーベも出番辞書を引く

静岡市 増田扶美

三代の雑語り合う旨い酒

開発が静かな村をかき回す

開発にホタルも鮎も逃げていく

横浜市 長島 亜希子

冬晴れへ富士を期待の雨戸開け

長くなりそうな話へ用が出来

Eメール最後を締める風邪ひくな

横浜市 豊田羊子

靴の泥赤じゅうたんに置いたまま

船底で詫びを空しく聴く生徒

好きさらい問わず軍歌に涙する

横浜市 福田由美子

食べ残しマナー違反という世代

ブランドの名がおいしさを倍にする

同窓会みぬかれてる厚化粧

横浜市 三村 八重子

春野菜に五臓六腑が浄められ

春の色少し無理して若く着る

花束が子離れ論す披露宴

誘惑と闘う弱い自制心

しゃべり過ぎ話相手が居てくれて

老夫婦には同じ風新世紀

横浜市 石原三郎

川崎市 塩沢ひで

胃カメラに小さい胆玉見透かされ

南無阿弥陀仏ストレス軽くしてもらう

釘一本抜けて春風騒がしい

川崎市 小林久美子

雨降っていますと無沙汰詫びて書く

パソコンの所為で時代に遅れそう

我家にも煙突を持つ粗大ゴミ

川口市 原沢かね子

オフィスで顔に似合わぬ化粧する

足萎えて口先ばかり強くなり

月謝と言う重みに耐える手の疼き

日高市 根岸方子

見栄を捨て若葉マークは無事故です

車よりまだ自転車が性に合い

パソコンもいいが自筆はなおうれし

八王子市 井上京一郎

ケイタイで乗りケイタイで降りるバス

国会のテレビの裏は食べ歩き

この国で見たいと思う地平線

京都市 清水英旺

花粉症 相あわれんで鼻をかむ

寒戻り 春告鳥は声もなし

エレベーターふと奈落かと怖気立つ

寝屋川市 岡本 勲

考古学みてきたように嘘を説き

妻のいう無理はだまって聞いておく

子育ての卒業妻に感謝状

枚方市 大昇隆 広

宅配便 母の思いと里の風

間違いも有りますすわなと離婚劇

やり直しきかぬ定めが重過ぎる

枚方市 小川良吉

真実が書けず自分史頓挫する

議員さん秘書が秘書がと隠れんぼ

摘草やストレス消える土手の春

高槻市 大崎侑子

政官に追隨 司法お前もか

非常口先ず確かめる宿の夜

親と子の心配の種噛み合わせ

高槻市 西谷 治三郎

歩道橋役に立つてるりハビリに

国のため尽くした人がホームレス

ゴミ捨てに行ける元気がありがたい

高槻市 乙倉武史

春風に押され口笛ベダル踏む

春麗ら財布に穴があいている

お陰様感謝忘れていませんか

高槻市 執行 稲子

野心家の胸三寸に治まらず

極めつけなくてためらう老いの画布

衣食住足りて幸せ喜寿の坂

吹田市 後藤 志津香

シンポジウム地球あるから歩くんだ

子の悲鳴鴨居に頭ぶつつける

痛み止め飲んで胃薬また飲んで

摂津市 望月遊美

ザル法へ行革掛声ばかりの党

有事有事と懲りもせず煽り立て

九条を高く掲げぬ野心国

大阪市 小泉 ひさ乃

雑草も小さな花つけ自負をもつ

苦の種を考えながら米を研ぐ

ゴム伸び切つて元に戻らぬ長い春

大阪市 中井 正秀

年金へ優待パスは有難い

七人の敵に会わずに今日も無事

きっかけは犬が取り持つ腐れ縁

大阪市 星野 さらり

冬母春の顔しているクイーン  
正直に暮らしストレス溜めている  
開けたはる閉店セールすんだのに

大阪市 三浦 千津子

背をのばし歩幅伸ばして春の道  
点眼の一滴二滴も春めいて  
控えめな文面の中にある熱気

大阪市 伊藤 博仁

色メガネ通せば黒も色がつく  
喉越せば酒もビールもみな同じ  
見ておこう終着駅の車止め

大阪市 内海 綾乃

国会は子供みたいにすぐごねる  
おおきにと心やすらぐ礼言葉  
期待してクイズ当れよ神頼み

大阪市 尾崎 黄紅

猫の手も借りたい頃の金時計  
いまはもう消えた港の恋ことば  
あっち向いてもこっち向いてもほいの役

大阪市 平井 露芳

大阪にも出来たアメリカ映画村  
降圧剤効いたが治らぬ脳のポケ  
日本地図塗りつぶす程黄砂降り

大阪市 中川 千都子

留守電に早く帰れと怒鳴られる  
薦めた本感想もなく返される  
その件に触れず季節の話する

大阪市 津守 なぎさ

待ち遠し戻り寒波の花紀行  
心が次第で病飛んでゆく  
キラキラと麦の穂ゆれるあげ雲雀

大阪市 中澤 伽羅

口重い人に一言誉められる  
鬼笑う話だんだん煮え詰まる  
あくのある方がましたな無味無臭

大阪市 岩崎 公誠

播鉢にゴマ播り残し孫帰る  
スキヤンダル ネットに写真誌売れている  
愚痴の球カーブで狙う嫁の口

堺市 荻野 像山

人の心蟹は読んでる横に這う  
止めた酒たらふく飲んだうまい夢  
オンザロック仏さんには似合わない

泉佐野市 大工 静子

養父の名語り無心を言いに来る  
九十歳貰いし座布団座れない  
友は逝き賀状も来ない新世紀

岸和田市 亀井皎月  
榎山の道は迷路にして置こう  
過去を捨て明日へ期待の果報待つ  
お守りは利いたことなし期待感

藤井寺市 吉田喜代子  
一人鍋美味いが何か物足らぬ  
株買えば笑うかのように下がる株  
嵐にもケセラセラまた明日がある

羽曳野市 永田章司  
IT化過去の研鑽あざ笑う  
日溜まりの窓辺は母の指定席  
この時節うまい話にや眉に唾

大阪狭山市 天野梓  
懸命に神様を呼ぶ鈴鳴らし  
一年生素直な顔が並んでる  
やさしさのその一言に心揺れ

河内長野市 杉谷カズエ  
しみじみとお顔拝見ひな祭り  
もちの実を食べつくすべく十数羽  
こぼれ種見捨てないでとサクラ草

八尾市 與田明  
老いてなお生きる欲あり葉漬け  
強情な膝サビついて曲がらない  
歳取れば大きな望み消えて行き

八尾市 中島春江  
マフラーの派手目まだまだ似合います  
交番の前の自転車よく取られ  
幾たびも店じまいとや四月馬鹿

八尾市 鷲見章  
テーブルに菊の造花の美しく  
水仙を活けて一人のカップ麺  
正月のカレンダーそのまま忘れられ

八尾市 平川幸枝  
抗老期可能な辞書が見あたらぬ  
ニアミスの話で土産隅に置き  
子へ孝行上手に死んでやることも

八尾市 高橋明子  
大阪城右に左に川下り  
交通の激しき通路今日も暮れ  
あちこちを痛み堪えて生きて行く

大東市 井上すみれ  
自己暗示かけて私の正念場  
ころがつて照れてはります笑い顔  
あちこちと友をつくりに出かけます

大阪府 前田忠子  
童謡の曲が流れて今日も五時  
故郷の名所手入れの行き届き  
秀吉の頃も醍醐の花おなじ

八尾市 前田忠子  
童謡の曲が流れて今日も五時  
故郷の名所手入れの行き届き  
秀吉の頃も醍醐の花おなじ

大阪府 小栢 こずえ

川西市 井本 清山

土あつて土にいやされ土に生き  
梅香りまわり道して会いに来る  
かがやきも次第に失せて燻し銀

親子でも金は他人と筋通す  
旅先の土産が早く家につき  
悪口を言つて未練を切り捨てる

大阪府 東 文江

姫路市 服部 一典

男の子生まれましたとコイのほり  
木々の芽が日差し求めてふくれゆく  
温泉で命洗濯して帰る

新婚へカーテン引けと窓の月  
年金が夫大慈と告げている  
あかぎれへ妻が居ればと茶碗拭く

大阪府 藤井 郁代

篠山市 倉垣 恵美

杉花粉嫌われる程元気良く  
高速の渋滞和む藤の花  
めぐり来る桜満開父偲ぶ

飾ること忘れた母の光りもの  
火遊びのうちに消えるを待つとする  
満月のようなきれいな恋でした

奈良市 田中 賢治

篠山市 谷田 多美子

恋心 嘘も誠もデジタル化  
初恋を孫に聞かれて敷衍む  
ランドセル足並み揃え手をつなぎ

出会いあり別れも越えて新世紀  
上向いて歩こう歌う車椅子  
桜餅一個最後にダイエツト

尼崎市 尾宮 弘治

篠山市 円増 純子

車椅子にお辞儀が可愛いランドセル  
閉店のチラシひらひらたこ焼き屋  
風邪ひいてまんねん実はこの財布

背伸びもうしないと決めた老い迎え  
捨て難い老人力という元氣  
相談の結果とならば従いて行く

宝塚市 飯西 ミサヲ

兵庫県 安達 厚

バーゲンで来年の服買う八十路  
幸せの芽に水をやり春を待つ  
みんな皆泣く子笑う子私の子

降ったのか湧いてきたのか海の水  
なつてみて若いと思う古希の春  
うるさいが妻はわが家の福の神

兵庫 徳平 毬子

お元氣ね一声あつて歩が弾む  
ゲームから本氣になつて怪我をする

陽光に五臓六腑が躍り出す

兵庫 黒崎 美紗子

春告げる草丈低い寒アヤメ

童謡の過ぎし日偲ぶピアノ会

遠くから口コミ効いて風呂が混み

兵庫 広瀬 房江

糸電話伝えて欲しい事がある

同病で腹の芯まで打ち解ける

許されない線母として妻として

兵庫 岩本 美緒子

自分史の替わりスケッチ帳がある

失敗へほんわか笑う君が好き

お陰さま風邪の神にも逢わず春

三重 尾崎 勤

輝きの少し手前にある未熟

注目をさせる小さなシミがある

しゃべらないことで利口に見せている

和歌山 前岡 健三郎

ぎんさんの計報國中悲します

宇宙塵ミール落下へ世界の目

春の音緋寒桜の便り聞く

和歌山 芝 あつむ

諍いはよそう仏間の灯がゆれる

秒針が横目で短針みて駈ける

春風がつれてエンゼル初曾孫

和歌山 根田 美子

あら不思議やじろべえにも好き嫌い

欠点を長所に変えるバイタリティー

晩酌で楽しく今日を締め括る

和歌山 村中 悦男

真実を知っているからだまつてる

だんだんと道せまくなり思案する

夢を見る中味を妻に話せない

岡山 清水 金太郎

合格でほんとの春がおとずれた

地球上人間だけが武器を持ち

病院で慰め合つてる友であり

岡山 大森 純子

ものつくり大学という罪つくり

正論も本音もお茶と胃の中へ

菜の花や黄色い花は春の使者

岡山 白岩 たづ子

主婦の椅子少し残して老いの道

万歩計風に押されて急ぎ足

はや七十まだ七十と言うくらし

府中市 岩本雅代

新世紀紅も濃い目でシヨッピンク  
縁がないITとくじあきらめた  
不況風ハローワークに吹き溜まり

松江市 三島 裕 丘

鈍行は老いた二人を和ませる  
溢れる湯月と一緒に露天風呂  
幸福に見えてひとつは悩みもつ

益田市 岡田 たけを

死ぬまでは医者と薬の世話になる  
元氣だと足腰摩りする電話  
味方にすれば心強いなお嫁さん

出雲市 加藤 スズコ

音もなく降る名残雪春近い  
一行のメモが絆を温める  
満ち足りて心空しく世を嘆く

出雲市 梅 ミツエ

石蹴りやお手玉の夢なつかしい  
絵手紙を楽しく描いて時過ごす  
子を想うあの星見てる母さんも

鳥根県 福岡 博 利

ほっとかれ大事にされて白寿なり  
明日がある鋏を持つ手に陽が当り  
金の成る大木のつもりを虫が喰い

鳥根県 松本 聖子

昔むかし父の肩車なつかしい  
身に余る迷いを亡父に問うてみる  
独り居に子供の帰省そわそわす

鳥取市 宮脇 道子

他人事口も出さずに楽道家  
生涯に一振りの塩ほしかつた  
中流の暮らして覗く小さい穴

鳥取市 谷岡 清子

桃の花ほんのり部屋を包み込んで  
猫柳春だ春だと背伸びする  
良く笑うその日暮らしが福を待つ

鳥取市 山口 千代子

五臓六腑に感謝しながら旅をする  
旅に出る一寸おしゃれに派手な服  
私だけ楽しい旅を亡夫に託び

鳥取市 横田 春名

ガラクタと褪せた思い出共に捨て  
顔の皺増えて心の皺伸ばす  
差し出した右手に熱い血が通う

鳥取市 田中 瞳子

幸せな時には跳べた水溜まり  
食べすぎにお金を掛けてジム通い  
登りよりきつい下りに手を貸そう

好き嫌い無くて笑顔が膳囲む  
一粒の薬に命預けとく  
長電話用事ないのによく続く

鳥取市 河田 のり代

寒風が吊した蝶踊らせる

鳥取市 西尾 敬之介

野地蔵の前垂れ今日は模様入り  
人の目が気になりだしてゴミを焼く

米子市 小塩 智加恵

通販がまだ信じれず店に行く

遠い耳笑顔がいつもこちら向く

息子より娘の婚と気が合つて

鳥取県 平井 栄 翁

贈られて其の気になったイヤリング

堪忍の袋で飼つた癩の虫

楽しんだ一日終り紅を拭く

鳥取県 橋谷 静 江

困つたら先祖へ届く香をたく

出席の返事をだした後の風邪

向かい風気張らず行こう老いの坂

鳥取県 山下 節 子

学歴に恥じぬ自信を持てますか

カスミ草添えて主役を引き立てる

正論を吐いてリコールされるとは

小豆島 合掌ずくめ歩く旅

鳥取県 岡嶋 金子

春雪の下から生れすべて呱呱  
この雪も陽春一変 人を替え

鳥取県 河本 晴 子

胃カメラを飲む気になつて風邪をひき

月初めよりも詰まつた予定表

文部省唱歌通りの箱根山

宇部市 中田 忠 夫

お茶ですよ妻が茶の間で声をかけ

雑魚は雑魚なりに贅沢などしない

開けないで言われて見たくなる心理

宇部市 藤本 一 規

目を覆う現実ばかり新世紀

人魚姫陸での時間長くなる

後ろ指差されず生きた半世紀

香川県 松村 輝 夫

瑞穂の国空は青いが曇りがち

うっとしい梅雨に稲作恵まれる

阿蘇高原牛を放して青く塗る

香川県 伊勢 八重子

寝転んだれんげ畑の青い空

子宝を信じて老いて過疎に住む

チヨコレート心の扉ノックする

# 秀句鑑賞

— 4月号から

古久保 和子

花活ける明日はもつと華やかに

山宮 愛恵

何かいい事があると、花まで笑っているように見えるもの、明日のためにどんな花を活けるのでしょうか。

春ですよ和菓子のお店に誘われる

伊藤 藤ふみ

ケーキも大好き、でも和菓子はもつと好き。シヨーケースの中から季節感いっぱいの和菓子に微笑まれたら、もつたため。

義理チョコに真面目な返事かえされる

巖田 かず枝

どつしまししょう。そんな積もりは無かったのに、渡す相手が律義過ぎました。

蛇行して川は行く末考える

藤田 芳郎

何事も結論を急ぐと良くないのでは、奇り道、道草大歓迎の楽しい人生を。

自分史のこの辺ちよつと早速り

福島 万年

栄光も挫折もいずれ風になる

杉山 精子

一喜一憂した過去が、懐かしくも可笑しくも思えるようになれば、本当の人生の達人ではないでしょうか。

マスクした人に一礼されたけど

中村 忠敬

はて、何方やら。制服から私服になってお会いした時などにも、こんな場面が良くありました。風邪でしょうか、それとも花粉症。

毒舌が髭剃つてから出てこない

藤田 一平

普段と違う格好をすると、気恥ずかしいほどに振る舞いや話し方まで変わることがあります。大切なトレードマークの髭、また生やしてペースを取り戻して下さい。

ありつたけの智恵傾けて生きています

乙倉 武史

そこそこに手抜きが出来る人である

沢江 和代

スピードアップされた時代に流されず、取り残されもせず、生きる智恵こそ大切。上手に手抜きして、ゆとりある暮らしを楽しみます。

トンネルに入ると脈が早くなる

録 沢 風花

突然闇に入った時の気持がよく判ります。暗転の次の芝居に期待を持ちましょう。

病院を無事に出られて乾杯だ

不破 仁 緑

ありとあらゆる情報が、毎日私達の耳を汚します。自分の身は自分で護らねばならないと思うと悲しくなります。退院の乾杯は、先ずお茶かジュースでして下さい。

いいことの予感に弾むオクターブ

原 煩悩児

正直な方ですね。隠しても自然と頬が緩んでしまい、声のトーンまで変わる。そんな方のお顔をみているだけで、こちらも嬉しくなります。春は、いい知らせがたとえ届きそうだから。

嬉しくてランドセルまで笑ってる

清原 悦子

ピカピカの一年生、ピカピカのランドセル。目に見えるようです。きっと真っ直ぐな芽が伸びることでしょう。

勉強と称し老舗のフルコース

サト子

デジタルの体重計はシビアです

登志子

握力は妻に任せるビンの蓋

勝 巳

やっぱり、覗かれていたらしいです。

# 愛染帖

## 波多野五楽庵選

和歌山市 福井 桂香

蛤の砂を吐かせて春の鬱  
干涸びた心へ届く桜貝

鳥取県 小西 雄々

生年月日誰にも告げず汽車が出る  
火の罪たたくとすでに春の音  
病名は無いがときどき肩が凝る

今治市 月原 宵明

相槌という手でこの場逃げておく  
知らぬ間に足が動いている春だ

弘前市 高瀬 霜石

いい男でつかいへそを持つている  
人生がマラソンならば徒歩で行く

和歌山市 木本 朱夏

赤ちゃんの薄目がひらき桜咲く  
お子様ランチの旗のまわりの聖家族

京都市 都倉 求芽

あがり湯のようなさよならして別れ  
三面鏡に自分以外は棲まわせぬ

鳥取県 西沖 彰雄

自分史の裏に見えない隠し疵

あくまでも8に拘る雪達磨

泉佐野市 稲葉 洋

人恋し恋しと彼岸花の赤  
雲に乗るような最後とまいらぬか

富田林市 藤田 泰子

欲も無く自信も無くて隅が好き  
ルージユ引くアドレナリンが湧いてくる

堺市 志田 千代

新幹線富士はお留守でございます  
留守番をいとわぬ子にとなりにけり

和歌山市 川上 大輪

まだ闇を這う分身が戻らない  
狼を飼おうか時間持て余す

弘前市 一戸 ツネ

いちにちが生まれて消えてありがとう  
いろは坂嬉しい過去のひとつです

弘前市 高橋 岳水

楚々と咲く虚飾を知らぬ野辺の花  
まだ疼く火種が胸を離れない

弘前市 相馬 銀波

風を待ち風に向って行くは蝶  
目も口も黄砂に弱いので留守居

弘前市 斉藤 焔

夢売りが帽子に摘んだ冬苺  
ちちを恋うふるさとを恋う松籟よ

奈良県 渡辺 富子

円周率三でゆとりができますか  
どの雲も母住む里に流れつく

岡山県 山本 玉恵

平和主義通して男まだひとり

嘘ひとつ混ぜると光って来る童話

枚方市 海老池 洋

ストローの中で思案をする話題  
隅におけぬ人だと眼鏡拭いてみる

西宮市 牧淵富喜子

動かない本の扉に溜まる冬  
相性が合ってしゃべり度くなるノート

羽曳野市 吉川 寿美

塩壺に哲学がある母の辞書  
貝割菜土の温みを知らぬまま

横滨市 保田 絹子

わだつみの亡兄を黄砂が連れてくる  
欲得も終りは灰のひとつ握り

岸和田市 宮野みつ江

私でよければどうぞ風呂敷に  
早送りしたら明日が見えますか

海田市 三宅 保州

あなたなら出来るだなんて言わないで  
鶏の声聞きにトンネル又潜る

八尾市 村上ミツ子

唐津市 田口 虹汀

横滨市 清水 潮華

西宮市 奥田みつ子

心奪うあれは幻だったのか  
乾いた唇だった春を忘れていた

富田林市 池 森子

竹原市 正畑 半覚

松原市 小池しげお  
黄信号の前で仲間にして貰う

寝屋川市 籠島 恵子  
試されているんだ白い地図ばかり

大和高田市 鍛原 千里  
戯画一つおんなは女あるがまま

八尾市(飯村)上 剛治  
予定にはなかった雨が降りだした

奈良市 米田 恭昌  
我が家にも十七歳の不発弾

和歌山市 西山 幸  
後悔の数だけ残るかすり傷

尼崎市 春城武庫坊  
風の日には風が押されたまま歩く

出雲市 園山多賀子  
振り向けば風が無闇に背なを押す

米子市 木村富美子  
目をとじて夢の続きを呼んでみる

堺市 和田つづや  
黄砂深々ためらい疵の上に降る

愛媛県 中居 善信  
溺れやすい女で情に流される

鳥取県 土橋 螢  
爪を切る美学はひとの為ならず

大和郡山市 坊農 柳弘  
四面楚歌ときどき神の教ええよう

米子市 小塩智加恵  
あと幾つ旅の約束交すやら

和歌山市 楠見 章子  
マンモスの骨はわたしのよりきれい

堺市 荻野 象山  
三つ指で送り出されてそれつきり

八尾市 吉村 一風  
何か言うてる捨てるところか古い家具

吹田市 石原 靖巳  
ときどきは狂ってみたい駅時計

鳥取県 石谷美恵子  
ビタミンの何が不足かよく怒る

唐津市 仁部 四郎  
流れ寄る噂私も泡にされ

和歌山市 福本 英子  
おじぎ草誰も喧嘩をしたがらぬ

美祿市 安平次弘道  
罪深い女に戻る冬帽子

西宮市 西口いわゑ  
古時計語り出したら長くなる

箕面市 椎江 清芳  
最果ての港で終る私小説

米子市 鷺見 正子  
表面は私を立てている金庫

尼崎市 春城 年代  
春遠し心交りのぼたん雪

和歌山県 中後 清史  
忘却という神からの贈り物

藤井寺市 高田美代子  
裏切らぬ花にたつぷり水をやる

倉吉市 牧野 芳光  
正論を通す無口になっていく

弘前市 櫻庭 順風  
投函の余韻に浸り酔いしれる

茨木市 藤井 正雄  
寄せ鍋にくくの自慢が煮え詰まる

高知県 桑名 孝雄  
哀愁といえぬ男の泣き上戸

弘前市 福士 慕情  
灯明へ慣れた手付きで火を灯す

和歌山市 上地登美代  
シナリオのない人生というドラマ

鳥取市 岸本 孝子  
自分史のところどころに呻き声

米子市 林 瑞枝  
韻律や迷い子も笑う輪になった

和歌山市 青枝 鉄治  
雑魚なりの信念持つて群にいる

横浜市 山下 省子  
冬眠の反逆心がお目覚めだ

高槻市 江原 秀夫  
胸の火がじわつと消えて人嫌い

京都市 丹後屋 肇  
上意下達拳が咽喉に引つかかる

鳥取市 武田 帆雀  
水門を開ける開けるな猫柳

札幌市 三浦 強一  
一幕目三三九度という喜劇

唐津市 井上 勝規  
朽ちるまで樹芯の傷は見せられぬ

松原市 玉置 重人  
脳裏から消えぬ八月十五日

黒石市 千葉 風樹  
ロポットに無い銭湯の丸い月

黒石市 相馬 一花

弘前市 宮崎ヒサ子

ジョーカーを使えぬまに妹病む  
東大阪市 安水 春

身の程を知って用心する歩幅  
鳥取市 岸本 宏章

おしどりの夫婦も違う夢を見る  
今治市 越智 一水

風が目に見えるところまでひとり旅  
香芝市 大内 朝子

めでたしで終る余生の紙芝居  
出雲市 岡 あきら

真直ぐに歩けば地図が破れそう  
吹田市 山本希久子

錯覚が私を少し疲れさす  
砂川市 大橋 政良

五月病まぎらずジャズを聞いている  
倉吉市 野口 節子

ジェラシーの重みも入るのし袋  
東京都 播本 充子

陽が昇る友はICUにいる  
鳥取市 徳田ひろこ

耳底に雑言ばかり撒ばかり  
倉吉市 松本よしえ

桃咲いて明日は娘の手を放す  
豊中市 田中 正坊

後戻りしない選んだ道だから  
鳥取市 西尾敬之介

大根の尻尾が浮ぶ朝の膳

大阪市 前 たもつ

強欲は蟹の甲羅を吸るなり  
和歌山市 古久保和子

のひらの地図に火の跡水の跡  
和歌山市 山口三千子

知りすぎて内気にさせるバラのトゲ  
尼崎市 長浜 澄子

ゆとりなく生きて私を見失う  
寝屋川市 平松かすみ

証書みな袋戸棚へ入れたまま  
西宮市 井上 松煙

大勢に相談をして迷うだけ  
堺市 桑原 道夫

うす汚れうす汚れても白うさぎ  
寝屋川市 江口 度

早掘りのたけの子下げて京の姉  
吹田市 早川 棲世

子を抱いて女は自浄力を持つ  
大阪市 三浦千津子

水門へせめぎあつて春の水  
和歌山市 松尾 和香

満点も欠点もあり世間なみ  
高槻市 乙倉 武史

日溜まりへ寄り合い寒い世の話  
四条畷市 吉岡 修

四月からこの子料金だけ大人  
熊本市 高野 宵草

楽しさでバンクしそうな電話線  
富田林市 片岡智恵子

請求書もらってからの不整脈

唐津市 樋口 輝夫

亡父によく似てきたと言う散髪屋  
和歌山市 吉村さち子

幾たびかかぼちやの馬車とすれ違う  
高槻市 左右田泰雄

ハプニングだとは思えぬ螢の死  
香川県 木村あきら

老兵の冥軍歌で幕となる  
横浜市 三村八重子

銀座では銀座の顔で通り抜け  
鳥取県 土橋はるお

銀行へたまには入る真似をする  
寝屋川市 太田とし子

大びらに蝶がついで来てくれた  
箕面市 出口セツ子

賞味期限切れの娘並んでいる夕餉  
川崎市 和泉あかり

読経聴く解ったような貌をして  
札幌市 三浦 強一

オクターブ声が上がった妻の乱  
広島県 福島 万年

有難う今日もお酒が旨かった  
藤井寺市 中島 志洋

ライバルに同情される腑甲斐なさ  
横浜市 川島 良子

大学ではなにを学んできたのかね  
藤井寺市 太田扶美代

犬にまで嫌われそうな意地つばり  
岡山県 矢内寿恵子

一筋の道で迷いが深くなる

## 精神安定剤

## 出口 セツ子

働くのが嫌いでお金に縁の無い行政書士の夫。背中に火がついてから、やっと腰をあげるといふマイペース。蛍光灯を替えるのを頼んだら、あしかけ三年経って、やっと交換してくれた。昼寝が趣味で、仕事を一杯溜め込んで、あっちこちから催促が来だしてから、「君がパソコンを打ってくれたら助かるのにもっと、仕事をやってくれる事務員さんを雇わないとできない。」と文句を言い、年末年始には仕事を同業者に無料（普通は何割か紹介料をもらう）で何件か回し、私が岐阜や岡山など、遠方の仕事を出しに行く。

主人は仕事上つきあったところによると、韓国の女性が美人でテキパキと働いてくれて、尽くしてくれるので良い。気の向いた時に趣味で仕事をやり、悠悠自適の生活がしたい、という希望を持っている。

客は実に忍耐強い。仕事を依頼されて四、五日で催促されると「私はお宅の専属じゃないから、急ぐんなら他へ行って下さい」と断わってしまふ。それでも残って下さっているお客は、一カ月位までは催促されない。主人の性格をわかって下さっている方々である。

その代わり我家は実によろず相談的などころがある。不況が長びいて、銀行が早く資金回収をしようと、契約条件と異なる履行要求してきた時に、社長の依頼を受け銀行に内容証明を出し、契約通りの条項を守らせた。不況で会社が潰れて困っているお客に、無料で自己破産の方法を教えるも上げる。

阪神大震災の時は、私が測量士補の資格を持つているので、境界の確認と家の建築を頼まれ（我家は大工ではないが、仕事上、いろいろな業者の方を知っている）安い建設業者を紹介もした。

妻が夫に内緒で着物や宝石を買うためにサラ金で借金をし、困って夫が相談にみえたりそれぞれの家庭や、人生の悲喜愛憎にまでかわかることもある。私達の職業は守秘義務があるので、依頼者の家族にも内容は漏らさないし、依頼者にとって一番良い方法を、後日問題にならぬよう法的に考える。お金にはならないが、誰かの役に立てることがこの仕事

の良い所だと思っている。

多少、歴史にかかわる仕事もある。第二次大戦中に当時日本人として鉄道省に勤務していた韓国人の一男性が、家族だけを残し長男の本人は最後までサハリンに残り、父と兄弟は韓国へ帰り、母は後日、北朝鮮に帰り、依頼者は日本に残り何十年という一家離散の状態が続いていた。高齢になり、死ぬまでに家族で会いたいという依頼を受け、主人が何度か外務省と交渉し日本で二週間、ロシア、韓国、北朝鮮から集まり、親子兄弟の感激の対面となった。

パンの為だけに仕事をするのではなく、何らかの形で他人や社会の役に立つ仕事ができれば良いと思う。そのため子供達も他人の痛みのわかる子に育ててきたつもりである。

主人と子供の良いところは嘘をつかないことである。例えば、

「今日、○○さん(女性)とお茶を飲んでみてね、今、一生懸命口説いているのよ」などと言う。ストレスに主人は無縁ではないかと思う。私も結婚するまでは神経質な方であったが、何事にも動じずマイペースの夫を見てみると、いろいろなことで悩むのが馬鹿らしくなってくる。主人は私の精神安定剤である。

くよくよはしまい明日も陽が登る セツ子

## 首香のむ

西出 楓 楽 選

幸せな時に買い込むコーヒー豆

春風 帽子が鳥になりたがる

姿見の裏淋しきの捨てどころ

自画像のアクセサリーは無しにする

風を読み深くは椅子にかけられぬ

花たちの主張を五線譜が拾う

重箱の隅で育っている火種

何もせず居ても律義に日が暮れる

どうせなら笑って皺を増やしたい

余生とか言って自分を甘やかす

少々は聞こえてほしい独り言

少しだけ若づくりして春と逢う

息子より長生きしたらどうしよう

春の岬からUFO呼んで見たくなる

がんばれと言った育児を悔いている

種を播くまで輝いていたから

雑音を聞かせ孝行しています

福耳に安住しているイヤリング

老眼鏡 上目遣いが上手くなる

藤井寺市 太田扶美代

松江市 川本 晔

岡山県 山本 玉恵

寝屋川市 平松かすみ

鳥取市 福田 登美

米子市 政岡日枝子

米子市 驚見 正子

美面市 出口セツ子

鳥取市 永原 昌鼓

和歌山県 森下 順子

米子市 白根 ふみ

米子市 足立由美子

横浜市 山本為佐子

鳥取県 吉田孔美子

横浜市 芦田 鈴美

八尾市 村上ミツ子

吹田市 山本希久子

堺市 宮本かりん

富田林市 藤田 泰子

ふと側へ春の光が来て座る  
赤ちゃんの匂い春風あまくなる  
私も街も乾燥注意報言葉やさしく老人からも税をとる  
ほやいてもいやな自分が見えるだけ  
猫やなぎ春の小川の音符だな  
ストレスは解消 新芽伸びてきて  
そっくりな靴音家の前を過ぎ花屋の前素通りできぬいい知らせ  
風向きに合わせて生きる老いの知恵  
着ぶくれて梅のつぼみに笑われる  
全音符のかたちで水仙の蕾  
木蓮の白を合図に立ち上がる  
4Bと遊泳をする小宇宙口に出すまでは花の名覚えてた  
年金で謙虚に生きる知恵学ぶ  
結論を急ぐトランプ繰っている  
五十代ざらりと捨てたわけでない  
ひっそりと存在感のある菜  
IT革命 今浦島になりそうだ官女の日キヤリアウーマンだと思っ  
暫くの地図だ平和な道をよる  
雪のしとねに椿の赤のふたつみつ  
ときめきは振り子の首で騒がしい  
心の穴をつくらう本を図書館で  
衝動という誘惑で切った髪

西宮市 牧淵富喜子

和歌山市 木本 朱夏

羽曳野市 徳山みつこ

八尾市 宮崎シマ子

大阪府 米澤 俣子

寝屋川市 籠島 恵子

和歌山市 桜井 千秀

川崎市 和泉あかり

和歌山市 田中 みね

岡山県 富坂 志重

倉敷市 家守 政子

和歌山市 福井 桂香

和歌山市 古久保和子

西宮市 門谷たず子

和歌山市 福本 英子

和歌山市 吉田比佐子

和歌山市 榎原 公子

愛媛県 黒田 茂代

寝屋川市 森 茜

芦屋市 黒田 能子

堺市 山本 半銭

米子市 木村富美子

尼崎市 春城 年代

生駒市 飛永ふりこ

米子市 澤田 千春

藤井寺市 鴨谷瑠璃美子

繋がれて犬も氣弱に老いてゆく  
たんばが舗装道路を突き破り  
もの忘れいま来た道を引き返す

トンネルを抜けて優しい風になる  
白酒に私を祝うひな祭り

まだ若い若いと呪文かけている  
ひと言の弁解もなく椿落つ

よろこびも哀しみも頬なでてゆく  
紅絹裂いて淋しきものをつきはなす

少子化へ力を合わす矢が足りぬ  
子育てに教科書なんかありません

まんさくの花したたかに春を呼ぶ  
チューリップが並び一年生が行く

氣の利いた台詞も書けぬ間に弥生  
芽吹くもの皆芽吹かせて春の中

遅刻して最前列の席につく  
魂が抜けてころりと寒椿

安全な薬ですから効きません  
自動機で借りたローンの後遺症

輪を乱す雀味方の中に居る  
灰汁ぬきをすませて丸く生きている

小心が無理なバリアー張って生き  
振り向かず武者ぶるいして菓立ちゆく

バス停のお地藏さんは話好き  
踏ん張ってみても女の力こぶ

親友が軌道修正してくれる

寝屋川市 岸野あやめ

横浜市 山梨 雅子

和歌山市 西山 幸

富田林市 中井 アキ

寝屋川市 坂上 高栄

大和高田市 鍛原 千里

鳥取県 石谷美恵子

鳥取県 西口いわゑ

西宮市 さえきやえ

鳥取県 武本 碧

和歌山市 植村 喜代

河内長野市 園山多賀子

出雲市 奥田みつ子

西宮市 長浜 澄子

尼崎市 高田美代子

藤井寺市 川島 良子

横浜市 山根めぐみ

和歌山市 妹尾 安子

藤沢市 清水 潮華

島根県 伊藤 寿美

横浜市 近藤 道子

横浜市 大内 朝子

香芝市 三村八重子

横浜市 内田美也子

尼崎市 吉川 寿美

羽曳野市 神夏磯典子

大阪市

目立たないように猫背になった妻

七色の句が生れるか一人旅

桃の節句 母と娘の夢飾る

ライバルがやたら涙腺刺しに来る

夕焼の赤を信じていいですか

友だちと語りつくした闇の中

コーヒーの香りに起きてくる気配

ありがとー 一日一度いつて寝る

わだかまりすつきりさせたく眼鏡ふく

四季知らぬ花を咲かせている文化

指定席ちよつと気取つてみたくなる

結局はまとめて捨てるまとも買い

春彼岸 煩惱を背に遍路杖

和歌山市 杉山 精子

交野市 山川日出子

和歌山市 上地登美代

倉吉市 野口 節子

今治市 塩路よしみ

米子市 青戸 田鶴

香川県 池内かおり

鳥取市 岸本 孝子

鳥取市 松尾柳右子

大阪市 矢内寿恵子

岡山県 録沢 風花

鳥取市 太田とし子

寝屋川市 榎谷 郁子

伊丹市

扶美代さんの句― 幸せな時を大切に思う気持で、買い込

むものがコーヒー豆であるのがうれしい。このコーヒーを淹れ

るたびに、その時の幸せが体中に満ちてくるであろう。小さな

ことに幸せを見つけれられる人柄に好感が持てる。畔さんの句―

一編の童話を読んでいるような句である。普段から愛用してい

る帽子まで浮かれ出す春嵐。春を目前にした弾む気持が、比喩

のうまさからひしひしと伝わってくる。玉恵さんの句― 女性な

らではの着想をいただいた。姿見のこちら側ではよいところば

かり見、淋しさつらさは見えないうところに捨てて。つまり見な

いでおくという。姿見の裏は、人生を明るく前向きに生き

てゆくために必要不可欠な場所であろう。かすみさんの句― 作

者はこれまでの自分自身を、納得の出来る生き方をしてきた人

であることがわかる。何ひとつ飾らなくても、生のままの自分



集 路

うかうかとしてもせんでも日は暮れる 靖巳  
 うかうかと柚子のげつぶを吐ている 螢  
 幸せに酔うてうかうか落し穴 ミツ子  
 うかうかと值札外さずアレセント 志洋  
 うかうかが無いと世の中棘だらけ ただし  
 うかうかと隣褒めれば妻が妬く 笑子  
 うかうかと相槌うって乾く喉 勝視  
 肝心なところ欠伸で聞き漏らし さち子  
 有頂天の口で募穴を掘っている 徳千代  
 幸福行の馬車にうかうか乗りおくれ 脇  
 うかうかしての間も回っている地球 大輪  
 昨日とは違うかうか出来ぬ目だ 可住  
 うかうかと連ドラだけは見て過し 四郎  
 うかうかをアザーで叱る改札機 正雄  
 登頂もゆつくりさせぬ空模様 満秋  
 鍋の底見えちゃう自動引き落とし 霜石  
 うかうかに乗って陽炎だと気づく 朝子  
 人間を忘れうかうか飯こぼす 日枝子  
 食わせ者らしい急いで距離を置く 充子  
 札束を見て即答をしてみまい しげお

二番手がラストスパートかけてきた 碧  
 地 つかうかとしてたら百歳越えそうだ みつこ  
 天 歳時記の中でうかうか流される 門合たず子  
 軸 傷癒えてまたうかうかと踏みはずし

運 ぶ

相馬一花選



俄か雨ワンメーターの客ばかり  
 機密費を彼女に運ぶお役人  
 のし袋妻の指図で運ぶ役  
 義理で来た招待状へ幸運ぶ  
 真夜中に家財を運ぶ羽目になり  
 吹雪く日は四股の二乗で運ぶ足  
 お隣は左遷ひっそり荷を運ぶ  
 九割引き固い財布を運ばせる  
 噂運ぶ赤いくちびる燃えてくる  
 連休を知らない蟻が運ぶ餌  
 軽やかに筆運ばせる祝い事  
 縁談がとんとん拍子に運ばれる  
 春風が運び屋となる杉花粉  
 スキャンダル一萬千里で風運ぶ  
 招かざる黄砂を運ぶ春風  
 北前の船が運んで来たルートツ  
 町内の噂運んでいるすずめ  
 重い足運ぶしかない友の通夜  
 沸ふつと電波が運ぶ恋心  
 寝たきりを運ぶさくらの花の下  
 達筆の穂先躍動するリズム  
 寝たきりへ愛を運んだボランティア

充子 再会へ今ときめきの歩を運ぶ  
 一壺 不景気で空気を運ぶ定期便  
 四郎 喜びと不安を運ぶランドセル  
 花匠 手拍子が五つで止まる子の歩み  
 尚士 梅の香に誘われ母の脚ならし  
 順風 手荷物重さの母の味がある  
 紫晃 人間愛生命運んで来た臓器  
 像山 追憶を臉に運ぶ会者定離  
 ツネ 写経する仏に会える筆運び  
 ただし 東宮に飛來待たれるころのとり  
 無緑 給料を運ぶわたしはモルモット  
 ヒサ子 生きる糧せつせと運ぶ蟻である  
 和枝 孫達が運んでくれる笑い種  
 俊子 風媒花その日の為に化粧する  
 ちかし ツアー客いなごのように来て帰る  
 剛治 順調に運び仮面を外せない  
 兵八郎 天 宅配の荷縄は父の貌になる  
 玉恵 唐 遠慮なく運ばれてくる核のゴミ  
 虻 軸 加藤 権悟

和重 遠野 登美 慕情 銀波 恭昌 雄々 正雄 満秋 強一 風樹 岳水 大輪 日枝子 哲男 善信 霜石 今日子 (清玲子)

# 初歩教室

題一確か

吐田公一  
はた だ 公 一

推敲の仕方の一つに倒置法というのがある。

お分りのことと思うが、上五と下五を置き換えてみたり上五や下五を中七と入れ替えたりする方法である。勿論、できる限り句は五七のリズムを崩さないように言葉を厳選しなければならぬことは言をまたない。例えは  
○朝帰り先ずは抜け道確かめて 志重  
原句も決して駄目というのではないが、ここで倒置法を使ってみると、

▽抜け道を確かめておき朝帰り

次に私からのお願ひ。最近始めて川柳をなさる方が増えてこれらスペースが不足がち。恐縮ですが、同人及び古い方で上手な方のご投句はご遠慮下さるようお願いいたします。

添削句

○携帯で友の安否を確かめる

君江  
携帯を省いてピンと来る語を探すこと。

▽強震へ友の安否を確かめる

○三度目の正直手応えは確か

泰雄

具体性が乏しい。

▽手応えは確か大物だったはず

○確かではないがとさした釘ひとつ (俳洋子)

原句もいいが、仕切り直してみると

▽確かではないがと口止めする話

○確かだと見えるが父も白寿です 昌鼓

確り(確か)と確りとは同原(国語辞典)です

▽確りで見えるが父はもう白寿

○合格の張り出し三度確かめる 栄翁

▽合格の掲示を三度確かめる

○愛確か言わずも分る二人仲 静子

○恋愛も確かめてからすればよい

二句からその意を汲みとつて 静子

▽結婚へ愛確かめているふたり

○頑張れば確かな手応えステツプに 郁代

上五が冗長。

▽ステツプに確かな手応えみた進歩

○確かめる心うつりか君の愛 たえ

同じ内容だが表現の差異

▽あの手紙心変わりか確かめる

○確実に春へ雑草根をひろげ こそえ

雑草を擬人法だと理解しても、原句ではインパクト不足

▽雑草も伸びる確かな新学期

○約束の場所は確かこの苦

敬之介

意味は同じでもリズムが中六で悪い。多分「に」を忘れられたのだからうが。

▽約束の場所は確かにここのはず

○要介護確かか答えるあてずっぽう 像山

下六がおざりな句

▽このままだと確実となる要介護

○5歳児確かな一歩拍手され 喜子

使い古された言葉だが歩き初めの方が

▽歩き初め確かな一歩へ沸く茶の間

○確かめる判りましたよ本当です 三喜夫

何を確かめるのか、何が判つたのか

▽本当か嘘か噂を確かめる

○旅の朝も一度財布確かめる 文江

老いの旅立ちにはよく忘れ物をしがち。その

あたりを詠んでみては

▽フルムーン出がけに財布確かめる

○まだ来るなど確かに聞こえた亡母の声 円女

上六中八でリズムが悪い。せめて中七に。

▽まだ来るなど確かに聞いた亡母の声 更紗

○確かなる春の足音すぐ其処に

▽川柳はできる限り人間を詠むこと

○お水取りの読経確かな春の声

○よしあしをもつれにならぬ印を押す トシエ

表現が抽象的すぎて分りかねる

▽境界の和解へしかと印を押す

○確かめて間違いないと印を押す 欣子

○確かめてと間違いないとはこの場合同義語

▽確かめて実印を押す契約書

○地図広げ古い想いを確かめて 清

上五は冗長。句意を具現化する

▽初恋と歩いたあたり確かめる

○過去を確かめるため旅に出る 舞夢

○確かめた過去は意外と美しい 舞夢

二句をつきまぜてみると

▽美しい過去確かめている旅路

○病院で僕の元気を確かめる 彰雄

○病院より人間ドックの方がより効果的

▽元気を人間ドックで確かめる

○気象報民間予報捨てがたい サト子

○民間予報の意味が分りにくい。句意は異なるが、

▽予報士の解説信じ旅の空

○腕確かよかった医者と惜まれる 圓玲子

原句もいいが、

▽執刀の確かな腕が惜しまれる

○出来たらし確かな記憶ふり返る 政子

何が出来たのか分らない。思い込みの句

▽孫できたらしい確かに悪阻らし

○確かです誰れも招ばれる黄泉の国 あつむ

確かです。きつ。とにすれば。誰もは不要

▽そのうちにきつと招ばれる黄泉の国

○スケジュール手帳確かめ埋めていく ふりこ

このままではストーリーがない。もう少し

想像を詠み込めば。句意は異なるが

▽手帳から賄賂の額の足がつき

○届出の紙一枚に夫と妻 八重子

見付けはいい。ただ、確か〃の題では少々

離れた感。認めるとすれば

▽紙一枚出して夫婦と認められ

○予報では確かに晴であった苦笑 敏子

説明句になつてゐる。

▽確かめたはずの予報が当て外れ

○真夜中に寝息確かめ安堵する 益子

上五は不要。誰の寝息かが大事

▽ふと不安夫の寝息確かめる

○何辺も確かめ最後に裏切られ てる代

説明句に近い

▽念入れて押ししたハンコが裏切られ

○あの傷は確かに覚えありました 綾乃

想像を逞しくしてみると

▽あの傷は確か手配にあつた顔

佳句

外出へ鍵確かめに戻る道

長旅の支度ノートに確かめる

切り札で勝利確かなものにする

確かめてみたいが恐い箱の中

確証を掴み色めく捜査陣

海底に確かに眠るえひめ丸 トキ

確かめず押しした印鑑に泣かされる 美代子

手術前不安つものらす確認書 章司

ハードルを確かめてとぶ老いの靴 悦子

要領の悪さ確かに親ゆすり 洋子

確実に昨日と違う試歩の朝 てるみ

母の味舌がおぼえてゐる確か さらり

スーパリーの目玉レシート確かめる 山雅子

リハビリの一步確かめまた一步 万年

明確な答をしる森総理 栄呼

ドナーの脈確と抱いて生きていく 栄子

終章へ確かな地図を描いておく 賢

備忘録使わぬ母の記憶力 純子

不確かな指切りを待つ寒い駅 美弥子

痴呆でも金の話はまだ確か 純

確かだと任じたはずの金庫番 春江

電卓の答五玉で確かめる 侑子

(川柳らしい句)

二千円札確かめず損をする 謙次

(落着いて!!)

好きだから確かめてみる花のいろ 菜月

(擬人法が生きている)

残高と生命線を確かめる 和香

(見付けがすばらしい。ユーモア性もある)

私の句

差し違えしっかり見てた砂かぶり

# 本社 四月句会

四月七日(土)午後五時半

アウイーナ大阪

あふれるような陽光の下、桜は真つ盛り、  
人出も多かった週末の七日、百四名の出席者  
を迎えて四月句会はにぎやかに開催された。

お話は理事長の板尾岳人氏。句会のはじま  
る前、大阪城西の丸庭園で花見をしながら、  
話の内容を考えてきたという。花の下では

桜なら堺刑務所いまい見頃

好郎

の句が思い出される。そして、

にわたりの何か言いたい足づかい

古川柳

うたた寝の顔へ一冊屋根をふき

〃

添乳して棚に鯛がござりやす

〃

妻に字を聞いて知つてたことがなし 藻介

貧しさもあまりの果ては笑い合い 雉子郎

など、人口に膾炙される句を例にとり、ユー

モア性、穿ち、情景の浮かぶ句、時代を超え

て通用する名句の鑑賞をする30分であつた。

月間賞は西出楓楽さん(大阪市)に輝く。

(司会―遠野) (記名―月子・朝子)

(受付―泰子・かすみ) (清記―義)

## 席題「花」

吉村雅文選

花粉症わたしは春が大嫌い  
乾盃のビールがうまい花の下

風云児 笛生

花いちもんめ介護の妻のやさしい目  
花いっぱい私の庭のカーニバル

恭昌 洋

馥郁と水仙匂う島に住む  
花衣一期一会の通り抜け

柳弘 女

かぐや姫見送っている竹の花  
デイサーピス迎えるバスも花の下

シマ子 度

つつましく主役をたてるかすみ草  
酒好きな花びら猪口へ舞いおりる

重人 庸佑

いつか散る事を知り咲く花の艶  
花見酒人をピエロにしてしまつ

篤子 鐘造

花かえて墓に沢山たのみごと  
満開のエゴを大目に見てほしい

月子 扶美代

退院の目に満開の花眩し  
紅梅のひとつひら君の肩に乗る

金太 洞庵

剪定に身をふるわせる花の芯  
約束の季節を花は裏切らず

一歩 太

墓参り花のお札に蝶の舞  
百花撩乱この世の花にある迷い

清山 房子

棺桶におさまるまではずっと花  
テールの花は秘密を聞いている

しげお 舞夢

みよちゃんか歌ってくれたチューリップ  
盗むほど花に執着出来ぬまま

柱香 寿美子

スイートピーグラスに生けて春を抱く  
雑草のようなハーブに凝っている

和香 伽羅

桃の花風も口づけして通る

洞庵

事故現場花を手向けるほかはなし  
野の花でよし野仏と戯れる

保州 千里

カスミ草きれいに咲いてうとまれる  
来年も逢えるだろううか花吹雪

陸州 保子

影二つ寄り添っている花の下  
スランプのあいだが長い杉花粉

和香 しげお

良心が揺れる日花を買いすぎる  
極楽も地獄も言わぬ花の中

楓楽 弥生

ハミングはあの花言葉とけてから  
許し合う花屋に花のある限り

楓楽 一風

温室で育ち知らない花言葉  
入学の子よ大輪の花となれ

金太 軸

お世辞もつ聞き飽きている胡蝶蘭  
兼題「カタログ」

坊農 柳弘選

偏屈のカタログならばここに居る  
カタログの中から僕が消えている

たもつ ダン吉

カタログに吐息溜まっていく財布  
カタログの品がデフレで売り切れる

セツ子 ふりこ

億ションのカタログひろげ爪をさる  
カタログに仏壇安い言われても

隆盛 清山

カタログの定価で買わぬ浪速つ子  
新車カタログ飽きず見ているカーマニア

澄子 たず子

着くまでのスリルカタログショッピング  
カタログに目の正月を届けられ

隆盛 金太

カタログに夢をはさんでくずかごへ  
買つて未練あつてカタログ残しとく

真理子  
紫香

カタログにわたしのスリーサイズない

義子

カタログが自信を砕く試着室

人

文

ため息が出そうカタログのタイヤ

哲夫

切り出せずカタログ閉じたり開いたり

扶美代

ジュエリーのカタログ夢を夢のまま

つづや

天

朝子

カタログがどさつと届く妻の名で

哲男

カタログの美女につられて健康茶

朝子

カタログの攻勢ポスト食べきれず

睦子

軸

朝子

カタログにわたしのサイズ載つてない

弘一

カタログの服のサイズが気に入らぬ

公誠

カタログで買った背広がよく似合う

風云児

カタログの服のサイズが気に入らぬ

和香

カタログの服のサイズが気に入らぬ

重人

カタログで選んだような嫁がきた

ますみ

カタログで心のお洒落しています

千里

カタログと日がな一日眺めつこ

吐来

見本市カタログ背負うほど貴い

柳宏子

カタログが間もなくできるクローン人間

弘一

カタログで都会の匂いかいいてる

洋敏

カタログへ眼鏡かけたたり外したり

しげお

カタログがいてはいない愛は進行中

典子

カタログに載せてはいないデメリット

金太

若いの墓のカタログ迷い込む

美代子

カタログでくすぐる女の自尊心

章久

カタログいっぱい文化生活して、いま

扶美代

カタログをいっぱいほめてから値切る

しげお

カタログに書いてくれないデメリット

つづや

忙しい妻は通販ショッピング

かすみ

カタログが自分を砕く試着室

地

切り出せずカタログ閉じたり開いたり

天

カタログを泳ぐおしやれの小宇宙

軸

カタログの美女につられて健康茶

兼題「なぜ」

吉川寿美選

左遷地へ附に落ちぬまま見送られ

人はなぜ神の扉に手をかける

涙なぜ出ない胸割く悲しみに

なぜならと言えは話が長くなる

子のなぜを受け止めきれぬ核家族

落ち椿なぞわたくしを見つめてる

なぜなんだエイス裁判無罪とは

泣く声でなぜかを母は聞き分ける

なぜという戸惑いかかる人が居る

なぜなぜと絵本が次に進まない

いい人なのになぜか誤解をされている

帰るのが早すぎなぜか叱られる

なぜ生んだと十七歳の反抗期

海亀の生れた浜へ戻る謎

相場師も何故か判らぬほど荒れる

あの人が総理になれたのが不思議

ニアミスが信じられない広い空

なぜなぜと言うてるうちは呆けぬだろ

逢うだけでなぜか乱れる心電図  
未練などないのになぜか出る涙  
みぎひだりへなぜかオーロラ揺れて出る

遠野  
たず子

三歳のなぜに戸惑うことばかり

雅文

なぜ止めぬゴルフ続いた総理殿

かすみ

女ざかりの一人大きい家に住み

はじめ

うれしりのになぜか涙が出て困る

昭子

トップだけ知らぬ秘密がなぜかある

武庫坊

なんでなんで天使は僕を困らせる

昭子

害になる止めよと言って売る煙草

弘一

なぜなぜと好奇心の瞳がひかる

哲夫

おしどりと言うてはつたに離婚らし

英子

なぜと問うまるでチビツ子哲学者

千里

なぜなぜは知能が開花するあかし

千代

男と女のなぜか重たい離婚劇

賢子

夭折の友疑問符を置去りに

たず子

弟が悪くてボクが叱られる

桂香

疑問符の中で人間生かされる

朝子

なぜなぜをいっぱい詰めてある宇宙

鐘造

疑問符のひとつが解けぬまま春に

しげお

どうしたの政治の鉤かけ違い

美代子

なぜなぜを解いて少年脱皮する

和香

春の風方程式がまだ解けぬ

しげお

永遠のなぜがアダムとイブにある

重人

天

泰子

泰子

泰子

泰子

泰子

泰子

故あってお別れしますそろかしこ

兼題「地図」 高須賀金太選

昨年の地図使えない街変わる  
各々の地図で夫婦の仲が良い  
説明のいらぬ地図を書きなさい  
玉手箱に入れておきます未来地図  
ふるりの地図は昔のままである  
世界地図どこかで戦火なぜ消えぬ  
カーナビで案内のない老いの坂  
老いても男地図に逃げ道など書かぬ  
檜山の地図は老母に見せられぬ  
虫メガネで地図を見ているナビゲーター  
定退へ男の地図を塗り変える  
頼りない略図で迷う春うらら  
合併に地図から消えた昔の名  
顔の利く飲み屋の地図はすぐ書ける  
地図にない道で野心が走り出す  
母さんの地図にお安い店があり  
わらじ屋の地図から旅は始まった  
少年の地図の汚れは消しておく  
この先はお前がかけと父の地図  
助手席のカーナビの妻よく喋る  
だんだんと一色になる夫婦地図  
緯度経度ピタリ帰って来たつばめ  
地図広げ酒どころには丸付ける  
世界地図花いっぱいになれはい  
作ります国境の無い僕の地図

照子 充子 ダン吉 美代子 千代 章久 公誠 清山 重人 賢子 鐘造 正坊 高栄 千里 はじめ かすみ 泰子 セツ子 一風 隆盛 睦子 仁清 房子 利昭

故里の地図なら閉じてでも描ける  
極楽浄土地図を辿れば行けますか  
前途ようよう少年の持つ白い地図  
手のひらに残った二人だけの地図  
銀行がまだ角にある古い地図  
街の地図ビルの高さは書いてない  
檜山への地図をそのうちに持たされる  
真つすぐに歩くしかない蟻の地図  
カーナビを頼り切つてまたちよんぼ  
夫婦して描いた地図がくい違つ

春の風地図の外まで走り出す  
抜け道を探す六法線りながら  
地図通り行けば逢えない花だった  
今日よりも明日の地図へ橋かける  
世渡りの地図には虎の巻がない  
夫婦の地図噴火の跡がそこここに  
てのひらの地図に迷つてばかりいる  
真ん中に日本を置くこと見誤る  
政治屋が抜け道マップ買っている

三男 和香 由一 扶美代 尚士 度 尚士 尚士 月子 庸佑 扶美代 大輪 真理子 弥生 風云児

兼題「惑う」 米田恭昌選  
実社会戸惑いに負け五月病  
平凡な日々の惑いにあるドラマ  
ゼロ金利タンス貯金に惑わない

照子 セツ子 たもつ 保州 朝子 いわゑ

戸惑いの政治算術ばかりする  
歩く歩道で戸惑っている牛歩  
再婚へ戸惑い隠せない子連れ  
風はドライ惑う女をもてあそぶ  
井戸を出た蛙が惑う別天地  
逃げ惑う夢でよかつた夜が明ける  
即答に戸惑いみせるラブコール  
ささやいて俺惑わせた夜の町  
押売りも戸惑いながらベルを押す  
振り向いてばかり惑うてばかりいる  
時ならぬ雪に戸惑う花見酒  
きつとねと女惑わす事を言う  
惑うこと何一つない青い天  
戸惑つていはる嫁はん先立たれ  
肩叩きされて戸惑う子沢山  
押し寄せる老いに戸惑うコンパクト  
とまどいがあつて結べぬ袋帯  
夢への絵こころ惑わす色と艶  
逃げ惑うこともなくなりホームレス  
横顔にまだ戸惑いのある六十路  
戸惑いを隠すジュークが宙に舞う  
自分史の中で戸惑うヒトゲノム  
良人には無いやさしさに惑つてる  
混浴の裸婦に戸惑う湯気の中  
どうしよう一円玉が落ちている  
友に恵まれ酒もつまくて惑わない  
還暦の心惑わす赤いバラ  
モンローに惑わされたも自分史に  
縄文の遺跡に教科書まで惑い

風云児 冬葉 隆盛 雅文 度 房子 遠野 貞雄 千代 希久子 尚士 萬的 賢子 笛生 朝子 かしみ 公誠 希久子 楓楽 柳弘 泰子 風云児 保州 仁清 弘風 萬的

才媛の惑いを隠す赤い爪  
贅沢な国だ戸惑うゴミの山  
戸惑いはあれど尺取虫の道

住

葱坊主蝶を惑わす背くらへ

惑うほど愛は深みに落ちて行く

戸惑いを隠す大きなサングラス

戸惑いを見せてピンクになる桜

核心にふれて戸惑いかくせない

人

土壇場で惑う哀しい顔をして

地

戸惑いの酒は孤独の琥珀色

天

生きている証か戸惑うことばかり

軸

I T革命初老の僕を惑わせる

兼題「見事」

河内天笑選

負けつぶり見事だったと褒められる

一票差見事にただの人となり

無農菜見事な大根ではないか

したかな可愛い子ちゃんにしてやられ

池に身を映し見事な遅桜

日本に住んで見事な四季に会う

今時にミイが鼠を捕ってきた

大阪の春は見事な通り抜け

過疎だから見事な春が来てくれる

美田残さずお見事な幕引きでした

真理子  
五月  
薫風

利昭

美代子

金太

昭子

美代子

比ろ志

三男

ダン吉

たもつ

冬葉

恭昌

桂香

洋敏

薫風

清山

真理子

千代

別人になった見事なグイエット  
見事散る美学を論す花吹雪  
五体不自由押し見事にサクラサク  
善人の顔に見事に騙される  
おサイクルされて見事に日の目見る

お見事と笑顔で褒める負け惜しみ  
鉢巻を締めて見事な男ぶり  
鍵盤に這わす見事な手のさばき  
決め球を見事に打たれ悔いはない  
泣き虫が見事花嫁こりようさん  
均等法妻の見事な飲みっぷり  
食器類見事に割ってくれる嫁  
見事さに敵が大きく見えてくる  
節くれの指で見事な署名する  
よいとまけ見事女を忘れたたり  
よく食べてまた恋をして半寿なり  
星空に見事に咲いた観覧車  
騙されておこう見事な嘘だから  
間の至芸永六軸にある語り  
台本にない肘てつを見事食い  
何時見ても何処から見ても富士の山  
免許証ビカビカペーパードライブパー  
生活の知恵が見事なお婆ちゃん  
流鏝馬の矢ほど見事なものはない

擬似餌少々見事に男釣れました  
見事な輪描くトンビを見かけない  
ノーヒットノーラン二回トルネード  
別人になりすましている定年後

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

たず子  
度  
房  
舞  
恭  
賢  
庸  
洞  
正  
鹿  
ます  
尚  
久  
セ  
賢

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

賢子  
セツ子  
久峰  
尚士  
ますみ  
鹿太  
正坊  
洞庵  
庸佑  
賢子  
恭昌  
舞夢  
房子  
たず子  
希久子  
尚士  
靖巳  
雅文  
公誠  
弘一  
月一  
あやめ  
薫風

オムレツのつもり見事に炒り玉子 つづや  
人  
満場一致何と見事なセレモニー 保州  
地  
信号がなんだ見事に酔っている 美代子  
天  
ポツクリ死なんと見事なエンディング 西出楓楽  
軸  
新庄の霸氣初打席初安打

第46回『全国川柳作家年鑑』

参加作品応募要領

- 一、句稿 応募用紙あり(申し付けて下さい) 作品7句新旧可
  - 二、参加費 3,000円  
定額小為替か振替口座
  - 三、刊行 平成13年9月下旬予定  
(参加者に年鑑一冊送付)
  - 四、締切 平成13年6月末日
  - 五、投句先 〒654-0151神戸市須磨区北落合  
4-28-12 長島敏子  
TEL 078-793-3641
  - 六、郵便振替 009600-4-61516
  - 七、川柳に関する原稿・エッセイ募集  
本文のみで三五〇字以内  
カット(ハガキ大以内)
  - 八、その他 (七・八の採用は一任の事)
- ふあうすと川柳社 主幹 泉 比呂史  
全国川柳作家年鑑刊行委員

# おせめめ

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

サークル檸檬

小林

一夫報

群にいてあらぬ妥協をしまして  
むなしくて花屋の前に立っている

靖巳  
いわゑ

老いたかな玉虫色が好きになる  
下積みで時に旗振る僕が好き

楓 楽

なあ暗れたかと無精髭動き出す  
名を知らんから雑草と言うておく

智恵子  
哲 夫

木のかげにそつと佇む梅の精  
力んでる幹へ力まぬ梅の花

正 坊  
みつ子

私の吐いた言葉に責められる  
紅梅に染まって少し若くなる

あずき  
希久子

鴛を装い梅と戯れる  
銀世界この世に立ってみるあの世

遠 野  
保 子

艶めいたかたち梅の蕾たち  
雨あがり梅ちらほらのやすらぎよ

澄 子  
房 子

かわはら川柳会

上田 俊路報

影のようなスタイル夢見ダイエット  
リハビリに影も素直についてくる

登 生  
輪多朗

星影のロマン感じる歳はない

聴

春便り窓辺の柳影踊る

六十を過ぎるとみんな同じ影  
荒れ田にも一種拾った父母の影

あといくつ渡れるかしら虹の橋  
休耕田渡る離農の風が荒れ

とこしえに楽しみ渡る夢バズル  
信じればこそ護摩壇の火を渡る

悦 子  
向 子

一筋の芸花道にたたら踏む  
十メートルいのちを拾う六百餘

計画の半分実行しています  
しもといた所忘れた銀行印

持ち合わせなくて三べん回つとく  
夢を追う男でいつも金がない

あとを追う孫へ財布の口ゆるむ  
実行へ静かに靴を光らせる

実行へときめきがある旅靴  
喝采の中でピエロの軽い芸

信 醉  
芳 香

優しさは心にそつとしもといて  
猿まわしまわされるのはさあどちち

家事全部済むと心が楽になる  
しもといたはずが無くつてお慌て

追憶を友と語って露天風呂  
芸談に女出て来て盛り上がる

しもといた愛の言葉をそつと出す  
しもといたというた相手は誰やった

流行を追って個性を見失う  
やつてます嘘を見破る聴診器

こつこつと努力が今日の芸に生き  
その菓子は明日食うからしもといて

木簡のちぎれた文字を追うロマン  
虹を追う女の辞書がすり切れる

不言実行キラリ男の顔ひかる  
ばらまきの予算に見える票の数

悲しい日も芸は客席笑わせる  
だらしな私を追って日が暮れる

落書きに芸術もある無人駅  
実行へ階段がない天狗鼻

柳 弘報  
柳 弘

川柳大阪 坊農

悦 子  
向 子

余吏子  
泰 良

一 薫  
俊 路

柳 弘報  
柳 弘

信 醉  
芳 香

かよこ  
柳 昌

柳 昭  
美 花

川 童  
鉄 心

總 一

雅 果

照 月

國 治

秋 雄

朝 子

一 風

ダン吉

希久志

章 久

柳 弘報  
柳 弘

柳 弘報  
柳 弘

博 一

積 子

美和子

理 恵

真理子

富 子

むつみ

春 雄

絹 子

佳 子

春 蘭

秋 泉

惠美子

水 魚

とし子

あやめ

洋 子

洛 醉

本 蔭

一 歩

比呂志

金 太

まつお

柳宏子

重 人

笑 風

柳 弘

柳 弘報  
柳 弘

博 一

積 子

美和子

理 恵

真理子

富 子

鬼は外 福も外へと逃げたがり

血の分けた仲でもめてる遺産分け

初恋の再会老いも血がさわぐ

血縁に勇氣もらった日の手術

あつてない一日でしたもう寝ます

ゆきひらの粥ぐつぐつと血の絆

他人救う勇氣無念の血が凍る

血より濃い絆で回る夫婦独楽

本心をテープにとつていた寝言

血を少し下さい渴ききるハート

戒壇院の餓鬼に昔むかしを見た



村雀嫁に等級つけたがる  
 晚酌のあとウグダウグダ過ぐす  
 褒め言葉浴びて子どもの芽が伸びる  
 芽のことは地下のモグラに聞くがよい

はまゆう川柳会 中後 清史報

配りたい天賞の句をコピーして  
 念のためコピーして置く領収書  
 コピーして一万円が使えたら  
 筆まめがコピー嫌って年賀状  
 もしかして俺のコピーも呑むやろか  
 コピー機の馬鹿正直な誤字脱字  
 切札のコピーは胸にしまつとく  
 挨拶は良いところだけコピーする  
 美しいわまでもが母のコピーです  
 ゼロ一錯覚だった片思い  
 錯覚も夢も溶かして共白髪  
 錯覚の投げた波紋の深刻化  
 お見事な錯覚でしたプロポーズ  
 錯覚に気づき内心ほつとする  
 たつぷりとのんで見上げるつぷらな瞳  
 たつぷりな服がかくした皮下脂肪  
 野暮でいたつぷりつけたそばの味  
 たつぷりののろけ土産にハネムーン  
 たつぷりと殿様気分露天風呂  
 愛たつぷり彼の心に身を投げる  
 たつぷりと睡眠をとりいい思考  
 たつぷりの乳ふくませて吾子を抱く

康子 完司 和枝 次男 泰作 すみれ サト美 比斗志 平和 てる坊 国彰 純子 太一 佳子 生米子 公治 清史 恵美子 さだ代 美佐子 慶一 利ぼん 雄造 修也 登 苗子

城北川柳会

川久保睦子報

全快をすればたつぷり世話が焼け  
 小説の中で悪女になりたいナ  
 減塩減糖一匙毎に愛も盛る  
 こだわりに引かれて口が重くなる  
 私にも家計簿に書けぬ機密費が  
 横文字について行けない八十路坂  
 別れかなしっかり糊が貼れません  
 糊かたく封じて置こう遺言書  
 じわじわとウィークポイント攻められる  
 無駄話の中でポイント押えとく  
 道化師のように娘がメイクする  
 都会にはころぶ優しい土がない  
 長いものには巻かれて暮らそ新世紀  
 ポイントを決めて回った京の街  
 北風をさけて陽だまり小さい春  
 いっぱしに思い出話する五歳  
 ポイントは被疑者の派手な金遣い  
 水門を開けろと海草の悲鳴聴く  
 意地捨てた背なはまるく丸くなる  
 領収書要らぬ経理がある政府  
 欲一つ抱いて人生黄昏れる  
 昔話がつとも好きなロゼワイン  
 血縁の絆だんだん薄くなる  
 真つ直ぐに育つて丸い籠が出来  
 味方だと思ふ握手の手が温い  
 虚と実の眉を引いてる夜の蝶  
 ポイントを切り替え老いのジャズダンス

雅視 とし子 春蘭 ただし 政子 登美子 和歌子 あやめ 修 求芽 トヨ子 陸子 久留美 はじめ あい子 道子 史風 柳弘 千里 倫子 白峰 達子 昭子 典子 一枝 志華子 照子

公約はすぐにはがれる薄いのり  
 引いて足しやがては0になる運命  
 ポイントは五七五とした決意  
 向い風父はベダルは休まない

川柳会梨花 石上 悦子報

からからと笑う絵馬にも幸不幸  
 新世紀やがて宇宙へハネムーン  
 減反の無念に雪は降り積もる  
 へび踏んでばちもち食ってトピンシャン  
 きらきらと輝くあなた人が寄る  
 きらきらと飾りまくってさびしそつ  
 お星様に願いをかける老いてなお  
 キラキラの服ですローン着ています  
 きらきらと生きてさりと老いに行く  
 女流棋士きらきら指で追い込める  
 きらきららのやがてを待つて黄昏れる  
 きらきららのいのちが雪に反射する  
 きらきららの生前葬を見てしまつ  
 平等にきらきら光る銀世界  
 酒飲むとくだ巻く悪い癖がある  
 捻子巻かれチクタク暮れる宮仕え  
 巻き貝の中から波の音がする  
 マル優という特別な枠がある  
 お姑は特にトイレに目が光る  
 フラッシュが美人をつべらぼうにした  
 通の人特別な日をよく作る  
 おしどりの夫婦どちらも耐えている  
 仏さまと睦まじくしてひとり住む

順三 高栄 天笑 公一 重忠 高栄 芳光 石花菜 行男 真砂 蟹郎 多哥由 美恵子 螿 忠良 節子 かつみ 一夫 幸子 章久 求芽 照彦 よしえ 典子

ひき潮を見たくないから睦まない  
和歌子  
風陸ぶ大地を睦ぶ冒険者  
修  
握り合う右手に和陸胸に海  
（彌）和枝

川柳ささやま 酒井 靖子報

行き違い今日の夫婦は荒れ模様  
純子  
せつなくてひとりぼっちの芸をする  
恵美  
鮮やかにグルメのトマト生きて朝  
多美子  
台所まさかの客があわてさせ  
美智子  
一合の酒がまきかを喋り出す  
とみ子  
お隣と比べるくせがまだ抜けず  
つや子  
この世では良きも悪きも比べられ  
かほ代  
うちの孫まさか茶髪にするなどと  
君代  
ふつくらと炊けた黒豆夜が長い  
美紗子  
激安のグルメおんなの夢を組む  
寿子  
喝采へ黒子の妻が居てくれる  
富美  
生け作りグルメの目玉睨んでる  
房江  
無常風まさかまさかと確かめる  
毬子  
黒髪をばつさり落す果し状  
八重子  
お守りが頼りまさかへ身構える  
可住  
満ち足りてゆつたり帰るグルメ旅  
靖子

ふくべむら川柳 橋本多哥由報

僕の主張閻魔がうんとまだ言わぬ  
洋々  
人情のきすなへルル目をつむる  
はじめ  
自己主張してハラハラと桜散る  
春恵  
手毬にも主張があつて手にのらず  
寛子  
旗印あげれば明日は独りだろ  
依子  
ルル消し白衣の下で毒を盛る  
依子

今度こそ金運あれと主張する  
操子  
今世紀思うがままに主張する  
静子  
主張だけ言つてルルが守れない  
和甫  
入札の談合ルルなくいい  
行夫  
定年で磨いたルル守りぬく  
多哥由

川柳塔鹿野みか月 土橋 螢報

さすが兄弟だな負けてやる相撲  
八重子  
遠慮なく喧嘩している兄おとと  
富久江  
兄ちゃんに半分欲しいチヨコ渡す  
保子  
若草も芽吹きよなルル守らねば  
茶子  
目の鱗刺くよな事件後絶たぬ  
弘子  
外泊が膝のぬくもり忘れたか  
幸枝  
八度目の巳年の窓は新世紀  
喜与志  
わたくしの心を癒す花ことは  
きみ子  
一歩ずつ惚けが近寄るのが怖い  
房子  
一歩一歩落ちついて出してみろ  
きみゑ  
一歩二歩手の鳴る方に笑い声  
野草  
一歩ずつ貴方のそばに近づいた  
久枝  
バズル解くコツ一歩一歩上達す  
菊乃  
打たれても打たれてもなお一歩出ぬ  
茂  
ポーとして一歩一歩のバージョンロード  
実満  
一歩からやつとヒマラヤ走破する  
節子  
崖つぶちで人の情けのうらおもて  
くに子  
堀の崖護り継げよと子にゆする  
汲香  
相生の松です崖にもたれ合つ  
（彌）隆風  
意味とおる手話に合せて笑顔する  
みどり  
さわやかな弁舌でした意味不明  
忠良  
生きる意味まだ少年に消化せず  
諷人

意味なんか聞くなと花は咲いて散る  
石花菜  
もらわれた犬畏まる初対面  
かつ乃  
畏まり過ぎて額の皮をむく  
はるお  
お願いは正座してから申し上げ  
和子  
畏くも命捧げて軍神に  
睦子  
仲よしの兄弟喧嘩泣くが勝ち  
公子  
酒という文字にいのちとルビをふる  
完司  
弟に子どもをつくる種あかし  
螢

川柳塔まつえ吟社 恒松 町紅報

伸びる芽は伸ばしてやりたい親心  
政子  
春の章森羅万象みな芽吹く  
多賀子  
約束を守つて男芽を伸ばす  
たけし  
天をつく若芽に明日の夢をみる  
蘭水  
そのうちにきつと芽が出る時もある  
史岳  
心音が乱れて発芽せぬわたし  
昭二  
首筋の太い人形さんである  
石花菜  
ねじ巻くと人形わたくしみて踊る  
保子  
紙人形一年振りの顔に会う  
邦代  
人形になって山なみ越えてきた  
久子  
キュービーが横ですねてるひな祭り  
茂美  
ふるさとの人形に私語置いてくる  
知恵子  
宇宙から招待される人もあり  
（彌）螢  
招待へ抹茶一服春を呑む  
房子  
招待を断り切れぬ貸衣裳  
煩惱児  
お見事なスピーチ招待されたので  
早苗  
雪タルマ陽に招かれて歩きだす  
すみこ  
招待をする人選ぶ家族会  
（彌）幸子  
少しだけ派手目に決めたい日  
（彌）幸子

花よりもだんごに決めて裏通り  
決められて私一人の幕が開く  
北斗星決めた答を持っている  
助走路の窓へ決心揺がない  
決心して三日も経たぬ酒を飲む  
再会に悲願十年かけた母  
再会を約して固い握手する  
再会に今人妻としての距離  
もう一度会える嬉しい忘れ傘  
再会の駅イヤリング揺れている  
散歩道こゝらで逢える女がいる

うぶみ川柳会

上田

宣子報

たつぷりと陽を浴びている呆けそうな  
ストレスを煮込んだ料理喉越さぬ  
極楽と地獄たつぷり生かしてきた  
たつぷりと読んで聞かせる敗戦記  
わがままをたつぷり入れる予定表  
絵になれば蛇もなかなか愛らしい  
悪口をたつぷり聴いたレモン水  
蛇行してます私の恋心  
免状がわたしを殿と呼んでいる  
飯免の域をでられぬ花鉢  
忘れることたつぷりあるが笑つとく  
たつぷりと与えていると天はいう  
主夫料理素材に金がかかり過ぎ  
大破魔矢一年無事に過ぎました  
母さんになつぷり化粧してもらう  
お料理の手ほどきつける赴任前

俊一 美江子 圭詩朗 義良 浜丘 秀山 静恵 桂子 太泡 紫晃 注湖 登美枝 良男 一京 黙光 羅奈 一枝 帆雀 あづま 葉士人 ひろこ きみ子 茂 くに お 螢 天 人

ふるさとへ学資免除の恩返す  
免税をされ我が歳を考える  
定石の外になつぷりあるドラマ  
免れる事ばつかりを考える  
寄り合いに大の男を料理する  
外遊の土産いずれも免税品  
たつぷりの愛は風景画の中に  
輪の中のがれて鬼も苦笑い  
どう料理しようか投げられた小石

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太郎

風を切る朝の意欲のベダル踏む  
友情の情を外した夫婦です  
只今と言える家族が居てくれる  
吊橋を渡るわたしを試す風  
黄昏れて友の情けが身にしみる  
かけつばなし介護保険はそれでいい  
出番なき物に今年も風とおす  
いい風を避けていたのは白い壁  
梅咲いて春一番の風を呼ぶ  
同窓会出世頭が酌ぎに来る  
乗り急ぐバスは残念駅がない  
同行二人漏路にきつい老いの坂  
ホワイトデーチョコの御礼に赤ワイン  
寄せ書きに浮かぶあの友あの夕陽  
我を捨てて皆の輪に入り和む日々  
合格が風変えました十八歳  
放っておくのも友情のひとつかも  
友情のザイルの先にある命

芳江 華子 健一 はるお 睦子 天雀 美ツ千 雄人 宣子 その 幸子 江美 求芽 鹿太 房江 亀与子 イサミ 保夫 昭三 孝一 尚利 哲嗣 義芳 まさ 弘治 夢之助 満寿蔵

噂連れ風は太古のままに吹く  
友情がリストラ春を弾ませる  
頭から駄目と決めてる負けている  
縁あつて貰った猫が家出する

岸和田川柳会

長谷川昌万報

手に持って思案らしむノミの市  
日米の立場思案のハワイ沖  
ポストまで来てまだ思案する手紙  
女優さん化粧落せばどなた様  
生きて来た証素顔のシワとシミ  
母想うまじめな素顔茶髪の子  
鬼検事素顔になつて孫を抱く  
美しい素顔が光る二十歳前  
み仏の素顔に酔った奈良の旅  
正論の四角四面に肩が凝り  
正論で儲けは無理という店主  
正論をまっとうさせたぬれ落葉  
正論を吐けばトップが煙たがる  
正論を吐いて手酌の席にいる  
正論を生きがいにするお父さん  
総なめの風邪に玉碎したわが家  
総なめに街をくずした大地震  
市街地を総なめにした活断層  
大関を総なめにして勝ち越せず  
青い目が国産力士総なめに  
驚掴み乳吸う吾子は大器らし  
どの顔も大器に見える入社式  
どんぐりの不幸大器と皆思い

正治 十四郎 柳宏子 紫香 盛之 基 すみえ 東雲 一脩 弘子 鹿太郎 路子 さよ子 白光子 俣子 苑子 東吉 ダン吉 狸村 洋 昭二 笑司 鍊太 穰一 賢二 仁緑 蛙城

長い目で見たが大器が解らない  
緋の衣着せて大器とまつり上げ  
赤子から乳強く吸う大器の人  
大器でも名伯楽のいぬ不運  
昼行灯と言われて大器出番待ち

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

俺はまだ生きてるんだ春よ来い  
春うらら欠伸が移る差し向かい  
足腰を撫で撫で春を待ちこがれ  
春が来た背すじをピンとのばそうよ  
猫柳ほどに私も光りたい  
春の陽にうっかり伸びたドアチェーン  
お静かに今スポットを浴びている  
スポットに天狗の鼻が高くなる  
スポットを浴びて流し目花の道  
新世紀虎にスポット春の夢  
スポットライト自分史にある一ページ  
くれる前義理チョコですとちゃんと言う  
箸わってちゃんと待ってる隣の子  
旅先でちゃんと戸締りコールする  
昨日見た時にはちゃんと有ったのに  
ちゃんとした人にも妙なほこり出る  
計算はちゃんと合つた金が無い  
ちゃんとしたお方でほつと娘の相手  
うす紫でちゃんと出だまる女将の座  
大学はちゃんと出たけど職がない  
介護保険ちゃんと世話してくれませうか  
限界も三度と伝えつけない

願 吐来 志洋 柳宏子 敏 一 知 扶美代 重人 美喜 利武 GUN吉 かつみ 敦子 昭平 昭子 庸子 庸佑 久仁子 忠宏 一壺 美代子 専平

調停で愛の限界裁かれる  
限界にいとむ蛙の高望み  
老いの知恵もつ限界と笑顔添え  
限界の言葉の裏を這う気力  
限界にバットの芯がしのび泣く  
限界がないから辞書を手離せぬ  
財産が負担になった三代目

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

根性も怪我には勝てず土俵去る  
根性で伝統も奈良の墨  
耳鳴りといつか親しくなるつもり  
いつからか貴方の愛に溺れる  
ケセラセラいつか地獄が極楽か  
いつか雪かぶる日待つ冬木立  
いつか翔ぶ夢を見ている冬苺  
この道はいつか来た道手をつなぎ  
いつかキット私を乗せる舟が来る  
踏み出すと何も見えなくなる不倫  
お百度の一步一步にある祈り  
人生の壁黙々と踏み越える  
喝采は六法踏んだチビ役者  
落ち葉踏む足の先から春が来る  
生き甲斐の息子が何故かニューハーフ  
コンビニへ出掛けた妻が帰らない  
気むずかしい父が笑つたハブニング  
ハブニングピクニックの蓋がない  
受け取つてやがためらうのが賄賂  
恥ずかしいためらい傷が二三ヶ所

泰子 昇 たいし さとみ りつえ 絢子 彥 杳 義一 萬的 無祿 満寿蔵 重人 紫香 活恵 治三郎 吉之助 尚士 澄子 暁子 靖巳 五月 磔 スミ子 しげお 半蔵門 柳宏子

正攻法なにもためらうことはない  
生きてきた証ためらい傷無限  
ためらいもなくすると新世紀  
与党から退陣論も出る総理  
雪が降る苦い記憶の上に降る  
日記からぼくのいのちが零する  
いつか来たこの道行けば火の匂い  
過去帳のお前と花見でも行くか  
レモンのように貴方の愛をしばらく  
他人には見せぬこころの冬景色

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

言ひ知れぬ心の底に鬼を飼う  
身の内の鬼追い出して娘は優し  
平成の鬼の金棒錆びている  
鬼の面手の鳴る方も気にかかる  
金棒を売ってしつかり貯めた鬼  
鬼は外雪降る夜は寒かろう  
金棒の重さに悩む夫婦鬼  
月白し伽藍に眠る鬼瓦  
身代りの鬼を一匹飼っている  
おしどりがびつたり泳ぐ花いかだ  
風紋を掃いて砂丘の風走る

ローズ川柳会

山崎 君子報

欣史子 香住 あずき 慶子 喜美子 能子 シマ子 弘直 アキ 会美 清芳 庸佑 節子 茶の子 三郎 あやめ 光穂 晴史 和美 和子 諷云児

頼かぶりしたつもりだが足が見え  
目が合ったただそれだけで頼そめた  
ホッペタをついてすぐに起こすパパ  
ほほ笑んだ余りに若い遺影かな  
みつ子 藍

にらめっこほっぺのえくぼ笑つてる  
 類染めて合格表を見る学生  
 食べちゃいたいホッペにキスを二度三度  
 春は名のみの深々と二・二六  
 根雪分け強さを見せる露の臺  
 少年の偉大なる芽上天を向け  
 ど忘れが続き一人で笑つてる  
 ほほゆるむだらしいとはおもつけど  
 春匂う亡母に近づく木の芽あえ  
 老木なり芽吹きも少し遅れます  
 頼寄せて何の話かエトランゼ

川柳塔みぞくち

小西 雄々報

哲子 トミエ  
 貴代子 まさお  
 澄子 いわゑ  
 武庫坊 年子  
 君子 義子  
 雅子 子

エリートの隣は肩が凝るだろう  
 パンコンに肩の凝るのも忘れてる  
 七十になつても癒えぬ五十肩  
 雪道へハンドル踊り肩が凝り  
 肩凝りへ夫の指圧が身にしみる  
 ストレッチ肩凝りほぐし身も軽い  
 肩の凝る話ほうまく聞き流す  
 やる気だし肩の凝るのも忘れてる  
 肩凝りも腰痛もなく七十五  
 肩の凝るほど責任を背負わされ  
 肩凝りと上手に生きている余生

川柳塔唐津支部

久保 正剣報

兵八郎 實  
 輝夫

発つた日から祖母は曾孫を待つている  
 春風に目鼻を溶かす杉花粉  
 嘘をつく目線わたしを直視せず  
 万場一致どこか淋しい撥条仕掛  
 年金で胸算用の新学期  
 洋酒入り本命で他は板チョコで  
 生きてたナー出合頭の戦友の口  
 新しいあだ名が欲しい新課長  
 板チョコが万札になるゴルフ場

三幸川柳教室

三宅

保州報

勝視 晴翠  
 高明 水笑  
 タミ 幸夫  
 虹汀 四郎  
 正劍

コンビニで翼めめる塾帰り  
 しがらみが翼にからみ翔び立てず  
 気にかかる風の噂へほしい羽根  
 インターネット翼伸ばして人荒む  
 新世紀凌ぐ翼のほしい古希  
 五時からが元氣百倍出る翼  
 まだ翔べる翼あためチャンス待つ  
 定年の翼をたたむ契がある  
 終章の翼をたたく折りたたむ  
 三の矢を避けた翼に自負がある  
 紆余曲折つばさが余韻知っている  
 立ち向かうときは大きくなる翼  
 サロンパス貼って翼も五十肩  
 雑草も負けてはいない根の深さ  
 早春が匂う指先露の臺  
 草団子靴に入れて旅終る  
 草餅へ春の息吹きを包み込む  
 踏まれてる草の本音を聞き漏らす

美子 三千子  
 章子 一步  
 利治 豊太郎  
 嘉平 鉄治  
 栄之進 当代  
 伸二 保州  
 和子 起世子  
 昭枝 キミエ  
 秀男 みね

不器用な草は踏まれる場所で咲く  
 草原の彼方で虹を掴みとる  
 走れモロス大草原の地の果てへ  
 蛇母ことし主役にしてあげる  
 抜こうと刈ろうと形状記憶持った草  
 車椅子励ます位置に見る野草  
 歌会始皇居の芝生耳立てる  
 目から鱗雑草という草はない  
 雑草のエル嬉しい遊歩道  
 草の根を軽く見た樹が枯れている  
 青春に帰る若草山燃えて  
 みち草もよし人生の長丁場

尼崎いくしま川柳会

春城

年代報

寒卵ぶるんぶるんと弾むなり  
 春帽子ハードル少し高くする  
 底知れぬハードル女おんな  
 奇術師のハードル花は海を見た  
 ハードルは何であろうと恋は盲目  
 再びを少年の抱く青写真  
 青信号つえに話しつつ渡りきる  
 青空に枝をひろげて春を呼ぶ  
 団地の窓ポチポチ灯る日は暮れる  
 温度差で風邪を引いたり治つたり  
 次の世の新婚旅行は銀河系  
 浅いところで背信の米を研ぐ  
 退屈が過ぎて聖書をひらく宿  
 掌の中にそっと包んで蝶放つ  
 青雲を胸に小さな野球帽

登美代 碧  
 満洲子 朱夏  
 孝子 さち子  
 千秀 和代  
 正一 公子  
 桂香 町子  
 年子 和子  
 歌子 孝一  
 紫香 静  
 正子 千恵  
 糸子 節子  
 保夫 芳子  
 恵子 東園  
 寛之

何してもためらいが先に出る人よ  
携帯とクラブ片手で危機管理  
椿一輪青い葉陰につつましく  
夢よりも華麗なものにまだ会えず  
写経するいく度罪を重ねたか  
節くれた指は多くを望まない  
跳ね上がる波紋の重さ身に染みて  
どの川の水もいずれは海の色  
大寒を暖めなおす大根煮  
インターネットを開く雑音の意識  
寒戻り啓蟄の扉があきにくい  
柔らかにこげたトーストの幸せ

東大阪市川柳同好会 森下 愛論報

がむしやらに野心を磨く向うみず  
池の面にキラキラ泥鰌ッ子浮かれてる  
花道に野心ばらばら落ちている  
盛装を比べるスタートの火花  
嫁選び器量は梓の外に置く  
手を広げ過ぎて墓穴を掘る野心  
さらさらのつららに過疎の冬がある  
再スタート今度は仮面などつけぬ  
縄文衫見てから野心捨てました  
嫁さんが若くてマムシ飲んでる  
嫁がせて夕顔の箸がふと止まる  
清らかな汗で9回裏祈る  
居るだけでほんわか和むウチの嫁  
串かつでひと息ついている野心  
矢は放たれたもう神に祈るしか

吉太郎 弘一 愛 武庫坊 光穂 澄子 沙置子 比ろ志 昭三 薫 義芳 久子 愛論 柳宏子 たもつ 雅文 道子 晋吾 猪太郎 萬的 弥生 湖風 美弥子 左代子 章久 巖 度

給料は間わず掴んだ二度の職  
日曜の礼拝堂の一人です  
卒業がけじめお別れのスタート  
さらさら星になれよなれよと巫女の鈴  
七人の敵に笑顔をする野心  
とてもいい嫁ですいつもお留守です  
スタートラインみなライバルの面構え  
言葉の断片がきらめいてみえる  
さらさら赤子の瞳夢無限  
未来図へのスタート点にある野心  
目立ちたい女輝くも纏う  
太郎も次郎も嫁の所へ飛んでいた  
居酒屋でゆっくり爪を研ぐ野心  
みどり児の笑顔は春の陽をはじく  
嫁よりもまず就職と願う親

川柳塔おっぱい吟社 木村あきら報

辞令一枚さてそれからの冬の陣  
生命ある限り明日へペダル踏む  
見栄張ったヒナが座敷を春にする  
色褪せた記録が残る母子手帳  
年月で磨いた中身光り出す  
ピカピカの机に燥ぐ孫の声  
菜の花と共に繰出す遍路笠  
恋人も居らぬに弾む車椅子  
悔しむが胸の鼓動に車をつける  
嫁自慢厚着をさせてホメ言葉  
庭掃除ホーキ片手に日向ボコ  
早鐘を打つよな恋もあつたなあ

三重子 太郎 ばっは 緑 あや子 一志 庸佑 定男 朝子 賢治 シマ子 とみを 英一 和代 ひかり まさる マツエ よしみ 貞月 あきら 吟笑 文仙 坊太郎 治延 奴風

青写真描けど暮しままならず  
瑞穂の国空は青いがくもり勝ち  
新芽吹く山を背にして恙なし

大原川柳社

矢内寿恵子報

方針を決めて巢立ちの始発駅  
先頭が覚悟で走る風当り  
今年こそ川柳一途に励みたい  
若者が年々減って過疎の町  
若者に負けず頑張る父の背な  
針の先程の言葉でもめていく  
方針は突張りして決め好記録  
趣味持つて心に若さ失わず  
若返るパッチワークの古い布  
まだある若さへ少し紅を引く  
胸を張れ若い門出の祝い唄  
若者の荒々しさに道をよけ  
若い気が足から先に枯れ始め  
姥ざくら咲かせてみよう若い気で  
薄化粧ちよっぴり若くなる鏡  
若さ一ぱい溢れ出ている古日記  
時すでに遅し若さに遠くいる  
リストラが初志貫徹へメスを入れ  
方針は曲げぬ男のいかり肩  
卒業へまだ方針をきめかねる  
若い日の亡父に似てきた目鼻だち  
成人の若さが破目をついはす  
初志貫徹一途に北を指す磁石  
方針は変らず世相変りすぎ

放任 輝夫 八重子 是るみ あすなろ 昭子 絹子 静子 たづ子 ひでの みさえ 美佐子 南花 敏子 喜美子 巴子 しずこ ふゆ 妻子 辰江 玉恵 さちこ あやこ みづえ はじ芽 寿恵子

らくらくと生きて要をし損じる  
 銀のステッキ空中散歩らくらくと  
 らくらくと着けた仮面に脅される  
 らくらくと生きたわけではない白髪  
 らくらくと人間模様かたれない  
 らくらくと上がる手足がありがたい  
 らくらくと勝てばお客はおもしろい  
 うまい飯らくらく食べる箸がある  
 目を開けて獅子がよろこぶ春の舞  
 角かくすよろこび無限大を知る  
 大喜び背中影に気付かない  
 晴れて喜ぶお日様に布団干す  
 ガソリン満タン平和な日々を喜ぼう  
 よろこびの懐妊すこし伏せておく  
 沸きましたやかんビィビィ鳴き出した  
 生きかえるように泡湯で脱皮する  
 長電話ガスが怒って湯気を噴く  
 湯豆腐の出番の季節やってきた  
 緩やかに血が澄んでいくお湯の中  
 湯につかるとき善人の顔をする  
 氣迫ある漁場の男に魅了され  
 後継者不足に漁場落ちこぼれ  
 漁り火に揺れた心をなつかしむ  
 太公望酒がすべらす漁自慢  
 大漁の旗を忘れた船がくる  
 禁漁の区域に旨いものがある  
 漁り火の下に命の修羅がある

翔子 富子 佐智枝 一京 つや子 和代 正邦 洋子 菜美 一瑤 常子 帆雀 静生 美智子 喬水 あらた 敦子 公弘 悦子 小生 幸子 小鹿 一揆 一眸

領海侵犯せにやあマンマの食い上げだ  
 生きてゆく漁場の顔は見せられぬ  
 遊子

京都塔の会

都倉 求身報

階段を数える亡母を笑ったが  
 京の春炭火つく手の白さかな  
 新世紀どんなドラマが待つや  
 年寄ってふいにこぼれる京なまり  
 一年ごとにスピードにぶる夫婦独楽  
 おまえには負けぬと夫とにらめっこ  
 肩組んだやんちゃな顔もセピア色  
 雛祭 酔の香 つんつん春の風  
 つんつんの理由分からずに寝つかれず  
 幸せ知った日からつんつんしなくなる  
 つんつんと妻がしている午前二時  
 夫婦道 時には合わぬ歩幅あり  
 現役のゴールへ歩幅やや広げ  
 私を包んでくれた胸の幅  
 これからは身幅に合わせ生きていく  
 体調が少し戻ってきた歩幅  
 糊代の広い夫婦になつてくる  
 ふるさとの川幅広い風が好き  
 食べやすききざんでくれる思いやり  
 向かい風 傷つきやすいバラの花  
 千羽鶴 傷つきやすい木綿針  
 相性が悪いか 縛れやすい糸  
 騙しやすい母に一本釘さされ  
 初顔に組し易いと舐められる  
 柳宏子

よい御縁一応打診してみます  
 拾う前一応蹴ってみる財布  
 子とけんか一応負けておくとする  
 聞き役に回り本音は一応伏せ  
 一応はそむいてみたいドアチェーン  
 芳子

竹原川柳会

時広 一路報

女らしくさつと料理を作りたい  
 豆の木は空の深さを知っている  
 お亡きさんひとりで豆まきましたよ  
 寒い夜は湯豆腐つくつ幸もある  
 遺伝子がどうのこうのと豆を選ぶ  
 新世紀優しい鬼と豆をまく  
 無口と無口ぼつりぼつりと落花生  
 妻逝きて早や十二年まだ元氣  
 優しいな人に道聞く老い二人  
 ご無礼な十七歳に誰がした  
 親しさのなかの礼儀にあるところ  
 朝礼の訓示短かく皆元氣  
 礼儀正しいおかたそろそろ肩がこり  
 無礼講ゆめゆめ油断召さるなよ  
 一筆箋という礼状の気安さよ  
 礼状にくるまれて着く人間味  
 いにしへの富町並みに生きている  
 元氣なのが一番の富ありがとう  
 玄関に富士山頂の木札置く  
 大富豪の歴史をたどる古い街  
 へそまがり富の世界に背を向ける  
 御米光富岳の色は赤だった  
 節生

神まつる宮にれつきとした貧富  
百戦錬磨光りだすのが富だろ  
ゆたかさの中で遊べぬ子供達  
天国の入口富が捨ててある

川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

合格の折り届いた春の雪

君をまだ忘れきれない春の雪

芽ぶいてる草木もうれし春の雪

巢だちゆく子らの背中に春の雪

老いの恋荷の雪路に似た想い

厄払い稲荷の庭に春の雪

手のひらであたたかくなる春の雪

流れ星君は聞き役だったのか

うなずいていればいいんだ妻の愚痴

聞き役も同じ悩んで悩んでる

聞き役の猫が時々返事する

お喋りが聞き役だったとは不運

聞き役が上げてきましたホルテージ

聞き役で世間の風をインプット

聞き役も一緒に泣いた日の憂い

聞き役の忍耐足を抓つてる

力 半 静 一  
覚 風 路

雅 精 和 和  
代 子 子 子

和 和 和 和  
子 子 子 子

和 和 和 和  
子 子 子 子

和 和 和 和  
子 子 子 子

和 和 和 和  
子 子 子 子

和 和 和 和  
子 子 子 子

和 和 和 和  
子 子 子 子

和 和 和 和  
子 子 子 子

和 和 和 和  
子 子 子 子

和 和 和 和  
子 子 子 子

和 和 和 和  
子 子 子 子

和 和 和 和  
子 子 子 子

和 和 和 和  
子 子 子 子

和 和 和 和  
子 子 子 子

和 和 和 和  
子 子 子 子

和 和 和 和  
子 子 子 子

車座の中から人の和が生まれ  
車座へ個性丸めて転げ込む  
欠点の無い子が一人いるクラス  
欠点を突ついて春を自覚めさず  
欠点にも人間らしい貌がある  
欠点をかくすと個性消えそう  
欠点を包んでくれる人がいる

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

吞 利 英 克 寿 信 優  
天 治 子 子 子 子 子 子

横浜あおば川柳会

清水 潮華報

真四角の顔で丸いことを言う  
逆光に輝く神の子の産毛  
病床に雪の輝き眩しすぎ  
輝いた日もあつたらう青アント  
百歳の輝き好きなバラの花  
どこから見ても輝いている好きな人  
ゴールまで輝いていよういふし銀

千里

春 柳 柳 柳 柳 柳 柳  
蘭 宏 宏 宏 宏 宏 宏

シ マ 柳 柳 柳 柳 柳 柳  
マ 宏 宏 宏 宏 宏 宏

柳 柳 柳 柳 柳 柳  
宏 宏 宏 宏 宏 宏

柳 柳 柳 柳 柳 柳  
宏 宏 宏 宏 宏 宏

柳 柳 柳 柳 柳 柳  
宏 宏 宏 宏 宏 宏

柳 柳 柳 柳 柳 柳  
宏 宏 宏 宏 宏 宏

柳 柳 柳 柳 柳 柳  
宏 宏 宏 宏 宏 宏

柳 柳 柳 柳 柳 柳  
宏 宏 宏 宏 宏 宏

柳 柳 柳 柳 柳 柳  
宏 宏 宏 宏 宏 宏

柳 柳 柳 柳 柳 柳  
宏 宏 宏 宏 宏 宏

柳 柳 柳 柳 柳 柳  
宏 宏 宏 宏 宏 宏

柳 柳 柳 柳 柳 柳  
宏 宏 宏 宏 宏 宏

柳 柳 柳 柳 柳 柳  
宏 宏 宏 宏 宏 宏

柳 柳 柳 柳 柳 柳  
宏 宏 宏 宏 宏 宏

の 欣 加 弥 弘 千  
ぼる 之 津 生 一 里

雅 敏 街 街 街 街 街 街  
子 敏 湖 湖 湖 湖 湖 湖

街 街 街 街 街 街  
湖 湖 湖 湖 湖 湖

街 街 街 街 街 街  
湖 湖 湖 湖 湖 湖

街 街 街 街 街 街  
湖 湖 湖 湖 湖 湖

街 街 街 街 街 街  
湖 湖 湖 湖 湖 湖

街 街 街 街 街 街  
湖 湖 湖 湖 湖 湖

街 街 街 街 街 街  
湖 湖 湖 湖 湖 湖

街 街 街 街 街 街  
湖 湖 湖 湖 湖 湖

街 街 街 街 街 街  
湖 湖 湖 湖 湖 湖

街 街 街 街 街 街  
湖 湖 湖 湖 湖 湖

街 街 街 街 街 街  
湖 湖 湖 湖 湖 湖

街 街 街 街 街 街  
湖 湖 湖 湖 湖 湖

街 街 街 街 街 街  
湖 湖 湖 湖 湖 湖

街 街 街 街 街 街  
湖 湖 湖 湖 湖 湖

街 街 街 街 街 街  
湖 湖 湖 湖 湖 湖

雷鳥に春告げられた銀世界  
人脈の広き葬儀に人を呼び  
一合の酒で広がる老いの夢  
献身の介護心の窓を開け  
春一番心の窓を開け放つ  
こだわりの食材畑から育て  
老い耄れと言われ老人腹を立て

川柳塔みちのく 小寺 花峯報

やわらかい言葉ナースの齒も笑い  
不況風なんて思えぬゴミの山  
満ち足りた日の夕焼けはやわらかい  
台所狭くしているゴミ袋  
雪とけてきたないゴミが顔を出し  
蓋しても死の影がさす核のゴミ  
ぞくぞくと青森目指す核のゴミ  
跡始末だれに頼ろう紙吹雪  
やわらかい色で春呼ぶウインドー  
名山の姿に唸る奴傭  
ゴミにならぬように散骨たのみます  
風唸る海の向こうにちちがある  
生ゴミの堆肥見事にトマト出来  
迷路から抜けるとはしゃぐ唸り独楽  
お豆腐が読経を聴く針供養  
敗け犬が唸ると風が吹いてくる

岩見川柳会 石谷美恵子報

何回も回して何も出ぬ帽子  
にんげんを忘れるマンシヨンの鉄扉

笑子 裕峰 徳三 和可 嘉信 潮華 満秋

一光 妙子 ヒサ子 隼人 順風 慕情 銀波 ふさゑ 花匠 愁女 ツネ 井蛙 黙人 一花 五楽庵 大漁 忠良

情報に流され闇に迷い込む  
原石が明日を信じてどき回り  
ホッチキスで綴じたりストラ計画書  
鉄腕の投手も負ける人の子だ  
ITより回覧板があたたかい  
鉄鍋を焦がした罪が癒えません  
すんなりのこよりは遠くホッチキス  
一人旅させてはくれぬホッチキス  
金になる情報だけを選び分ける  
怖いのはホッチキスだと紙語る  
モラル消え鉄のハートが増えて行く  
色気なく封書止めてるホッチキス  
鉄格子の中にも神はいるだろう  
地下鉄に乗ると血圧高くなる  
鍛えねば鉄と息子は直せない  
男を刻む熟女の口へホッチキス  
情報が寄つて賑わう露天風呂  
使い古した情報猫も踊らない  
ホッチキス固く他人にもなれず  
生き残るためアンテナを高く張る  
白髪から今日も知性がほとはしる  
ホッチキスが秘密書類を喋り出す  
一本気なわたした胸に鉄を抱く  
よく回る口が淋しいのだろうか  
目薬をさして情報読み分ける  
胸板も鋼もとかすいい女

川柳ねやがわ 江口 度報

かまくらに幻想を抱くボタン雪  
ルイ子

公乃 たぬ 蟹 孝男 完司 蟹郎 克枝 雅女 よしえ 多哥由 美津子 希久代 節子 裕子 喬水 美恵子 重忠 季芳 静生 徹 圭一郎 かつみ 一瑤 きみ子 一京 睦子

山男さがした嫁は雪女  
積るといいね窓の向こうは雪景色  
雪国の人から届く風邪見舞  
路のとう雪の重さに耐えて春  
同郷のよしみつつい甘くなる  
この孫は金の卵と未だ信じ  
欲目でも一流校は無理だろう  
親ごころ鶯が鷹産む夢を見る  
冷静な読み反論する欲目  
自己評価少し欲目にみてもしま  
そのまさかですと学校から電話  
第一問すらすら解けていい子感  
あの人に会える予感の回り道  
当たら困る予感を抱く見舞い  
いい天気姑がのこのこ来る予感  
天才の予感ゼロ歳児の目玉  
離婚してさっぱりしたと言う女  
さっぱりと別れ箸がないお茶がない  
旅終えて妻とさっぱりした茶漬  
出直しヘンショートカットの朝をゆく  
仲直りしたかさっぱり沙汰がない  
同じ道歩かせる親させぬ親  
春めいて少し淋しい北の宿  
騒ぐけど風は変らぬ新世紀  
チョコレートぐらいで釣れる男かい  
熱燗の首をつまんで子と語る  
この歳で叱ってくれる老母が居る  
黄昏のような手紙を書いている  
梅林へ春先取りに行くコート

日出国 冬葉 光子 博泉 恵子 勇太郎 三郎 一笑 庸佑 仁清 忠央 高栄 時弘 とし子 かすみ あやめ 亜成 柳弘 朝子 茜 弘一 波留吉 弘風 一風 たもつ 度礫

川柳塔打吹

米田 幸子報

愛しているだけでわくわくチーパツバ

大皿にわくわく盛ったバイキング

一歩先出たばつかりの風当り

歩き初めから九千二百万歩ほど

今日一日足枷になる腕時計

足枷にならないうちに灰になら

くるぶしはうからやからを曳いている

恋人の足枷ならば飛び込もう

風つぶして百八つまで歩く

足枷にならぬようにと万歩計

わくわくとするぜジャンボの抽選日

足枷がとれて毎日日曜日

わくわくと開けた封書は請求書

三億ほどあればわくわく別居する

山陰という足枷もまた楽し

昇進のウワサわくわく隠せない

足枷に蛍光塗料ぬっておく

露天風呂わくわく覗く垣根越し

手のひらで哀しい音になる歩幅

出不精が一步ふみ出て花開き

遊歩道恋のささずり聞こえ出す

殺つてから法律を知る十七歳

足枷に神経病がまといつく

雪が解ける重い足枷はずされる

生きているだけで付いてる足の枷

長閑さやゆるり歩いて梅天神

足枷になつても老後頼みます

雄々

博丈

完司

睦子

きみ子

宣子

ひろこ

石花菜

孝恵

玲坊

玲泉

和枝

よしえ

芳光

一夫

和歌子

晴光

美ツ千

龍枝

善江

セツ子

順子

やえ

照彦

重忠

芙美子

日溜まりに足枷のない老いがある  
わくわくを発酵させる壺がある  
足枷になつても生きていて欲しい

川柳高知

川竹

松風報

新人が天狗になつて消えてゆく

新人が来てパソコンが走りだす

新人に無礼講とは意地悪い

窓際にいる新人の良い笑顔

新人のもつ雰囲気にもまれだす

新入りにお爛まかせて太い顔

新人の無口火種を抱いていた

新人の目の上役はもう化石

厳寒で少し遅咲き梅の花

晩学の辞書へ眼鏡を拭いている

老眼鏡買つて熟年の仲間入り

終電車酒の匂いも乗せて来る

薬草の匂いで亡母を憶はせる

香ばしい匂い残した母の手記

人間の欲戦争が匂い出す

穏やかに茶の香が匂う朝の膳

母さんのお乳の匂う児のほっぺ

梅林をゆっくり歩く老夫婦

南大阪川柳会

吉川

寿美報

座つたら横でケイタイ喋りだし

蟹かにカニ閉口ぎみの旅三日

せつかくの春もクシャミとかゆい目と

参つた参つた手も足も出ぬ三リンボ

泰山

節子

幸子

熊男

圭風

孝雄

幸

佳風

功

愛宏

快風

竹萌

てるみ

祥子

三郎

良雄

哲史

京子

典雄

美々

松風

重人

たもつ

直子

柳宏子

お隣の犬は夜通し吠えまくる  
度の過ぎるお辞儀へ閉口するおじぎ  
三日続けて同じオカズを食わされる  
いちげんも売ると問屋の低姿勢

資金繰り問屋もつらい天下り

丁稚から井池仕込みが今生きる

オーディオの部品問屋へする電話

大そろばんはじいた夢の問屋筋

CMにませた問屋の子供たち

問屋街昔の夢を置き忘れ

古稀すんで歩幅ちぢんだなと思つ

身長が二種ちぢみ幅がふえ

旅行から一氣にちぢむ愛の距離

ちぢかんだ大地がのびをする春だ

旅客機のちぢむ思いのニアミス

清濁両用の仮面を持つている強味

どっちにも取れる微笑返される

遠近両用世間の裏も見つくりして

一本で足るマフラーの裏表

妻と母両方演じ和を保つ

箸スプーン両方うまい外人さん

露天風呂美人のヌードでのぼせそう

先頭と距離をちぢめて待つチャンス

遠近のメガネ心は読めますか

BGM流れ問屋も近代化

目のやり場に困る車内のコンパクト

道端にしゃがんで携帯帯女の子

なきさ

千里

修

志華子

憲太郎

章久

雅文

くに子

としを

宏

度

叔子

洋子

朝子

東雲

萬的

幸子

寿美

柳伸

ひさ乃

日出子

遠野

庸佑

ダン吉

澄子

三男

幸報

毛利

柳会

むらくも

道端に

八重子

喜寿の春祝つて色紙に喜の字書く  
功成るも竹馬の友は君と呼ぶ  
あの元氣今日はマスクで風邪声で  
裸一貫男成功秘話を聞く  
生きがいは成功祈る母の胸  
風邪ひくな一言添える電話口  
コマーシャルのようには効かぬ風邪薬  
ふり返る余裕もなく今に生き  
成功の土産を提げてお国入り  
道端に春を見つけてふらふらと  
感謝して米寿を祝う有難し

ほたる川柳同好会

田辺正三郎報

麻酔覚め生きてる証 妻が居る  
何もせず日を過ごして八十路かな  
歩を合わせ話合わせて生きてる  
胎動のいのちはぐくむ妊婦服  
生き甲斐も中途半端が長持ちか  
生きるためやっただけだが叙勲受け  
ひたすらに生きたつもり回り道  
答はず生きて死ぬ事禅問答  
風船のように膨らむ消費税  
低金利わずかな利子へ税払い  
税務署が愛想良くなる申告期  
喜びも一分くらしい税還付  
給料に五パーセントがついてない  
政治家はパンパカパンと税つかう  
ゼロ金利税金だけは下がらない

定子 幸夫 島子 信夫 仲子 昭子 恵美子 昌 幸 安男 明朗 正安 吉太郎 昭子 喜美子 螢柳 信勝 春子 契子 だし मामи子 セツ子 緑骨 実 千里志 長一

よく聞けばちらほら妻の自慢なり  
我が儘がちらほら出ます旅三日  
ちらほらの入りにも前座熱演し  
ちらほらと霜置く髪に歳を知り  
ちらほらと白髪出て来た子も五十  
お年頃いいお話もちらほらと  
若白髪ちらほら気になるDNA  
成人式ちらほら混じる黒い髪  
ちらほらと人事異動の噂たち  
死に体の森さん退くを待つ株価  
遅い春へ首をのぼしているキリン  
吸いがらに長く待ったを語らせる  
満開の日が楽しみという桜

川柳藤井寺

高田美代子報

込み入った話にお茶が冷めている  
お茶代わり一升びんが友迎え  
老いてなお日々を楽しむお茶の友  
とときの玉露すこしかびくさい  
母わたし娘へ渡すお茶道具  
盛装を解いて普段のウーロン茶  
ビール飲む妻を横目に熱いお茶  
春ウララお茶で酔うてる花の下  
二杯目のお茶と男の棚おろし  
茶髪の子自分の答持っている  
平均と思つ暮らしにある茶漬  
お茶菓子を一寸気どった今日の客  
タラップを上る国家を背負う顔  
春の階段スミレタンポポ順に咲く

直次 保子 正三郎 よろろ 雪子 見晴 柳童 黒兔 いさむ 馬洗 桂子 祥風 久子 一知 かつみ 史郎 昭子 婦美枝 アキ 志洋 利武 扶美代 昌子 絹歌 雅枝 重人 シマ子

二世帯をつなく階段孫がいる  
階段を上り続けていく未来  
二階から声だけおとす受験生  
生きようと一段ごとにある戦  
階段のかずは私を試す数  
うちの犬大阪弁しか通じない  
保健所の犬の瞳を見ましたか  
どなたにも尻尾振ります犬の知恵  
愛犬家のモラルが道に落ちている  
負け犬が再起誓うて見る朝日  
ゲージから犬の目私離さない  
すがる目の犬に会うのはいつも冬  
叱られた日は犬小屋に犬といふ  
喜びを顔に出したいブルドック  
朝七時散歩をせかす犬の声  
置き棄亡母が掛けてた釘のあと

岬川柳会

八十田洞庵報

大切な名前浮かばぬまま眠る  
あこがれに追いつく長い足を持つ  
好きなのに無くしてしまふイヤリング  
すくすくと吾が色見せて椿咲く  
かなな層長くなつたらいつち上前  
人生の卒業までと気負い込む  
すくすくと育つためには餌運び  
月浴びて駱駝の背でハーモニカ  
老いてなお浮き名の友に嫉妬する  
セールスに見透かされてるお人好し  
年金というゴールへやつと辿りつき

悦子 和樹 マサ子 美代子 千里 桂子 幸子 鐘造 大八 喜代子 瑠美子 一筒 六點 恒雄 春蘭 年子 和美 令子 勝 野添 孝子 東雲 昌夫 里子 みつこ とみ

お先にどうぞ私の事はほつといて  
亡き夫の夢見て会った一周忌  
するずると睦月も去って悔いばかり

大きな声すくすく育った人だろう  
風邪のあと花粉で子報士がおどす  
介護する母に掃除を指図され

これも愛昼寝の妻に世話を焼く  
菜の花に埋もれればし蝶になる  
胸の内変れど同じ遍路みち

その歳のその年代の想い抱き  
不揃いのリンゴ見送る恩師の目  
欲言わぬ元気で育つただけでよい

廃校舎記念樹だけが天を突く  
酒タバコ医者者の注意は守らない

富柳会 池

森子報

冬の陽を通す障子の穴一つ  
お隣に仏と鬼が棲んでいる  
どこへ行く枯葉を散らす風の詩

闇ひとつ抜けて冬薔薇が笑う  
ブライドがあるので妥協できません  
錯覚を鳴りひびかせて躓すく

餅まきに大きな袋持って行く  
助走して節目の川は跳び越える  
安心を求めて透ける袋菓子

こたわればチャンス素通りしてしまふ  
不器用な生きる節目に金がない  
満身の汗しばり抜く茜雲

星にならないかと誘ったのは天使

大輪 悦子 ユミニ子 扶美代 蛙城 よし子 朋子 富美 茂平 みやこ 幸子 倅子 洞庵

春蘭 宏 信博 ひろこ 喜代子 萩乃 東雲 己代一 満秋 花梢 初太郎 年人 美代子

いとおいしい鬼に振り撒く五色豆  
ほうやがね好きな子いると嬉しそ  
冬ざれのまつり中にある節目

わたくしを変えたやさしき師の言葉  
慕情連綿ひたすら過去に水をやり  
自分史の節目に母が棲んでいる

少子化で風化がこわい子守歌  
愚痴つめた袋を捨てに一人旅  
おちよは口して数椿ほつほ

定年を機にパソコンに手を染める  
節目から節目へいのち一里塚  
地下足袋が伴侶わたしも喜寿となり

豆まいても鬼居居って動かない  
しあわせの袋に君のわらい顔  
同居中鬼は袋に入れてある

わたしたちまた袋小路でけつまずく  
節目から呼び出し状が来る四月

川柳ふうもん吟社 杉本 孝男報

欲望も野心も右の手でつかむ  
亭主の座やがてリコールされそうだ  
あれこれと世間噂を太らせる

右手にバター左手にない危機管理  
パイパイの右手操るママがいる  
リコールに地位も名誉も剥ぎ取られ

趣味多忙妻のパワーに負ける  
青春を茶髪に染めてデートする  
どの株も総理喋れば値が下がり

大吉へ賭けて薄氷踏んでいる

和夫 冬虹 扶美代 深雪 紅紫朗 アキ 昭水 けい子 和子 亮幹 一慧 信子 義清 欣之 かなこ 文子 森子

洋々 彰夫 鬼桜 忠良 蟹郎 裕子 美恵子 のり代 茶人 昌鼓

ごめんねと言われこっくり救しちゃう  
リコールをされた位でおじけな  
美女の顔スギの花粉が攻めてくる

リコールの利かぬ残土が宙に浮き  
左手も右手に負けぬ意地がある  
良い方へとって肩の荷軽くする

風邪引いて恋よりアンカ胸に抱き  
十円であれこれ神は頼まれる  
手を添えりハビィは頼まれる

あれこれそれ妻にはちゃんとうわかつとる  
除夜の風呂呂生きた証の垢洗う  
居酒屋で彼の好物見つけた

リコールの切符は秘書が持っている  
逆縁の道であれこれ踏み迷う  
リコールという切札を妻が持つ

右腕になったつもりが杖となる  
あれこれと哀しい指が人を刺す  
三十品あれこれ食べて痩せという

あれこれと理由をつけて飲んで  
飛ぶ鳥もリコールという矢で落ちる

川柳クラブわたの花 吉村 一風報

黄昏れてだんだんちびてゆく望み  
人生節目に夫の加護思う  
人間のドラマ見てながかけているマスク

風邪に似せて歯なしがかけているマスク  
ふるりの駅へトンネルあと一つ  
次の日も右に同じ日記帳

生きてゆく望みふつふつ日々新た

一京 茂登子 輪多朗 志げ緒 鐘旭 健一 由美子 喬男 孝男 一瑤 益子 春名 雅女 穀美 菜美 あきゑ 昌美 康博 良雄

ミツ子 君子 道江 春子 隆盛

花器だけがやたら目立って花わびしくつ目が最後が望みまた増える  
焦点が合わず会談物別れ

世も末か大臣よりもスポーツで  
みんなにはだまってそと旅に出る

気持ちよく目覚める命ありがとう  
探しもの此処やここやと言つてほし  
まなつらにあの日と同じ母が居る

手土産を糖尿尿に気をつかい  
子が引いて母の風邪引き点滴す

バススタブのピンクは爺の気に召さず  
生きているほうふらに似た浮き沈み

三世帯ときどき出たい一人旅  
赤ちようちんわたしもつられコップ酒

無人島あなたとならば生きられる  
待つ春に踵しつかり地につけて  
りハビりに歩く夢見る車椅子

珍しく手土産狙い何だろう  
風邪引いて好物ねだる孫の知恵

兄弟がよい子になった母の風邪  
郷里の島まるごと積んで友が来る

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

財布の底はたかくわいひ孫のため  
底抜けにひとり騒いだ後の虚無  
辞典には昔の知恵がつまつて  
辞典にもミスがあるぞと負けてない  
檜山にゲームセットの闇がある  
トランプのジョーカー私の手に戻る

美千子 恭一 奈良司 友甫 正純 朝子 一道 賢子 ますみ トシエ まさと いつふみ 春江 知佐子 美代子 民子 明 八寿子 圃道子 宏至 剛治

休日はテレビゲームと差し向かい  
シーソーゲーム親子の願いかみ合わず  
ピフテキを食べて戻つた勝ちゲーム  
すみません言えてた頃に戻りたい  
いつでも戻れる大きな胸がある

戻されるはずの辞表が受理される  
連れ戻す術なしハワイ沖九人  
デイサービス片手を上げて招き猫  
命ある間は迷うものとする

曇後晴 日記が長くなる  
年度末 主婦も区切りの春の旅  
名曲に尖つた心丸くなる

梅桜つつじと母にあるブラン  
省庁は減つて役職増えている  
目耳腰八十年のつけが来た

いやな記事読まずに済んだ休刊日  
故人との約束だから破れない

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

新世紀孫も期待を負わされる  
期待して橋を渡つた少女の日  
大胆なあくびして見る青い空  
期待され張切りすぎて空振り  
期待され雷のままの反抗期  
親のエゴ期待大きい一人っ子  
うまいお茶極楽トノボは何処へやら  
御期待に応えあいさつ二分間  
物忘れコンピュータの誤作動か  
新しい楽譜左へ持ちかえる

ただし 喜美子 紫香 重人 見清 柳宏子 つえ子 田英子 求芽 知香子 絹子 庸佑 祿骨 萬巳 靖巳 しげお

川柳塔おとり

原 みさを報

二個以上あると見比べしてしまふ  
じつと眼を交わす握手に嘘はない  
人を見る眼が肥えてきてまだひとり  
もやもやを打ち消す時は星を見る  
みんなには分らぬサイン決めてある  
個性ないみんな同じがいいと言ふ  
異越同舟みんなをだます芝居する  
校庭にドラマ残してみな巢立ち  
振り出しはみんな素直な桃だった  
窓という窓開け春の風入れる  
歩道橋みんな見上げて渡らない  
連風へみんなの思い揚げて春  
同人誌みんなの温い血が通う  
田も家も墓地まで売つて村を出る  
希望の芽みんな貰つて天を向く  
我が家では機密費みんなバレている  
へそくりをみんなはたい夢のくじ  
ストレスをみんな溶かした旅おえる  
ひとひとりあの日へ送る紙吹雪  
一枚の辞令で泣いた年もあり  
倒産で株券ただの紙になり  
ポケットの中で計算してる指  
算盤が合わぬ情けにほだされる  
愛情が一たす一を三にする  
じじと孫風呂の中から指を折る  
人生は計算出来ぬ道ばかり  
蔵算用だけで開けられず

せつ子 宏章 孝子 庸二 幸次郎 真一 雄々 舍人 風花 由多香 野草 以和万津 黙光 伝住 登美 雅通 清子 和子 艶子 邦昭 彰雄 千秋 紀子 富貴子 道子 弘

少子化の計算老いの村づくり  
もっ数はよまなくていい棺の蓋

翠洋会

小生  
みさを

句過ぎたけどバックしてあがいてる  
油断したではすまされぬ孫の守り

伽羅

セールスが油売ってる通り抜け  
油には油が溶けて悪に染み

寂子

芽の中に愛がようやくよくよく出  
つくしんぼようやくよくよく見付けた浅い春

希久子

定年日ようやく仮面脱ぎ捨てる  
躓いてやつと気付いた有頂天

照子

三代目漸く板につく祝辞  
決心がようやくよくついて紅をはく

靖巳

懐に辞表を入れたくそ度胸  
定年後妻の度胸が前に出る

周信

のど自慢に出るのだそわない度胸  
誘われておしやべりこころ癒えてくる

久峰

目の位置をかえてタスキをかけかえる  
こだわりを持たない母の生き上手

正坊

物余り二人世帯は買ひすぎる  
昇進のもうお前とは言えぬ友

春

不況風シャッター閉める店ふえる  
一身上の都合で下りる風の駅

尚士

会津八一のころに触れる奈良暮色  
芸術は爆発の顔 榊莫山

日の出

追伸に落し穴あり女文字  
この辺で脱皮をしたい花曇り

喜美子

舞夢

千梢

志華子

さと美

東雲

石舟

蕉子

正雄

澄子

春彼岸とび起きたけどまだ六時  
春風に誘われピンクふわり着る  
こだわりを少し残して朝のパン

絹子  
富子  
宣司

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

自分を笑い惚けの防止につとめてる  
罹災地に清めの雪がふり積もる

天雀

こんな小さな頭に浮かぶ世界地図  
夜桜の雰囲気にもう酔っている

晶子

手袋の穴に楽しもう酔っている  
幻の蝶が無人駅で消えた

千秋

母と娘の内緒話がよく弾む

すみゑ

母と娘の内緒話がよく弾む

田鶴

母と娘の内緒話がよく弾む

やえ

母と娘の内緒話がよく弾む

千春

母と娘の内緒話がよく弾む

麗

すみさか大賞誌上大会

課題 (各題2句ずつ・4句1組)  
「帯」 齋藤大雄・木田 栄・遠山可住

「自由吟」 岩村秀月・石山蛙柳・浜口剛史

北野岸柳・細川聖夜共選

用紙 便箋使用のこと

投句料 1,000円

締切 5月25日

発表 13年8月(発表誌呈)

賞20位まで有

投句先 千382須坂郵便局私書箱18号  
すみさか川柳社  
TEL 026124817288 中澤恵生

豊中川柳教室

とき 五月・九月(毎月第四日曜日)

(5月28日・6月25日・7月23日  
8月27日・9月24日) 5回

時刻 午後二時~四時

ところ 豊中市立中央公民館  
(阪急宝塚線曾根駅南東歩5分)

講師 橋高 薫風氏

会費 三千円(五回通し)

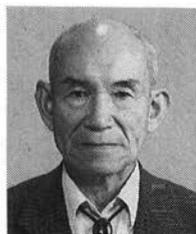
内容 川柳のころから作り方まで

申込先 豊中市島江町一―三十五―八〇一  
田中正坊方

もくせい川柳会

一枚のカードが乱す屋根瓦  
沈丁花雪背負いつつ香を放つ  
目に見えぬ怖い誘いに受話器おく  
病む人を優しく包むかすみ草  
幼児期のとても豊かな本の影  
譲られた席に薄日が差し込んだ  
地図のない地図を作って悦にいり  
ことづてに椿が咲いた路地のこと  
ハイポーズが笑っていた桜土手  
会釈するかわりに右手高く振る  
まだ老母の出番待つてる奥座敷  
春の音小鳥羽ばたく日も近い  
赤い糸手繰れば愛し春彼岸

富美子  
寿々子  
初枝  
てい子  
日枝子  
恵子  
八重子  
ふみ  
瑞枝  
千代  
なみ  
玲子  
春枝



# 乾 隆風さんを悼む！

さくら咲く日を近くして！！

中原 諷 人

火吹き竹 俺も一本持つている

昨年二月、ご子息の急逝に遭ってからは  
作品に淋しさの滲みを感じます。

満月の中にせがれの蜃気楼

それとなく支度をさせる曼珠沙華

極楽も地獄もこの世から続く

がちがちの老骨西の陽にさらす

新年一月に満一周年忌を終ったことを話して  
おられました。二月定例会の席題「影」  
の天位句に何とも侘しい句が出ました。

仏壇へせがれの影が呼びに来る  
そして、詠み納めになった三月例会では

崖つぶちに立って一歩も動けない  
人と言う意味をどんぞこから拾う

ふりがなを直してくれる生き字引  
崖つぶちに立つ灯台にも似たり

と己が心のかたちを遺されております。  
定例会や折々の大会には、骨太な呼名を

挙げておられた乾 隆風さん、懇親宴の度に  
日本酒が好きだった隆風さん、本当に残念で

たまりません。啓蟄が来たのに寒すぎる…、  
桜咲く日を近くに…、雪の舞う三月弥生。

隆風さんも楽しみにしてた国文祭とつとり  
2002のイベントが成功するよう見守って

ください。心からご冥福をお祈りします。

享年八〇歳 法名 釈 融法 合掌

平成三年七月から本社同人となり、頑張っ

てきた乾 隆風さんが三月四日(日)句会を  
散会した夜、突然に黄泉へ走ってしまつた。

人間味のある筋一本を通す方でした。

昭和五十四年十二月に生まれた 鹿野みか  
月ですが、軌道に乗り出した或る年の秋、  
今では作品の詳細について思い出せませんが、

町民文化祭の文芸展に隆風の名で二、三の色  
紙・短冊を出品されておりました。

「筆の穂先を切ると面白い字になるぜ…」と  
言つて居られたのが印象的です。

「隆風さんの句には穿ちもあり川柳になつて  
いる。是非一緒に川柳をやりませんか…」に

「僕の句は俳句ですけえ…」から川柳作家に  
なつて貰つたのが昭和六十年頃だつたように

憶い出しています。

新聞柳壇に投稿されるようになった或る日、  
「隆風の風が風になつとる…これからは隆風

で投句をして来いだらうか…」ということ

新聞社の誤植から乾 隆風の誕生なんです。

おたがいに身障者手帳を有し、町身障者福  
祉協会で正副の役員をやつた仲、私の同級生

(故人)に「長女が嫁がれた等の関係もあり、  
体調の良かった頃には一本提げて見え、飲み

ながらの川柳談義も花盛りしたものです。  
「笑い」と「ユーモア」と「バレ句」の勘違

いを正す酒の量も要りました。意固地な気質  
を持つた人でありました。

数年前に股関節の手術を施されてからは、  
歩行に杖が離せなくなり、座る折、立つ折の

苦勞を見受けたほです。  
最近の句の中から

面輪があつてポンコツまだ動く  
古いステッキも新世紀に向かう

葛藤はぶつたり根もとから切ろう  
白鳥の仲間ようこそいらっしやい

氏索性言わずどんぐり仲間なり  
二次会のしぐさに廁から抜ける

# 柳界展望

## 第64回の会 大阪川柳

日時—6月5日(火)17時開場 会場—サンケイ  
ビル本館3F322号室 題と選者—△逆・片  
岡湖風△客・久保田半蔵門△柔らか・藤田泰子  
△選ぶ・磯野いさむ 各題2句 席題なし  
会費—千円 18時締切

### 新同人紹介

江

見

見

清

—薫風・たもつ推薦

★川柳路吟社(小田原市)

の平成12年度「路」年間賞  
に、同人の千葉風樹氏が選  
ばれた。

〈最高賞〉

耕せばやがて見つかる父  
の遺書

★平成12年度いずも川柳会  
いずも賞に、伊藤寿美さん  
が選ばれた。

〈いずも賞〉

行きずりの人に花の名聞  
う花野

▽人事往来△

■3月14日、路郎・葎乃先  
生句碑建立打合わせのため  
薫風名誉主幹、天笑主幹、  
西村梨里さんは尾道行。

■3月19日、来る7月7日  
の除幕式並びに川柳大会打

合わせのため薫風名誉主幹、

天笑主幹は尾道行。

年記念) 日時—平成13年7  
月8日(日)午前10時受付開始

★3月24日の芸予地震は、  
広範囲にわたって強い揺れ  
があった。月原宵明(今治)

会場—函館五島軒本店(函  
館市末広町4—5 ☎013  
8—23—1106)

濱野奇童(弓削) 小島蘭幸  
(竹原) 赤川菊野(高知)

宿題1部(各題2句詠・事  
前投句) 「しつとり」渡辺

各氏の連絡によると、何れ  
も棚のものが落下する程度  
の被害で済んだとのこと。

裕子選「せつかけ」小林碧  
水選「きつかけ」高津戸明  
選 投句料—1千円・投句  
用紙有 投句締切—平成13

▽計 報▲

■山地マツエさん(同人・

年5月20日(消印有効)

香川県)は3月29日脳臓癌  
のため死亡。73歳。31日讖

投句先〒041-0835 函館市東山3  
—9—7 野崎麗舟宛

松寺での葬儀には多くの柳  
友がお見送りした。

★2001年・伝統から

宿題2部(各題2句詠・出  
席者のみ・締切11時30分)

明日へく平成13年知事・市

「紙」三浦強一選「血」佐  
藤甘太郎選「鏡」古川昌子

長杯授賞北海道川柳大会  
(兼・函館川柳社創立85周

選「箱」吉田一笑選 会費  
2千円北海道川柳連盟主催

### 吉本川柳

5月11日、7月11日締切り分については、  
都合により休みます。再開の節には改めて  
案内しますので、よろしく願います。

河内天笑

▽氏名変更△

■藪野ケイ子さん(同人名  
簿P22)は、藪野けい子と  
ひら仮名に改名

句会名	日時と題	会場と投句先
高槻川柳 サークル 卯の花	17日(木)正午から つなが・敷く・マンネリ そっくり・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
城北 川柳会	19日(土)午後1時から 個人・ガラス・そろそろ・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川柳会 梨花	19日(土)午前10時から 皐月・桐・泳ぐ・うつつ・雑詠	鳥取勤労者総合福祉センター(鳥取駅南)1F会議室 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4-268-205 宮木方 坂田和歌子
岸和田 川柳会	19日(土)午後1時半から 凄い・背筋・即座・体験	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川柳 ねやがわ	20日(日)正午から 恋人・無視・うっかり・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	20日(日)午後1時半から 手ごろ・家族・どことなく	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川柳会	21日(月)午後1時から 住む・コメント・極楽・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
南大阪 川柳会	23日(水)午後6時から 波・楽・向く・いぼ	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	25日(金)午前10時から 奥・マンネリ・悪口	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	26日(土)午後6時から 平凡・燃える・レール・岬	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市民会 川柳会	27日(日)午後1時から 喧嘩・広告・ベランダ 「交際」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 吟社	27日(日)午後1時から 許さん・セクハラ・どうして	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
川柳塔 みぞくち	28日(月)午後7時半から 鉢・毛虫・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
京都 塔の会	29日(火)午前11時半から 天・……ざかり・一同 当日雑感	吟行(神楽苑・5月号P.57参照) 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

## 5 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川柳塔 な	3日(木)午後1時から 行楽・暮・迎る	船橋フロムワン (船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ7分・JR奈良駅北歩5分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼崎 いくしま	4日(金)午後1時から 広場・赤・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
倉吉 川柳会	5日(土)午後1時から 目・いわゆる・話す	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 みちのく	5日(土)午後4時から 秘密・ぱっさり・驚く	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川柳塔 唐津支部	6日(日)午後1時半から 薄い・トラブル・倒れる	唐津市 栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田満町1-2-13 仁部四郎
ほたる 川柳 同好会	8日(火)午後1時から 開く・人間・ストレス	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼崎 尾浜 川柳会	8日(火)午後1時半から 帽子・ぴったり・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス⑨番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
堺川柳会	10日(木)午後1時から 泣く・鼻・いじめ	堺市総合福祉会館 3F ラウンジ 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
八尾市民 川柳会	10日(木)午後6時から 砂・直線・あだ名・進む	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川柳塔 まつえ	12日(土)午後1時半から 子供・鳥・緑	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
富柳会	12日(土)午後1時から 滴る・ひらひら・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
川柳塔 打吹	12日(土)午後1時から リラックス・沖・尻尾	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川柳塔 わかやま	13日(日)午後1時から 鰻・川柳・その後・五十音	近鉄カルチャーセンター 2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	14日(月)午後1時から 支度・枝・頼る・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子

## 編集後記

つて格調高い三代の作品を、何度か見たというのも近しく感じる要因である。

☆西尾菜七回忌川柳大会まであと数日となった。事前に申し込んで居られない方の当日参加も大歓迎なので、心からお待ちしています。

☆母子二代の文化勲章受賞者、上村松篁氏が98歳で亡くなった。ご存知の通り松園、松篁、淳之と三代続く日本画家で、淳之氏が私の

出身校の同窓会長であることから、上村一族に親しみを感している。

☆松園さんについては、宮尾登美子著の『序の舞』でその生涯を知り、とても感動したせいもある。高校の校長室に松園さんの「夕明り」が掛っていたことも親しく感じる理由の一つである。もう一つ、奈良の松伯美術館の近くに私の二男が住んでいるので、気軽に行

☆画家の元気な理由をつらつら考えてみた。絵を描くには自然の光が必要だから太陽と共に仕事をすることで、健康的な生活になるからではなかろうか。永六輔氏は「絵を描いては後ろに退つて眺める繰返し」つまり後退のフットワークが健康によいのだという。

☆私も普通のウォーキングを後歩きにし、宵っ張りの生活を改めねば…。(ふ)

## 震災御見舞

このたびの芸子地震・静岡中部地震により被害を受けられた同人、誌友の方々へ御見舞を申し上げます。

物心両面で何かとたいへんと存じますが、一日も早く元の暮しを取り戻されるよう念じております。

なお時節柄くれぐれも健康に留意されますよう、心からお祈り申し上げます。

川柳塔社

★「特定家庭用機器再商品化法」通称（家電リサイクル法）が、四月一日からスタートした。廃棄する際、一般家庭から言えば買い替える冷蔵庫、テレビ、洗濯機、エアコンの四種類にリサイクル料金と運搬費を商品に上乗せて払うとのこと。大ききにもよるだろうが、冷蔵庫は八千円近く負担するらしい。

★わが家では、阪神大震災のとき、破損を被り買い替えた。普通家電製品の耐用年数は十年から十五年だから、このリサイクル法にすっぱりはまってしまった。今年から縫いぐるみの人形動物をおもちゃの少ない国に贈ることにしたとか。

★さて、わたくしは山歩きを少々している。人里離れた山道で、粗大ゴミの不法投棄に出くわすこと再三。近頃は林道や農道も簡易舗装している。とは言え小型車にゴミを積みよくぞこの

★花は盛りには月ほくまなきをのみ見るものは

徒然草一文（よ）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「 発表（7月号）

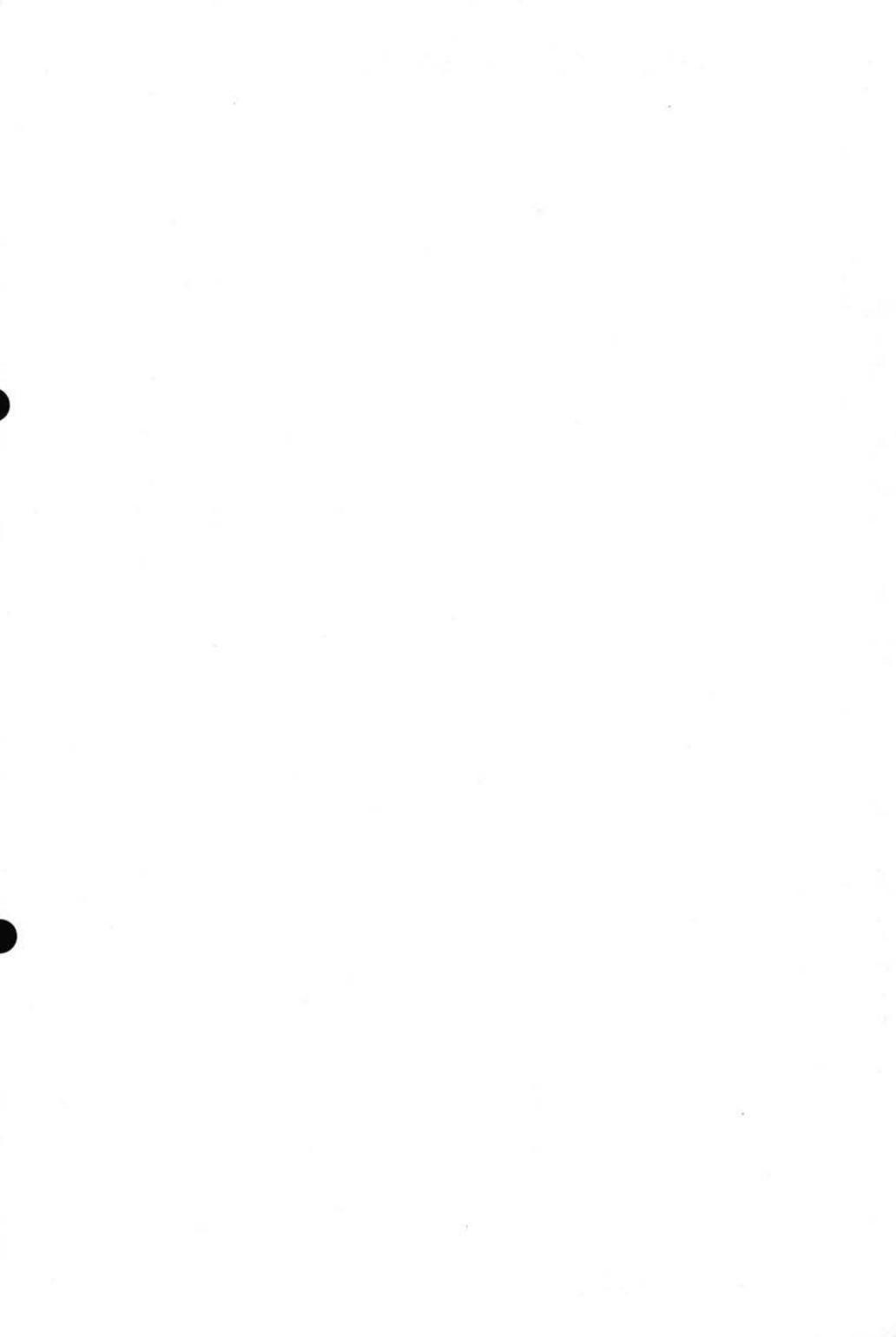
地名

姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



## 作品募集

初歩教室	課題吟 (3句)	「薄い」 「トラブル」 「倒れる」	吐田公一 担当
川柳塔 (8句)	水煙抄 (8句)	河内天笑 選	
愛染帖 (3句)	波多野五楽庵 選	板尾岳人 選	
茴香の花 (3句)	西出楓楽 選	後藤早智 選	
		矢内寿恵子 選	
		田辺鹿太 選	

7月号発表 (5月15日締切)

8月号

課題吟 「慕街」 「ドラマ」  
「困る」  
初歩教室

## 第20年度 夜市川柳募集

題	選者	締切
①「幕」	小島幸選	6月末
②「買う」	島本充子選	7月末
③「打つ」	新家完司選	8月末
④「大」	池森子選	9月末
⑤「美人」	門脇かずお選	10月末
⑥「歌う」	藤田泰子選	11月末
⑦「飲む」	両川洋々選	12月末
⑧「笑う」	大西泰世選	1月末
⑨「浮く」	大前田咲二選	2月末
⑩「二十」	天根夢草選	3月末
⑪「市」	春城年薰選	4月末
⑫「夜」	橋高薰風選	5月末

本社5月句会 5月5日

4月号表紙裏を参照下さい。

本社6月句会 6月7日(木)

兼題 「ゆかた」「青い」「騒ぐ」  
「今更」「鳴る」

## 夜市川柳募集

第12回「旗」 橋高薰風選  
ハガキに3句 5月末締切  
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3  
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用して下さい。
  - (2)愛染帖・茴香の花欄・一路集(課題吟)および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用して下さい。ただし茴香の花欄は女性だけ。
  - (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記して下さい。
  - (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

〒545-0005

定価 六百元(送料76円)  
半年分 四千元(送料共)  
一年分 七千九百元(同)

二〇〇二年(平成十三年)五月一日発行  
編集兼 河内権治  
発行人  
印刷所 美研アクト

大阪市阿倍野区三好町二一〇一四  
ウエムラ第2ビル202号室  
発行所 川柳塔社

電話(06)691-6914  
振替 〇〇九八〇一五三三三六八番



【イメージ・キーワード】  
“Value for Human”

バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール



オーエスケーの  
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540-0024 大阪市中央区南新町1-4-7

(06) 6941-9631

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。  
あなたの思いをかたちにします

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178